

クロスアンジュ 天使と  
竜の輪舞～デバステイ  
ター～

Mr. エメト

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

”マナ”と呼ばれる画期的な情報技術の発展により、戦争や環境などの諸問題がなくなり、世界に安寧の日々が訪れた。

だが、それはマナの恩恵を得られる人間のみにとって都合の良い偽りの平穏。

マナをあつかえない者たちは”ノーマ”という蔑称で反社会的な人物として虐げられ、”ノーマ管理法”と呼ばれる法律に基づき、社会から隔離されるといふ非人道的なあつかいを受けていた。

大国——ミスルギ皇国で普通に生活をしてきた青年だが、突然マナが無くなってしまったのだ。

ノーマとして認定され辺境軍事基地”アルゼナル”に強制収容され起動兵器　パラ  
メール”のライダーとなり次元からの侵略生物——ドラゴンとの戦いのが始まる。  
死と隣り合わせの地獄の世界に生き残ることはできるのか——。

# 目次

鮮血の拳 1

まつろわぬ魂・前編 7

まつろわぬ魂・中編 17

まつろわぬ魂・後編 25

黒き破壊者 36

故郷を無くした者たち 44

白き天使 51

反逆者―リベリオン― 58

孤独な二人・前編 66

孤独な二人・中編 72

孤独な二人・後編 79

流されて無人島 83

アンジュとタスクとリュガ 92

再会 99

変わらぬ絆 109

サリアの憂鬱 114

溜めていた思い 121

真実を求めて 133

決別の世界 141

竜の歌 前編 153

竜の歌 後編 162

誕生と真相 170

解放する怒り 前編 180

解放する怒り 後編 192

荒唐世界 202

もう一つの地球く再会く	—	216
もう一つの地球く母が遺した物く	—	223
トリアングルム	—	230
超絶進化	—	242
夜空の下に流れる涙	—	249
主人公&機体資料	—	257
敵対する仲間	—	262
決別の海 前編	—	272
決別の海 後編	—	279
調停者と監察者 前編	—	295
調停者と監察者 後編	—	302
ミスルギ皇国での戦い 前編	—	315

ミスルギ皇国での戦い 後編	—	328
ファイナルカウントダウン 前編	—	345



## 鮮血の拳

” マナ”。

それは人類が進化の果てに得たとされる、目に見えない万能物質。

マナによる技術発展により戦争、貧富の差、環境問題が消滅したとされる。

ミスルギ皇国のマンシヨンのある一室にて。

「マナが・・・無くなっている!？」

彼の名はリユガ・黒鋼・ホクト。

母と父は行方不明、独りで生活していたが、マナが使えなくなってしまった。

これは女性にしか発生しなはずなのにどうして？

呼び鈴が鳴らされ、心臓がドキツとするが深呼吸し、ドアを開ける。

「よお、遊びに来たぜ」

4人の友人だ。

それぞれ、シュージ、テンゲン、ゼノン、ニツクという名前だ。

「あ、ああ・・・いらっしやい」

「顔色が悪いがどうかしたのか？」

「連絡の一つ入れてなくて、驚きましたか？」

「大丈夫というわけでもないな……。皆に相談がある」

4人の友人は首をかしげるが、俺は腹を括って告白した

「マナが使えなくなつた!？」

「おいおい、本当かよ!？」

テンゲンとシュージが驚く。

「でも、女性だけしか発生しないのに、どうして……」

「……解らん。だが、俺は確実にノーマとして認定されるな……」

”ノーマ”。

マナによる干渉を全く受け付けない人間を指す。

マナを扱えないかわりにマナによる拘束も受け付けないため、犯罪を犯してもマナで

の捕縛ができない。

つまり、マナの崩壊を招く危険分子。

扱いは酷く、アルゼナルという場所に收容されると言う(ゼノンが情報を仕入れたが、

どうやったか不明……)

「ノーマに認定されて、社会から隔離、非人道的な扱いするなんて酷すぎると思うけど

な」



「いくらマナのおかげで世界が良くなったとしても、裏側は酷い事をしているね」

そう、マナが使えなくなったものはノーマという烙印が押される。

差別がないのはマナが使えるもの限定だ。

「けどな、俺は例えマナが使えないリユガでも親友だ」

「うん、一緒に遊んだ仲じゃないか、気にしないでよ」

きつと、もう一度、マナが使えるようになるかもしれないしさ」

「すまない、皆……」

「気にするな。ニツクもそう思うだろ? ……ニツク?」

姿が見えない。まさかだと思い、外へ行くと警官隊がいる。

「……その男を捕縛しろ!!」

リユガを連れて行かせないとテンゲン、シュージ、ゼノンは抑えようとするが、逆に警官隊に抑えられた

そして、リユガも捕まってしまったのだ。

「おい、やめろって!!」

「彼は僕たちの親友なんです!!連れて行かないでください!!」

シュージとゼノンがそう言うが、警官隊の後ろにニツクの姿が、まさか……

「ニツク!!お前が警察に連絡したのか!!」

「だ、だって!!リユガは危険なノーマなんだろう!?危険な奴を野放しにできないじゃないか!!」

ニツクの言葉にリユガは愕然とした。

信じていたのに!!信じていたのに!!信じていたのに!!信じていたのに!!

裏切られた!!裏切られた!!裏切られた!!裏切られた!!

何かが外れ、怒り、憎悪、殺意、破壊が溢れ出した。

取り押さえていた警官たちを力尽くで跳ね除けて、俺を貶めたニツクに腹部目掛けて

殴り——貫いた。

拳を引き抜き、臓物、血、脊髄の一部がビシャビシャと音が響く。

次に人々が悲鳴と絶叫が響く。

その後は——覚えていなかったが、一つだけ覚えていたことがある。

——人間をコワシタという事を。



手が動かない。真つ暗で視えない。

ここが、死後の世界かと思っていたが、突然、光が溢れる。

目を開けると眼鏡をかけた女性がいた。

「ナンバー130505、男性ノーマですか」

「・・・ここは何処なんだ」

「此処はノーマの収容所であり辺境の軍事基地アルゼナルです。

私は此処で監察官担当のエマ・ブロンソン以後はお見知りおきを」

「・・・ああ、そうかい」

ぶつきらぼうに話す。

エマは片眉を上げて見下している。

「ノーマとなったお前はもう此処で戦って生きる道しか残されていないのだからな」

エマの言葉に付け足す様にいかにも高圧的な女性が現れる

「アンタは？」

「私はアルゼナル総司令官のジルだ。此処では私の命令に従ってもらう他ないのだよ」

「だろうな。どのみち俺は人間を一人殺してしまったからな・・・。帰る場所もないか」

その言葉を聞いて、エマは少しだけ驚く。

「今、人を殺したと？」

「・・・親友だった男に裏切られ感情が溢れてな。

この拳で腹を貫通して、掌が真っ赤なに染まったんだ

処刑されかとおもったが、こんな所に送られるとは運が良いのか悪いのか」  
「・・・それは、お前がノーマだからだ。」

殺人鬼だろうともノーマである以上、ドラゴンと戦わねばならん。

それに貴重な男性だから、処分するわけにもいかないからね」

ジルはそう言つてエマと共に部屋へを出ていく。

しばらくして、女性の悲鳴が聞こえた、拷問されているのか。

「・・・どうなるのかね。俺の人生は・・・」

マナが無くなったうえ、人殺しという烙印が押された。

だったら、決まっている、ドラゴンを全て駆逐するまで。

## まつろわぬ魂・前編

「遙か時空を超えて侵攻してくる巨大敵性生物それがドラゴン。

そしてこのドラゴンを迎撃、殲滅し人類の繁斗を守るのが此処アルゼナルと私達ノーマの任務です。

ノーマはドラゴンを殺す兵器としてのみ生きる事を許されます。

その事を忘れずにしっかり戦いに励みましょう！」

「「「イエス！ マム！」」」

幼等部の教室でノーマの講師がまだ幼い少女達に教授する。

俺ともう一人の女性がそれを聞かされていた。

「分かったか？ リユガ、アンジュ」

「・・・はい」

「・・・」

その女性はミスルギ皇国第一皇女のアンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギだった。

家族ぐるみでノーマだという事を今迄隠し通してきたのだが戴冠式で実の兄に暴露されたという。

「マナが使える人間たちからは絶大な支持を得ていたが、ノーマだと知ってこれとは……。」

「その兄も権力が欲しいがためにかとつた行動とは、結局は人間が一番恐ろしいというわけか。」

「もうすぐミスルギ皇国からの解放命令が、届くはずですよ……。」

諦めが悪くアンジユは必死に希望を見出そうとする。

浅ましい考えだ。

「監察官、この二人を本日付で第一中隊に配属させます」

「だ、第一中隊にですか!？」

「ゾーラには既に通達済だ。二人共さっさとくるんだ」

「ちよ、ちよつと!?! 離して下さい!！」

「……了解」

ジルはアンジユの手を掴み連れて行く。

リユガは立ち上がり、その後をついていく。

「ふうーん、あれらがお噂の皇女殿下と男のノーマねえ……。」

「男の方はともかく、皇女殿下は、やんごとなきお顔に穢れを知らない甘くておいしそうですね」

「新しく来た子なら誰でもいいんでしょう？」

幼等部教室の丁度向かい側で金髪の女性が赤髪ツインテールの女性の体を触りながら眺めていた。

赤ツインの女性がモヤモヤしながら呟き、それに頷く薄青と茶髪の女性二人。

「なんだい？焼いてるのかい？」

「そ．．．それは．．．」

「可愛いなあ、お前達は」

「隊長！スキンシップは程々に。身辺からも揉み方が痛いと苦情が．．．」

そんな空気に痺れを切らしたのか藍ツインテールの女性が注意する。

「はいはい、気を付けるよ、副長〜」

「ううっ!？」

そんな注意を促しても手をワキワキさせてくるので咄嗟にガードする。

「年上の新兵さんと男の人もいますが新兵同志お二人共仲良くね」

ピンクロングの女性が藍ツインテールの持っていた名簿を覗き既に配属されていた新兵の二人にも促す。

「は、はい！」

それに元氣よく答えたまだ幼さの残る少女二人。

「ねえねえ、クイズしよう！誰が最初に死ぬのかな？」

少しオレンジがかった赤髪の少女がそんな事を言ってきたので皆、強張る。

「死なせないように教育するのが私達の仕事でしょ！」

「あいたつ!?ご……ごめん……」

「着いたぞ」

ジルに連れてこられたアンジュは未だに顔を俯かせており、リユガはアンジュの隣に立つ。

「ゾーラ、後は任せただぞ」

バシツとアンジュの尻を叩くジル。

アンジュはキツとジルを睨むが、ジルは涼しげな顔をして立ち去る

「イエス！マム！」

ゾーラと呼ばれた金髪女性とそのノーマ部隊の仲間であろう女性達はジルに敬礼する。

「総指令から一度されたが改めて自己紹介しよう。

ようこそ死の第一中隊へ、私は隊長のゾーラだ。

後のメンバーの事は副長、紹介してやれ」

ゾーラは隣にいた藍ツインテールの女性に促す。



「イエス！ マム、第一中隊副長のサリアだ。こちらから突撃班のヴィヴィアン」

「ヤッホー！」

ヴィヴィアンは薄ピンクのボサボサヘアの子がキャンディを舐めながら元気良く挨拶してくる。

「次にヒルダ」

「フン」

サリアとは相対した赤い髪のヒルダはいかにも威張りちらした笑みを浮かべていた。

「後、救護班のロザリーと・・・」

茶髪の姉御肌という感じのロザリーさんの紹介の途中、アンジュは口を開く。

「これ全部、ノーマなんですか？」

言っってはならないことを言いやがった。

「はんっ！ 私達ノーマは物扱いだ」

赤髪のヒルダが更に爆弾発言を被せてくる。

「このアマー！」

二人の発言、いや、どちらかといえはアンジュの発言に切れるロザリー。

「そうだよ。皆、アンジュとリュガも一緒のノーマ。仲良くしようね」

ヴィヴィアンが友好的にそう言ってくる。

「違います！」

私はミスルギ皇国の第一皇女、アンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギ！  
断じてノーマではありません！」

「でも使えないんでしょう？ マナ」

ヴィヴィアンのその言葉にアンジュリーゼは狼狽える。

「こゝ、此処ではマナの光が届かないだけです……此処から帰ればきつと……」  
まだ必死に否定しようとするアンジュリーゼ。

この世界中にマナの光は満ちてはいる筈だからそれはない。

あんな傲慢な性格だから、無理な話というわけか。

「そっちの君もマナが使えないからここに？」

「最初は使えていたがな。」

突然、マナが無くなってここに送られた。

まあ、もう一つの理由としては……連行される前に人殺ししたがな……  
「人を……殺した？」

「親友の一人に裏切られてな。俺は怒りのあまりそいつの腹をぶち抜いたんだ」  
ただ、ここに来た理由を話した。

皆はただ驚いているようだ、たった一人だけ除けば——。

「はは、ははははは！」

指令め、とんでもない者を回してきたか……。

状況認識がなっちやいない不良品と感情が制御できない殺人鬼か」

隊長のゾーラが豪快に笑う。

殺人鬼か、今の俺にお似合いな言葉だ。

「不良品は貴方の方でしよう！」

「不良品が上から偉そうにほざいてますわ」

「うわあ……痛い……」

アンジュの言葉に皆が呆れていた。

「そうだな。俺も皇女も最低の不良品で欠陥品だな。

その傲慢な性格でどれほどの周りを苦しめたのか。

あんたの父親も母親も兄も同じ最低のクズだよ」

その言葉にアンジュはリュガの胸ぐらを掴む。

「今の言葉を取り消しなさい!! 父上を、母上を侮辱するのはやめなさい!!」

「何度でも言おう。あんたとあんたの親と兄弟はクズだ」

「この……!!」

話の途中に痺れを切らしたのかヒルダが割って入ってきてアンジュの足を引っかけ

転ばせた。

「痛っ！な、何をするのです!?!」

「身の程をわきまえな、イタ姫さん」

「まあまあ、そのくらいで」

「エルシャ、こういう勘違い娘は最初でキッチリとしておいた方がいいんだよ」

「そうそう」

ピンクの綺麗なストレートロングヘアの優しい雰囲気を持った女性——エルシャがヒルダをなだめるが彼女は反論しそれにロザリーが賛同する。

「あらあらくそんなのお?」

天然なのか、それともこれが素なのか。

「はいはいお喋りはそこまでにしとけ。」

「サリア、期待の新人教育を任せるぞ、同じノーマとしてな」

「はい」

ゾーラ隊長が話を無理矢理占めアンジユに触れる。

アンジユは嫌な顔をしているようだ。

「これより訓練を開始する!」

エルシャ、クリス、ロザリー、一緒に来い!

遠距離砲撃戦のパターンを試す！」

「イエス！ マム！」

エルシャ、ロザリー、髪で片目を隠した銀髪三つ編みのクリスが敬礼する。

「サリア、ヴィヴィアン、ヒルダは新人教育を任せる。しっかりとやんな！」

「はい！」

「各自かかれ!!」

「イエッサー！」

隊長号令でアンジュ以外の他の皆がそれぞれ動き出す。

リュガはサリアの後をついていこうとするが……。

「何をボサツとしている？ こっちよアンジュ」

一人突っ立っているアンジュにサリアが誘導しようとする。

「何人たりとも皇女であるこの私に命令するなど！」

相変わらず態度を崩さないアンジュにサリアは懐からサバイバルナイフを取出しアンジュの首に、突き付けてくる

「此処での命令は絶対よ。良い？」

サリアのその気迫に押されたのかアンジュは首を縦に振った。

「……それから、リュガ、隊長が言っていた言葉、気にしなくてもいいのよ」

「・・・構わないよ。感情の制御もできない殺人鬼なのは甘んじて受け入れるさ」

## まつろわぬ魂・中編

急遽配給された男性用のパイロットスーツをサリアから受け取り着替えて訓練場へ向かう途中……。

「……んっ?」

どういうことか、アンジュが一糸纏わぬ姿をしておりドアを叩いていた。

「……何してんだ?」

「キヤツ!?み、見ないでください!!」

しやがんで、なんとか裸体を隠すアンジュ。

何が何だかさっぱりだが、ドアを軽く叩く。

「サリア副長、リュガだ」

ドア越しに声をかけると、扉が開きサリアが顔を覗く。

「あら、終わったのね」

「なんで、アンジュが真つ裸になって追い出されているんだ?」

「その子が、『そんな服を着るくらいなら、裸になった方がマシです!!』つと言ったから要望に応えただけよ」

アンジュのパイロットスーツを見ると血痕がある。

前の持ち主のか、女性だったら着たくもないし呪われそうだ。

結局、独りで着替えたことの無いアンジュはサリアの手伝いで着ることができた

◆アルゼナル 医務室◆

「はーあゝ。こんなに真つ赤に腫れ上がっちゃってえゝ。ジクジクジクになってるじゃないゝ」

「ぐ・・・痛っ!?!」

「痛い? 痛い? 痛いよねえ!」

人が痛がつている様子を見て危なく興奮している女医。

「酒臭いよ、マギー!」

「あいたつ!?! ゴメンねえゝ」

自身の腕を治療しているアルゼナル軍医マギーのおふざけにジルは鉄拳する。

「ジャスミン、そっちはどうなの?」

「外側のボルトが全部イカレちまつてる。ミスルギ皇国製の奴に替えとくからちよつと値が張るがね」



アルゼナルの唯一の市場「ジャスミン・モール」の店主ジャスミンがジルの義手の修理して結果を伝える

「指令部にツケとくよ」

「毎度あり、だけでもうちよいデリケートに使って欲しいものだねえ。」

「そいつはアンタ程頑丈に出来ちやあいないんだ」

「いつも悪いね。じゃじゃ馬が暴れてさ」

「ジャスミンの注意に申し訳なさそうにジルは言う。」

「ああ、例の皇女殿下かい？」

「いいのかねえ？ 皇女殿下と殺人鬼の男性を第一中隊なんかにはブツ込んじやつてさ」

「・・・それでも駄目なら死ぬだけだよ」

「ジルは不敵に笑いそう言い放つただけだった。」

◆アルゼナル 訓練場◆

「パラメイルデストロイヤーモード起動！ シュミレーター起動！ フリーダムチャンパー、チャージ完了！」

「フリーダムチャンパーチャージコンプリート！」

「アレステイニングギアリリース！」

「あ・・アレステイニングギアリリースコンプリート！」

訓練場に着くと既に訓練は開始されていた。

リュガとアンジユはマシンに座り、サリアが説明をする。

「これに乗り込んでドラゴンと戦うのか・・・」

「そう、パラメイル。私達ノーマの棺桶よ」

「・・・棺桶ね」

「何をさせようというのですか？この私に・・・」

アンジユもサリアの棺桶発言を気に出来ない程混乱しているようだった。

「最初から出来るなんて思っていない。後は飛ぶ感覚を体に叩き込んで」

「・・・まあ、善処する」

ボタンツと閉めて、サリアは操作する

「リクエストリフト・オフ！アンジユ機、リュガ機、ゴーフールド！ミツシヨン07ス

タート！」

サリアの号令で景色が一変する。

「ぐっ!!」

「うきやああー!?!」

次の瞬間、凄まじいGが二人に襲い掛かってきた。

「シユミレーターでこれだけのGがかかるのか……!」

「な、何なのですかコレは!」

たかがシユミレーターと侮りGの負荷に驚き、手を離しそうになったが耐える。

一方のアンジュは悲痛の声を上げ、操縦桿を手離してしまう。

「アンジュ、操縦桿から手を離さない!上昇!そして旋回!

リュガ、ちゃんと前を見て!実践はこんなもんじゃないわよ!」

サリアの更なる号令により機体の動きが変わる。

必死についていこうと踏ん張る。

「最後に急降下訓練に移る!降下開始!」

「急降下!?!うおおおっ!」

「ひゃああああー!」

「急いで!地面に激突してしまうわよ!機器を上げて!」

サリアは万が一の時の為に緊急停止ボタンに手を伸ばしておいたが――

(でも、なんだ?初めて乗るのに、知っている――?)

リュガの目つきが変わり、操縦桿を握り、地面に激突する前に上昇し、停止する。

「この感覚は……エアリア!!」

一方のアンジユもスポーツのやり方に似てすぐに機体を立て直し、遙か上空で停止したのを確認した。

「何なの……この子達は……」

サリアは初めてのはずの二人のシユミレーション結果に驚愕の意を隠せない。

「ほう……中々に良い筋をしているようじゃないか」

「隊長！」

訓練を終えたと同時に丁度、遠距離砲撃演習も終わったゾーラ隊長。

◆アルゼナル 浴室◆

「いやあー、大したもんだな皇女殿下とリユガは。

初めてのシユミレーターで漏らさないなんてなあ！

なあ、ロザリー？」

「い、いえ私の初めてはそのですね……」

ゾーラの質問に目が泳ぎつつ見当違いの返答をするロザリー。

「気に入ったみたいね、あの子と彼」

ロザリーのかわりに返答するヒルダ。

「ああ、悪くない」

「ねえねえ、サリア。アンジュとリュガって何？超面白いんだけど〜！」

ヴィヴィアンにそう質問され一番端側でシャワーを浴びているアンジュと今はこの場にはいないリュガの能力を見て感想を言う

「・・・今は、凄いの一言しか言えないわね」

〜数日後〜

エマがここ数日間で行ったアンジュとリュガの各技能テストの結果をジルに報告していた。

「例の新人達ですが基礎体力、反射神経、近接対応能力、更に戦術論のリタイヤ全てにおいて平均値を上回っております。

特にリュガは、恐ろしいほどの伸びを見せています」

「優秀じゃないか」

「ノーマの中では、ですね」

エマの皮肉にジルは苦笑いを返し、エマは敬礼し別れた。

一方のジルは格納庫に足を運んでいた。

「パラメイルの操縦敵性・・・特筆すべきものがある・・・ならば・・・」  
そういう彼女の前には二機のパラメイルがあつた。

一つは白、もう一つは黒のだった。

## まつろわぬ魂・後編

### ◆アルゼナル 食堂◆

ここは食堂。

兵士と言えど腹が減っては戦はできぬ。

新人のココとミランダは今日の献立を貰っている。

「わあー!」

ココはデザートのプロリンを貰って大喜びだ。

「またとつとくの? たかがプリンでお子様だなあ」

「もうお姉さんぶらないでよ。あ、リユガさんにアンジュさんじゃないですか!」

リユガとアンジュが座っている席を見つけたココとミランダ。

向かおうとするが――。

「おや? これはこれは痛姫さま。あんなに何でも出来ちゃうお方が好き嫌いく?」

「しつかり食べないといざつていう時に戦えないよお?」

ヒルダとクリスが嫌味を言う

「・・・よく食べられますわよね」

「あらあら、痛姫さまのお口には合いませんでしたかあ?」

ロザリーがアンジュの食事を奪い空になった食器を返す。

新人いびりというやつか……。

「……あんだ、そんなに食ったら太るぞ」

リュガの発言にロザリーは食を止め、キツと睨む。

「フフフ、言われたわねロザリー」

ヒルダがくくくつと笑う。

「う、ウルサイ!! 生意気なんだよ!!」

ロザリーが水をぶっかけようとしたが、リュガはすかさずコップを奪いそのまま握りつぶした。

掌を広げると、コップの破片が落ち、血がポタポタと落ちる。

「これがあんたの手だったら、骨が粉々になっていたかもな」

ゾツとするロザリーとクリス。

「あんだ、イタ姫様の味方するつもり? 殺人鬼さん」

「五月蠅いやつを脅しただけだ。友人なら、躰けぐらいはしておけ」

リュガはそう吐き捨てて、席を立ち離れる。

「イタ姫さま、一つ忠告しておくわ。」



此処はもうアンタのいた世界じゃない。

早く順応しないと・・・死ぬわよ」

ヒルダはアンジュにキツイ一言を言うが、それでもアンジュは完全に無視し席を離れた。

二人の前に、同じ新人の女の子が現れ、ココはアンジュにプリンをあげている。

「あ、私はミランダ。こっちの子はココですよろしく!」

「新人同士これからよろしくお願ひします!」

緑髪の子ミランダ、藍色の髪の子ココが自己紹介する。

「・・・リュガだ、今後ともヨロシク」

「は、はい!」

「さつき、アンジュに何を渡したんだ?」

「私の好物のプリンを是非アンジュ様には食べてもらいたくて!」

「・・・プリン?」

「この子、アンジュにベタ惚れのようだし」

「ああ・・・そういうこと」

この子の精一杯の気持ちを今のアンジュは微塵も理解できんだろう。

楽しそうに話すココ達の様子を見てふと思ひ出す。

ミスルギ皇国にいる友人たちは元気になっているのだろうか？

「どうしたんですか？」

「・・・ああ、向こうの友人の事を思い出してたんだ」

「お友達の事を思い出していたんですか？」

「私達は物心付く前から此処にいたからお母さんやお父さんの顔を全然知らないし」

ココやミランダの様な年端もいかぬ少女達は赤ん坊の頃から此処に連れてこられ兵士として育てられてきた。

残酷すぎるルールを作ったもんだな。

「あの、もしよろしければ・・・私達と友達になってくれませんか？」

「・・・なぜだ？」

「リュガさんが寂しくないように、友達になりたいんです。

もっと、外の世界のことについて知りたいです」

リュガは微笑んでココとミランダの頭を撫でる。

「ありがとうな。ココ、ミランダ」

◆アルゼナル ジャスミンモール◆

アンジュは紙とペンを購入したようだ。

だが、何に使うつもりなのだろうか？

「そういえばアンジュさんとリュガさんは外の世界ではどうやってお買物とかしてたんですか？」

「・・・望めば何だって手に入りました。

望んだ物が手に入る、望んだ自分がある。

かつての暴力や差別が無い。困った事は何一つ無くマナの光に満ちていました」

反吐が出そうな気分だが、何も言わずにしておく。

「リュガさんも同じような生活を？」

「俺とアンジュの生活は全然違うな。

ただ、普通に生活して友達とバカ騒ぎして楽しく暮らしていたぐらいだ」

「本当にあったんだ・・・魔法の国！」

一方のココはアンジュの話に関心しているようだ。

「ありがとうございます」

「あ、あの！」

それぞれの部屋に戻ろうとしたがココに呼び止められる。

「ま、また明日アンジュ様！リュガさん！」

「アンジュリーゼです」

「またな」

アンジュは本名で呼ぶように訂正し、リュガは手を振って別れる

〜数時間後〜

シャワーを浴び終えて、自室に帰ろうとした時、アンジュの声が聞こえた。

覗いてみると、そこは司令室のようだ。

アンジュはジルに他国の上層部に解放するよう働きかけをと明記した嘆願書を出してくれるようにと頼み込んでいた。

なるほど、昼間買った紙とペンはこの時に使おうとしたのか。

「まだ分かっていないの貴方は……」

エマも流石に呆れている。

「いやはや困ったものですよ。そいつの頭の固さには」

そこに、ゾーラが現れ、アンジュの頑固な態度にやれやれとしている。

「教育がなっていないぞゾーラ」

「申し訳ありません指令。だけど男の方は良い順応性じゃないか」

「……それはどうも」

「では、皇女殿下をお借りします」

「キャ!? ちよ、ちよっと!」

ゾーラは嫌がるアンジユを強引に何処かに連れて行った。

「はい・・・なんですつて!?! 司令!」

「きたか!」

「「エマーゼエンシー! 第一種攻勢警報発令!」

エマにジルは冷静に警報を流すようオペレーターに言うように促した。

「リユガ、お前も早く準備しろ!」

「・・・了解」

◆アルゼナル 格納庫◆

「全電源接続! 各機、ブレードエンジン始動! 弾薬装填を急げ!」

格納庫にメカニックらしい少女の慌ただしい声が響く。

「アンジユ貴方は後列一番左の、リユガは一番右のに搭乗するのよ」

サラアがこれからの作戦を指示する。

リユガに充てられたのは量産機の機体だ。

『第一中隊は各自準備完了次第対応せよ!』

「準備完了！いくぞ！」

エマの指示にゾーラ隊長が返答を告げる。

「生娘共、少年、初陣だ！訓練通りにやれば死なずに済む。

お前達は最後列から援護隊列を乱さぬよう落ち着いて状況に対処せよ！」

「いえ、イエス！マム！」

「了解！」

「・・・これって・・・」

ゾーラ隊長の指示にアンジユ以外の皆が了解の意を返した。

『全機発進準備完了！誘導員が発進デツキより離脱次第発進どうぞ！』

「よし！ゾーラ隊出撃！」

オペレーターが発令により誘導員達が離れたのを確認した直後、ゾーラ隊長が号令し

ベテランパイロット達が一足先に出撃した。

「大丈夫、落ち着いて行動しろ」

「う、うん、いきます！」

初の実戦で不安がるココとミランダに一声かけ少しでも不安を和らげてあげた。

ココ達が出撃したのを確認しリユガも出撃した。

『モノホンのパラメイルはどうだ？振り落とされるんじゃないよ！』

「は、はい！」

「了解」

ゾーラの通信に俺達も返す。

『目標視認距離まで後一万！』

『よし！各機、戦闘態勢！フォーメーションを組め！』

『イエス！ママ！』

「了解！」

オペレーターからの計算結果を見たゾーラは各機に指示を出す。

「位置についてアンジュ、リユガ」

「了解」

サリアの指示にリユガは即座に従ったがアンジュは――。

『アンジュ機、離脱！』

「・・・チツ！」

「・・・あの女」

サリアとリユガはアンジュを追いかける

「アンジュ戻って！もうすぐ戦闘区域なのよ!?!」

「私の名前はアンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギです。」

私は私のいるべき世界、ミスルギ皇国へと帰るのです!」

「お前は、今の状況を解っているのか!？」

「持場に早く戻りなさい! でないと貴方を命令違反により今此処で処罰するわよ!」

サリアは銃を取り出し、アンジュを脅しにかけるのだが――。

「アンジュリーゼ様、私も、私もミスルギ皇国へと連れて行って下さい!」

なんと、ココがアンジュに近づいて、連れて行ってほしいと頼みに入る。

「え!? な、何を言ってるの、ココ!？」

「私も魔法の国に!」

「ココ、今はそんなことをしている場合じゃない!!」

「そうよ! ココ考え直して!」

『真理が開きます!』

そこでオペレーターからの通告が入り、空に赤い稲妻が突如走る。

空を見上げると、何かが光る。

言葉を発するよりも、リュガはココに近づいて、強引に引つ張り、その場から離れる。

「リュガさん!？」

その直後、レーザーのようなものが、ココのパラメイルを破壊し水柱が上がる。

今のがドラゴンの攻撃だろう、一步遅かったらココが餌食になるところだった。



そんな中空間に歪みが生じドラゴンの群が出現する。

『ドラゴン・コンタクト!』

「……あれが、ドラゴン……」

「……な、なんなの? ……これ……」

アンジユも酷く混乱していたが、ドラゴンは雄たけびを上げて、睨んでいた

## 黒き破壊者

ココを救出したその矢先に、ドラゴンの群が出現する。

ピンク色の小型ドラゴンが20匹、青黒い巨大なドラゴンが2体が出現した。

『スクーナー級が20匹、ガレオン級が2匹』

「ガレオン級が2匹!？」

「1匹でも厄介なのに、2匹もくるものか・・・」

驚くロザリー、悪態するヒルダ

『総員聞け！新兵教育は中止。』

まずはカトンボを殲滅し、退路を確保する！

全機、駆逐形態！陣形空間方陣！』

「イエス！ママ！」

パラメイルの基本形態であるフライトモードから人型のデストロイヤーモードへと変形し応戦を開始する。

「命令違反の処分は？」

『後にしろ』

「・・・イエスマム・・・」

サリアは銃をしまい、ゾーラたちと合流する。

「・・・ゾーラ隊長、俺たちはどうすればいい?」

『なんとか、逃げ切り生き延びろ!! 私たちがドラゴンを引き付けておく!!』

「了解」

とにかく、逃げて生き延びるしかない

「アンジュ!! ミランダ!!とにかく、逃げるぞ!!」

だが、アンジュだけは命令を拒否していた。

「いやです!! 私はミスルギ皇国に帰ります!!」

「いい加減にしろ!!」

パラメイルだって出撃1回分の燃料しかない!! 皇国もどこにあるのかも解らない!!

お前の身勝手な理由でココが死んでしまう所だったんだぞ!!」

「それでも構いません。行ける所まで行って・・・あそこに戻らずに済むのであれば・・・

!!」

リユガは叱責しようとしたその時、小型のドラゴンたちがアンジュに狙いを定め襲っ

てくる。

「ひいつ?! いやあああああああああつ!!」

恐怖に駆られたアンジユは半狂乱し、その場を離れたのだった。

滅茶苦茶な軌道だが、それでもドラゴンから逃げているようだ。

『ガレオン級の一体が、リュウガ機を追ってます!!』

「なにっ!？」

オペレーターから最悪な事を言われたその時、猛獣のような雄叫びが後方から響く。

ガレオン級ドラゴンが俺を追いかけている。

リュウガは上手く減速し、ガレオン級ドラゴンの下を掻い潜り、逃げる。

だが、いつまでも逃げ切れるわけではない、やられてしまうのも時間の問題だ。

「ミランダ!! こっちに来てくれ!!」

ミランダを呼び寄せて、ココを抱きかかえて移す。

「リュウガさん、何を・・・?」

「俺が囷になる。お前たちは、アルゼナルまで退避しろ」

「そ、そんなの駄目です!!」

「急げ、時間がない!!」

リュウガはそう言っただれガレオン級ドラゴンへと向かう。

「ガレオン級は凍結バレットで心臓などの体組織を完全凍結させて殺すんだよな。

だが、倒せるのか・・・?」

逃げてもいずれば、食われてしまう。

生き延びるには・・・倒すしか方法がない。

回避しつつ、見計らって、変形しようとするがドラゴンの尾が左の翼に当たり破壊された。

「しまっ・・・!!」

機体が不安定になり、スピードが出ない。

このままでは、喰われてしまうという絶体絶命のその時だ。

突然、夜を切り裂くように漆黒のパラメイルがリュガの前に現れたのだ。

「なんだ!? 一体どこから!」

驚くことに、操縦席には誰もいない。

考えるのは後にして、今の機体を捨てて漆黒のパラメイルに乗り込む。

操縦桿を握ると鼓動がし、脳内にフラッシュバックする記憶。

断片的だが、幼い時の記憶だった。

——煙草を啣えている父親。

——優しく微笑む母親。

——地下倉庫で見た、黒い巨人。

頭を振るい、状況を再確認する。



完全に生命が停止したドラゴンは海へと落下した。

リユガの機体はドラゴンの返り血を浴びていたか血に塗れていた。

目に入ったのは小型ドラゴンたちに追いかけてられているミランダとココの姿だ。

「もう・・・ダメ!!」

ミランダとココは絶望しかけ、死を覚悟する。

ドラゴンは急降下し襲い掛かろうとしたが、リユガ機がドラゴンの首を掴み押し折る。

死体を後続のドラゴン目掛けて投げ、左手を換装しダイヤモンドカッターを射出し首を撥ね飛ばす。

ココとミランダが無事なのを確認した後、もう一匹のガレオン級ドラゴンを倒しに向かう。



一方のゾーラ隊。

小型のドラゴンの群を片付けて、最後に残ったガレオン級ドラゴンを仕留めに入る

「後はお前だけだよデカブツ、コイツでトドメだ!」

最後のガレオン級ドラゴン一体となった所でゾーラは油断していた。

「いやああああー!」

錯乱したアンジュがゾーラの機体に取り憑き身動きを封じてしまったのだ。

「アンジュ、何をやってるのよ!」

「何しやがる!?!アンジュ離れろ!」

この隙にガレオン級ドラゴンは翼でゾーラとアンジュを両方を叩き落す。

叩き落された二機は今にも地上に墜落しそうになった。

「ゾーラアアアアアアッ!!」

ヒルダが悲痛な叫びをあげる。

最早、助からないと誰もが思ったその時だ。

——ガキンツ!!

墜落しそうになった二機に、チェーンフックが巻き付いて阻止したのだ。

後ろを見ると、左手がクローラークレーンとなっている黒い機体——リュガが二人を助けたのだ。

「・・・なんとか、間に合ったか・・・」

「その声はリュガ!?!貴方の機体なの!?!」

「おお、いつの間に乗リ換えたの?かっこいいジャン!!」



ヴィヴィアンは興奮しているが、リユガは全く聞いてない。

もう一匹のガレオン級ドラゴンはいなくなっている。

何処かへと逃げたのだろう。

「・・・みんな、基地まで引き返すわよ。追撃するのも無理ね」

サリアが命令し、基地へと帰還する。

## 故郷を無くした者たち

### ◆アルゼナル 医務室◆

誰も死ぬこともなく、帰投した翌日。

だが、ドラゴンの攻撃が堪えたのかゾーラは重傷を負い意識不明の状態だった。いつ目を覚ますのか、解らない……。

「ゾーラ……」

「パラメイル4機大破、内メイルライダーが一名が意識不明。」

ドラゴンは撃ち漏らしたか。

「……アンジュ、これがお前の敵前逃亡がもたらした戦果だ」

「……なんとか言えよ！おい！」

「手出すなよ。一応は負傷者だからな」

ロザリーは手を出そうとしたがマギーに止められ、渋々下がる

「私は、私は故国に帰ろうとしただけで何も悪い事をしていません……」

「お前のせいでお姉様が大怪我したんだ！」

「・・・ノーマは、ノーマは人間ではありません」

アンジュは反省の色も見せず、ヒルダは蹴りを入れようとしたが――。

――パシんツ!!

リユガはアンジュの頬を叩いたのだ。

「・・・まだ解らないのか？」

お前の身勝手な理由で、ココ、ミランダは死ぬところだった。

ゾーラだつて、目を覚まさない状態だ。

それなのに、お前は・・・否定するということのか」

「私は、ただ・・・皇国に帰りたいだけです・・・」

「身勝手な・・・!!」

「落ちて馬鹿者、その怒りはドラゴンにぶつけておけ」

「・・・了解」

「サリア、ゾーラが動けない以上、お前が隊長だ。ヒルダは副長だ。いいな？」

「はいー!」

「撃ち漏らしたドラゴンが発見され次第、行動に移れ」

「イエス、ママ!」

皆が部屋を出ていくが――。

「リュガ、お前は残れ。大事な話がある」

ジルに呼び止められた。

ジルが懐から出したのはアンジュが書いた嘆願書だが、どれも受け取り拒否の印が押されていた。

「ミスルギ皇国は滅んだ。お前がノーマだと知り民衆たちはブチ切れたんだろう」

ジルの言葉を聞いて、アンジュとリュガは驚愕する。

いや、よく考えてみればそうだ。

宮廷クーデターによる皇室への信頼失墜、皇太子のジュリオだって人望があるとは思えない。

結果的に、ジュリオは権力が欲しいがあまりその結果、ミスルギ皇国は破滅した。

シュージ、テンゲン、ゼノンは無事なのか・・・？

「・・・これで、本当に故郷を失ったというわけか」

俯いて頭を振るリュガ。

それ以上にシヨックを受けていたのはアンジュだ。

「そんな・・・私の国が無くなるなんて。・・・お母様は？お父様は？お兄様は？シルヴィアは？」

「・・・お前たちに見せいたものがある」

◆アルゼナル 墓地◆

雨が降っており、其処には傘をしたジャスミンとゴーグルをつけている犬と一緒にいた。

ジルに案内されると其処には墓が並んでいたのだった。

「まさか、この墓は・・・」

「ドラゴンと戦い散っていたノーマたちだよ」

予想はしていたが、やはり戦いで亡くなった者たちの墓か・・・。

「ほんの少しマナが使えないだけではないですか！それだけでこんな地獄に！」

「お前達の作ったルールで此処にいる」

その言葉を聞いて、アンジュはミスルギ皇国で自分が行ったことを思い出す。

——人類の進化の果てに手にしたマナの光それを否定するノーマは本能のままに生きる。

——反社会的な化物・・・今すぐにも世界から隔離しなければなりません。

「わ、私は決してノーマなどでは・・・」

「では、貴様は一体なんだ？ココをミランダを死に追いやろうとし、

ゾーラを意識不明に追い込んだ貴様は一体なんだ!？」

「・・・私は・・・」

リュガはアンジュに叱責するが、アンジュは俯いて涙を流す。

「・・・その顔はなんだ? その眼は!? その涙はなんだ?！」

泣いていればマナが戻ってくるのか!? ドラゴンが来なくなるのか!？」

現実を認めて、逃げずに戦え!!」

「あなたに・・・あなたに何が解るんです!？」

母を目の前で奪われ、兄にも裏切られ、すべてを失った私の気持ち!!」

殴ろうとするが、アンジュの拳を受け止めて話を続けるリュガ

「本当に失うというのは、生きる意志を無くした者だ。

お前はまだ、生きる意志を持っている」

アンジュはリュガの瞳を見る、真っ直ぐで強い意志がヒシヒシと伝わる。

サリアが現れて、ドラゴンが出現したと報告をする。

「アンジュ、お前にうってつけの機体がある」

◆アルゼナル 格納庫◆

案内されると、埃かぶっているパラメールが鎮座していた。

「コイツがお前の機体だ。名はヴィルキスかなり古い機体だ

まともに動かせる奴がないのだがお前にコイツを任せよう。

死にたいのならばうってつけだろ？」

「ヴィルキス……」

「もつとも、もう一つの黒いパラメールはリユガが選んだようだけだな」

「ちよつと待て、あの黒いパラメールはいつたい何なんだ？何か知っているようだが？」

「……あの機体はお前の父親が造ったものだ」

「親父が!？」

「5年前、エルド・黒鋼・ホクトがこの基地に現れて、あの機体を渡したのだ

”こいつを乗りこなす奴は現れるはずだ。その時は渡してやってくれ” っと。

それから、彼は行方知れずとなった」

5年前と言え、両親は大きな仕事があると言って、出ていった時期だ。

それ以来から、帰ってこなかった。

「その時、俺の母さん……。いや、ミリル・黒鋼・ホクトと一緒にいなかったのか？」

「いや、その時はお前の父親だけだった」

ジルの説明を聴きリユガは黒い機体に触れる。

（親父が残した機体だとすれば、俺がノーマになる事を最初から知っていたのか？）  
果たして両親はいま、何処にいるのだろうか？

「名前とかあるのか？」

「無名だな。お前の父が息子につけろとな」

無名の機体というわけか。全く、親父も面倒な事をしてくれるもんだ。

「よし、お前の名はプルートだ」

黒い機体——プルートと名付けるリユガ。

いざ、ガレオン級ドラゴンを討伐へ向かうとしよう。

其処に、ミランダがいた。

「・・・ココは？」

「部屋で落ち込んでいるわ・・・」

「なら、傍にいてやれ。親友のお前とならココも安心する」

そう言つてプルートに乗り込むリユガ。

「リユガさん!!どうか・・・死なないで」

リユガは親指をグッと立てている。

必ず、帰ってくるということだろう。

いざ、戦場の空へ——。



## 白き天使

### ◆戦闘区域◆

ドラゴンの追撃部隊は、サリア、ヒルダ、ヴィヴィアン、エルシャ、ロザリー、クリス、アンジユ、リュガだ。

「お姉様をあんな目に遭わした奴と一緒に出撃イ!？」

「殺す、殺す、ブチ殺す・・・」

ロザリーは不満を漏らし、クリスは物騒な事を呟く。

「死ににいくそうだよ痛姫さまが」

「何？」

ヒルダさんの言葉に二人は首を傾げる。

「見せてもらおうじゃないか、死につぶりをさあ!」

「おお? なんじゃああの機体!? ねえサリア! アンジユのパラメール、ドキドキしない!？」

天真爛漫にはしゃぐヴィヴィアンだが、サリアは冷静に返事をする

「作戦中よヴィヴィアン、皆くるよ!!」

取り逃がしたガレオン級ドラゴンが海面から姿を現す。

「どうする隊長？」

「奴は瀕死よ一気にトドメを刺す！全機駆逐形態!!」

「!!」「イエス、マム!!」「!!」

「了解!!」

アンジュ以外、フライヤーモードからデストロイヤーモードになりドラゴンを倒しに行くが――。

【ガオオオオオオオオオオオオオオオオ!!】

「!？」

「サリア、下からくるみたいだ!」

なんと、ガレオン級ドラゴンは下に無数の光弾を発生させ攻撃してきた。

あのドラゴン、頭が回るようになったのか？

「こんな攻撃してくるなんて・・・過去のデータには無い・・・」

予測外のドラゴンの攻撃にサリアは混乱しているようだ。

「・・・どうすれば・・・」

「サリアちゃんどうするの？隊長は貴方なのよ!」

エルシャが必死に指示を仰ぐようにする。

ドラゴンが迫ってきている。

「か、回避！」

だが、サリアは遅れておりドラゴンが迫っていた。

リュガは、サリアの機体を掴み安全な方へと飛ばすが、代わりに捕まってしまった。

「リュガ!!」

「ちいっ!!」

【グルルルルル・・・】

ガレオン級ドラゴンは、なにやら憎しみに満ちている顔でリュガ機を睨んでいる。

「ああ、そうか。俺が昨日、殺したドラゴンはつがいか？」

俺をどうやって殺そうかと考えているのか？」

ドラゴンもただ人間を襲う本能に任せた獣かと思っていたが、気にくわない顔だ

「ガン飛ばすんじゃないよ!!」

左手を換装しダイヤモンドカッターを射出しドラゴン左面に刺さる。

悲鳴を上げるが、それでも離す気配がない。

次の攻撃を仕掛けようとした時、アンジュ機がこっちに近づいてくる。

「ちゃんと死ななきや・・・」

ドラゴンの狙いは近づいてくるアンジュに変わり、攻撃を仕掛けようとする。





リュガそう諭すと、アンジュは泣き始めた。  
ジルはアンジュとヴェルクスの覚醒を見てフツと笑っていた。

◆アルゼナル 墓地◆

太陽が沈み、オレンジ色に輝いていた。

アンジュとリュガは沈む太陽を見ていた。

「私には何も無い、もう何もいらぬ。

名前も、過去も……だから、私は生きる。

この過酷な世界で……」

アンジュはナイフを取り出し、髪を切り落とした。

皇女アンジュリーゼは死に、今この時から兵士アンジュとして生きるといふ決意の表れだろう。

「長髪もいいが、短髪も似合っているな」

「……それはどうも」

リュガは懐から取り出す、プリンだ。

「ココからだ。今度は捨てずに食べよ」

ズイツとプリンをアンジュに押し付ける。

アンジュは受け取り、プリンを食す。

どうしてか、一筋の涙が流れていた。

「美味いだろ？庶民のプリンでも」

「・・・不味いわよ」

口ではそう言っても、本当は美味しいと素直に言えないようだ。

リュガはそういうことにおいて、自分もココから貰ったプリンを食べる。

## 反逆者―リベリオン―

反逆者―リベリオン―

「三度の出撃で、この撃墜数・・・アンジユとリュガは大したものだよ」

執務室にはジルを初めジャスミン、マギー、サリア、メカニックのメイが集まっていた。

リュガの機体プルート、アンジユの機体ヴィルキスの活躍で襲ってくるドラゴンを全て排除してきた。

その結果を報告しているのであろう。

「いままで、誰にも動かせなかつたヴィルキスを乗りこなしている物ね」

「たぶん、ヴィルキスがアンジユを認めた。リュガのプルートも」

「始めるとしようか・・・リベルタスを」

ジルの言葉から出た“リベルタス”。

大規模な計画がいよいよ始まるうとしていたのだ。

「不満かサリア？」



「……すぐ死ぬわ。あの二人」

「アンジユはゾーラ隊長を負傷、リユガは単独で危ない戦いをしているものねえ」

—回想 戦闘区域—

スクーナー級ドラゴンを撃ち落とすアンジユ。

だが、ロザリーはワザとアンジユ目掛けて砲弾を放つがアンジユはこれを回避する。ヒルダが止めを刺そうとするが、アンジユは突き飛ばし、ガレオン級ドラゴンに凍結バレットを撃ちこんだ。

獲物を横取りされて、舌打ちをするヒルダ。

一方のリユガはガレオン級ドラゴンが放つ光弾を避けて接近、右手武器が油圧カッターとなり顔を縦に切断する。

チエーンソーに換装して、切断した顔から突き刺し、そのまままで切り裂く。

ガレオン級ドラゴンはまるでアジの開きとなる。

最後に心臓に凍結バレットを撃ちこむというこれほどにもない追い討ちをする。

海が凍結し、血の色が混ざった氷の塊が出来上がる。

ロザリーとクリスの方へと向き、二人が戦っているスクーナー級ドラゴン目掛けて、ダイヤモンドカッターを射出し撃墜する。

どうやら、リユガは獲物を横取りする気でドラゴンを討伐したのだ。

最後のガレオン級ドラゴンを仕留めようと、アンジュとリュガはお互い譲る気配もなく攻撃を仕掛ける。

ヴィルキスは接近し、剣を持ちドラゴンの顔面を連続で切る。

プルートは油圧クラッシュシャーとなりドラゴンの腹部を連続で穿つ。

「邪魔しないでくれる？」

「そいつは無理な相談だ」

言い争っているうちに、二人は次々と部位破壊をし、最後にアンジュとリュガが同時に止めを刺す。

ドラゴンは血ダルマになって海へと落ちていく。

—回想 終了—

今日のアンジュとリュガの無茶苦茶な戦闘を思い出すサリア。

「私なら、もつと上手くヴィルキスを使いこなせます!!」

「適材適所というやつだ」

ジルはバツサリ言うが、サリアは尚も食い下がる。

「もしも、ヴィルキスとプルートに何かあったら……!!」

「その時はメイがあの子機を直す!!命を懸けて、それが私たち一族の使命だから」  
 「しかし、黒鋼・ホクトという名前を聞いたとき、驚いたねえ。」

あのDr. パブロフの——エルドの息子だから乗れたというわけかい」

「お前はお前の使命を果たすんだ、いいね? サリア」

「でも、これからが忙しくなりそうだね」

「気取られない様にするんだ。特にエマ監察官にはな」

話が終わり、サリア、メイ、マギーが部屋を退室。

「ジル、あんたはどれだけ利用するのかい?」

「利用するものはなんだって、利用するさ。地獄は見て来たからな」

煙草を義手で握り潰すジル。

◆アルゼナル 給与カウンター◆

昨日のドラゴン討伐、弾薬、燃料消費、装甲修理など計算し、報酬金を受け取っている。

「撃破数スクーター級3、ガレオン級へのアンカー撃ち込み。」

弾薬消費、燃料消費、装甲消費等を差し引きして今週分は18万キャッシュ」

「つち、これっぽっちか」

少ない報酬金を受け取るロザリー。

「まだ、良い方だよ。私なんて一桁だから……」

クリスはハアーとため息している。

彼女が扱う機体はハウザータイプ。

砲撃戦が得意のパラメイルだが、中々稼げないためカスタマイズされてない。

そのため、被弾が目立つため一桁しか貰えないことが多い。

「ヒルダは？」

ロザリーの問いに、ヒルダは分厚い札束を見て二人は感動している。

「アンジュは550万キャッシュ、リュガは600万キャッシュ」

アンジュとリュガの大金を受け取っていた。

「アンジュ、リュガ。やるー!!」

「大活躍ですものね」

ヴィヴィアンとエルシャは二人の活躍に褒めている。

しかし、アンジュとリュガは必要な資金だけはとり、残りは預金した。

◆女子用更衣室◆

アンジュは自分のロッカーを開けると、中が落書きされており制服がボロボロとなっていた。

「また、貴方達ね」

「さあーねえ〜」

サリアが注意するのだが、ロザリーはしらを切っていた。だが、アンジュはボロボロになった制服を身に纏い、ロザリーを睨む。瞬時に近づきナイフを抜き、空を切る。

ナイフを納めると同時に、ロザリーのライダー服が切れ、胸が見てしまう。

「ひゃああああああああ!!」

「うぎ」

アンジュはただそれだけ言って更衣室を出る。

◆アルゼナル 食堂◆

「大丈夫ですよ、仕事も慣れてきましたし私がいる限り秩序を・・・」  
父に仕事の報告をしているエマ。

コーヒーを飲んでいる最中、アンジュの姿が目に入る。

ボロボロの制服を身に纏っており、思わず吹いた。

「と、と、止まりなさい!!」

アンジュは後ろからの声を聞き、立ち止まる。

「あなた、その恰好は何？ 秩序を乱す服装は慎みなさい。

まったく、そんな恰好をして恥ずかしくないのですか？」

「監察官殿は、虫に裸を見られて恥ずかしいと思いませんか？」

「えっ？」

アンジュはそう言つて敬礼して立ち去つた。

今度は食堂の方で騒ぎが起きている。

何かと思ひ、戻ると、リユガと別部隊ライダーと取つ組み合いになっている。

いや、リユガの方が優勢で相手は戦意喪失している。

リユガはそんなのお構いなしに相手の髪を掴み、今にも殴りにはいろいろとするが…

「そこ!!やめなさい!!」

「なんだ、監察官?」

「どういふことか、説明しなさい!!」

「こいつらが俺にケンカを売つてきたから力の差を解らせてやつただけだ」

リユガの視線には、既に軽く痛めつけた二人が泣いていた。

「だからって、髪を掴んで顔を殴ろうとしましたわよね!!」

「肩か腹に殴ろうとしたがな」

「屁理屈を言わない!!この件は司令に注意しておきますからね」

「了解」

リユガは心の中で舌打ちをし、相手の髪を離す。

「俺やアンジユの事を気にくわない連中がいるからケンカを吹っかけて来たんだ。監察官なら、こういう陰湿な連中に目を光らせてほしいもんだ」

リユガは連中に鋭い睨みをつけて、食堂を後にする。

エマが一番悩ませる事になるのがリユガだろう、胃が痛くなりそうだ・・・。

## 孤独な二人・前編

―再び更衣室―

アンジュに斬られた所を裁縫しているロザリー。

新しいの買えば済むことだが、そんなお金もない。

「あの二人にもつと徹底的にやんねえと」

「でも、リュガはお姉さまを助けたのに……?」

「あの男は、そんなに食ったら太る」って、暴言、吐いたんだぞ!」

あの時、アンジュの食事を奪った時のだ。

その点でロザリーはリュガも攻撃対象に入っている。

女性に対して太る、それは何処の世界でも最大の禁句なのだ

「まずはあの女からだ。私たちがお姉さまの敵をとるんだ。ヒルダの分もな」

Ⅱ 作戦Ⅰ・ワザと食器をぶつけるⅡ

アンジュが食事の配給を受け取るのを見たロザリー。



「おっとー！」

わざとらしく食器を投げるがアンジュは避けて、褐色肌のライダーに当たった

「てめええっ!!」

「ぎゃあああああっ!!」

食堂に、殴打とロザリーの悲鳴が響き渡る。

|| 作戦2. 水に下剤を混ぜる ||

アンジュとリュガがシミュレーターに入っている所に近づき、下剤入りの水をすり替える。

訓練が終わったアンジュはペットボトルを開けて飲もうとするが、違和感を感じる。

「ふふーん」

アンジュは首にかけていたタオルを投げる。

ロザリーの視線がそっちの方へと向いた隙に、先程の水を口移しで飲ませる。

アンジュはそのまま、立ち去る。

「うぐあっ!?!」

「ろ、ロザリー?」

ロザリーは腹を抱えて、トイレへダッシュした。

心配するクリスだが、肩を誰かに捕まれる。

振り向くと……。

「お前か、下剤入りをしたのは？」

リュガだ、彼の手には下剤入りの水を持っていた。

「えっ!?なんで、解ったの!？」

「飲もうとしたら、ロザリーが顔を悪くしてどこかに走っていたのを見てな。

で……お前も味わうか？」

ギリリツとクリスを睨む。

「(っ)……ごめん!!」

クリスは脱兎する。

|| 作戦3・弱みを握る ||

アンジュはシャワーを浴びている最中。

ロザリーとクリスはアンジュの弱みを握ろうと探っている。

「ろ、ロザリー!!これ!!」

「うわぁ・・・あいつとんだ、アバズレだったのか!!」

クリスが見つけたのは派手な下着だ。

「ふうーいい湯だったわ」

シャワーを浴び終えたエルシャ、ロザリーとクリスが視界に入る。

「こいつを廊下に張って、生き恥をさらしてやる」

「うん、色ボケ豚のメスビッチのパンツ」

「・・・もう一度、言ってくれないかしら?」

「色ボケ豚のメスビッチのパン・・・ツ・・・」

「えっ?」

ロザリーとクリスは声の方を向くと・・・。

「はぁーい、色ボケ豚のメスビッチでーす」

エルシャは指をバキバキとならしている。

笑顔だが、目が笑っていない。

ロザリーとクリスは目の前にドラゴン以上の恐怖がそこにいた。

この後、二人はエルシャの鉄拳制裁を食らう事に・・・。

シャワーを浴び終えたアンジュは制服を身に着けるが、胸部分がビリッと破けた

「・・・新しいの買うしかないわね」

## ◆アルゼナル ジャスミンモール◆

こここの巨大市場ジャスミンモールは日用品、食品、パラメイル用のカスタムパーツなどまで、取り扱う品目は多岐にわたる。

隣接するアミューズメントブースでは卓球やクレインゲーム、スマートボール、ビリヤードなどの娯楽設備も楽しめ、ノーマたちの憩いの場でもある。

ヴィヴィアンが大きな袋を持って武器の方を見ている。

「おばちゃん、コレいくらく？」

「お姉さんだろ!! ったく・・・。ソイツアは1800万キャッシュユだね」

「喜んで!」

ヴィヴィアンが選んだのは斧の様な武器を購入する。

リュガはヴィヴィアンが購入した武器を見て少し呆れていた。

「あんな武器、使いこなせるのか?」

「使いこなせるから、購入したんだよ」

「武器のせいにして死ぬようなことはするなよ。ジャスミン、このリストに載っている

奴はあるか?」

「ここは、ブラジャーから列車砲まであるジャスミンモールだよ。」

ダイヤモンドカッターとパイルバンカーの弾丸、それに電気モーターか」

「あのプルトの整備資料を見て、色んな物を装備すると違う効果があると書いてたから試しにな」

リュガはキャツシユを払い、お目当てのものを購入する。

すると、番犬が唸り声を上げる。

視線の方を向くと、ボロボロの制服を身に纏ったアンジユだ。

「おおー、セクシー」

「・・・涼しいそうな格好だな」

「随分、派手にやられたね」

それぞれの感想を述べるが、アンジユは制服代のキャツシユをジャスミンに渡す。

「毎度あり。しかし・・・なにをどうしたら、そんな風になるんだい？」

「大方、ロザリーとクリスにやられたんだらうな。」

「・・・それから、ジャスミン、花とかあるか？」

「あるにはあるけど何に使うんだい？」

「殺風景な部屋に少し、飾るだけだよ」

そう言つて、リュガはキャツシユを出し、花を購入する。

## 孤独な二人・中編

## ◆アルゼナル 指導教室◆

「ガス抜きと思つて見逃していたけどあまりにも目に余るわね」

「うう．．．」

流石にこれ以上、見過ごせなくなったのか正座されているロザリーとクリス。

エルシャに殴られた痕が残っているが．．．。

「でも．．．アンタ等何も思わないの？大切な仲間を危険な目に合わせて、

その上お姉様があんな事になって．．．あの女はのうのうと生活している事にさ!!」

「でも、アンジュちゃんは戦場に戻つて自分が行つたことも、償いをしたわ。

リュガくんもいなくなつたらゾーラ隊長も新人二人も生き延びることもなかつたかも

しれないわよ?」

「そ、それは．．．!」

エルシャの言葉に折れたのかロザリーは何も言えなくなりかけたが．．．

「それだけで納得出来るの?」

指令も何を考えているのやら．．．アノ二人にポンコツ機なんか与えてさ。

それとも、司令も気に行っちゃったんだあの二人に。

ま、そう考えれば変に優遇されているのにも納得がいくわ。

あの指令をたらしこむなんて大したもんだねえ・皇女殿下と殺人鬼はさぞベッドの上で……。アンタもそうなんでしょう？サリア」

「……上官侮辱罪よ！」

「……だから？」

サリアはサバイバルナイフを、ヒルダは拳銃を抜き互いに得物を向け合う。

「これ以上アンジュに手出しするのは許さないわ！今はこれで許しておくけど……」

「ふん……。行くわよ、ロザリー、クリス」

ヒルダ、ロザリー、クリスは部屋を出て行く。

「あの男はゾーラの事を助けてくれた事には感謝はするけど、所詮、人殺しよ。絶対に気を許しては駄目よ」

「ヒルダ……」

#### ◆サリア&ヴィヴィアンの部屋◆

(ジル……約束してくれたではないですか・ヴィルキスは私にとって……)

「ううくん・・欲しいのがあり過ぎるなあ。欲しい物が無いって寂しいよねえ。ここでクイズ！」

「な、何？」

ヴィヴィアンが自前の購入予定リストを見ながらサリアにクイズを出して来る。

一人物思いにふけていたサリアはハッと我に返って返答する。

「サリアは何を読んでいるのでしょうか？」

「指導教本、難しいわ」

「サリアまた怖い顔してるほら！」

「あ、ちよ、ちよつと!？」

ヴィヴィアンがサリアがかけていた眼鏡を外す。

「いつものアレを読んでる時の方が良い顔してるぞ？」

「アレ？」

「ほれ引出の二段目にあるさ、男と女がチュツチュする奴」

顔を少しだけ赤らめながら慌てたサリアはナイフを抜き、スレスレの壁に向かって投げ  
げる。

「いい加減にしなさい？今度漁ったら・・・」

狩人の目でヴィヴィアンを睨む。



「ご、ごめんちゃい！もうすぐ飯タイムだけどサリアも行く？」

「私はもうちよつと勉強してからにするわ」

「りよーかーい」

ヴィヴィアンは部屋を出で、食堂へと向かう途中――。

「おりよ？」

ヴィヴィアンは花を持っているリュガを見つけた。

何処に行くのかついてみるが・・・既にいなくなっていた。

「どうして、花なんかもってたんだろう？」

◆アルゼナル 医務室◆

「いらつしやーい。あらリュガじゃない？何処か怪我したの？」

「期待させているようだが、怪我ではなく花を飾りに来たんだ」

「あーら、残念」

マギーは怪我でないことを知ると不貞腐れる。

リュガはそんなことをお構いなしに、花瓶に花を入れてゾーラの傍に飾る。

「ま、こんなもんでいいだろ」

「あんたも随分とロマンチエストね。花を飾るなんて」

「なんだって、いいだろう。こいつをやるから内緒にしておけ」

マギーに酒を渡しておいて、医務室を後にする。

◆アルゼナル 格納庫◆

医務室でやることを終えてプルートの調整をしているリユガ。

父親が残していたプルートの整備方法などが記されている資料を見ている。

ちなみに整備班長のメイの許可は貰っている

「・・・やっぱ、父親に似たのかね」

昔から父は機械系の仕事が得意で、ミスルギ皇国の生活などに献上していたぐらいの天才だった。

そのためか、賞や勲章なども貰っているのを覚えている。

そんな父親に憧れたのか大学に入って機械工学に関する学科を取った。

「・・・解らないのが、どうしてプルートを乗りこなせたんだろうか？」

量産機。パラメイルとは違ってプルートは複雑過ぎる。

車で例えるなら量産機は良くて改造車、プルートは最高のレースカーだ

武装は工具や重機を戦闘用に改造しているようで、パーツを組み合わせれば効果は様々のようだ

先程、購入した電気モーターを組み込ませれば完成だ。

「お疲れ様」

不意に声が聞こえ、振り向くとエルシャだ。

「なんだ、エルシャか」

「聞いたわよ、他部隊のライダーとケンカしたって」

「あつちからケンカを売ってきたんだ。だから、それ相応を返したただけだ」

「リュガくんはどうして皆との壁を作っているの？」

エルシャの言葉に、作業を止める。

「そう見えるのか？」

「同郷のアンジュちゃんとも、仲良くしているわけでもないから・・・」

「あいつは元皇女で俺は機械工学が得意な元学生だ。生活も身分も違いがあるんだ」

そう言つて、最後の仕上げを終わらせて片づけをするリュガ。

「初出撃の時、隊長とアンジュちゃんを助けたのは？」

「・・・ただの気紛れに過ぎん」

エルシャはクスリッと笑った。

リユガはなぜ、笑っているんだと訝しんでいる。

「本当は優しい性格をしているのね」

「・・・意味が解らん。俺が優しいわけが・・・」

最後まで言おうとしたが、エルシャは後ろからリユガを抱きしめ頭を撫でる

突然のことで訳が分からなくなるが顔を赤くし、リユガはエルシャの抱擁を解く

「ふ、ふざけんな!!何すんだよ!?!」

「うふふふ、素直じゃない弟ができた感じで嬉しいのよ」

「・・・なんだそれ、意味が解らん」

「でも、独りだと寂しいわ。皆でいたほうがいいわよ。アンジュちゃんもリユガくんも」

本当は仲間が欲しいとは思っていた。

だけど、そんなことで甘えてはいけなさと決めていた。

こんな、殺人鬼なんかと仲良くできるわけがない

けど、もしも・・・許されるのなら・・・。

「・・・考えておくよ」

リユガはそう行って、歩き出しエルシャも後をついていき格納庫から立ち去る。

しかし、二人は気づいてなかった。

ヒルダがヴィルキスに細工をしていたことに・・・。

## 孤独な二人・後編

孤独な二人・後編

次の日――。

ドラゴンが出現し、格納庫は慌ただしくなっている。  
ライダーたちはそれぞれのパラメイルに乗り込む。

「総員騎乗！」

ドラゴン出撃警報が鳴る中、サリアが号令をかける。

「サリア隊、リユガ機ブルート、出る！」

エンジンをふかし、いざ出撃。

後ろに、ミランダとココの姿を確認し、いつもの仕事を始める。

◆戦闘区域◆

ブルートはスクーター級ドラゴンを牽制して動きを鈍らせる。

「ミランダ、ココ!!」

「はい!!」

ミランダとココに止めを刺させる。

例え、弱っているドラゴンを刈れば自信につながると思つてリユガはこういうことをしている。

「はあああー!!」

「アンジユ!勝手に突つ込むな!」

一方のアンジユはサリアの命令を無視しドラゴンに突撃をかける。

「ねえ、助けてやろうか?」

「!?!」

何故か一番アンジユの事を嫌っている筈のヒルダ副長さんが彼女を援護しようとしていた。

だが、アンジユはヒルダの言葉を見向きもせず、ドラゴンを討伐に行こうとした時、

「なっ……これは……!?!」

アンジユはヴィルキスの異常を感じる。

「何をやってるの!早く立て直すしなさい!」

異常に気が付かないサリアはアンジユに命令する。

それを確認したヒルダは不敵に笑いを浮かべていた。

「ヴィルキス!？」

「ちよつとサリアちゃん何処行く気なの!？大きいのが最優先よ!」

ヴィルキスはブースターの異常で失速し海に墜落した。

それを狙ったスクーナー級ドラゴンとの取っ組み合いの末に遂には海中に沈んでしまったのだ。

やつと気付いたサリアは慌ててヴィルキスを追おうとするがエルシャに止められてしまう。

「そんな!？ヴィルキスが!？」

気を取られているサリアの背後にドラゴンが迫ってくる。

「隊長、危ない!」

ドラゴンが嘯みつきに掛かろうとした。

しかし、サリアの間に左手が大砲に変形しているプレートが構えていた。

「ウェルダンにしてやるぜ」

発射口から火炎放射を放ち、ドラゴンの顔を焼き尽くす。

怯んだ所を狙い、電気が帯びたチエーンソーで心臓を突き刺し、ドラゴンを倒す。

「今はこっちに集中しろ!」





## 流されて無人島

アンジュは目を覚まし、目の前の光景に驚いていた。

「ごめん。一応、両手を縛っておいたから・・・」

男はそう言うが、アンジュはなにかされると思い、暴れる。

男は抑えようとするが、滑りアンジュの股に突っ込んでしまった。

目の前の光景には女性の大事な神秘があるのだ。

アンジュは男を横蹴りして、腹に足を乗せてから投げ飛ばす。

縄を切り、自分の服を持って洞窟から出る。

海岸の方まで走るとヴィルキスがあった。直ぐに発進しようとするが何も起きない。

調べると、焦げている部分があり、調べると下着が詰め込まれていた。

直ぐにあのヒルダの仕業だと知ると、下着を破り捨てる。

「酷いじゃないか、命の恩人になんてことを・・・」

蹴り投げた男がアンジュに近づくと、銃をとり足元を狙い撃つ。

男は後方に飛び退いて、手を上げる。

「それ以上、近づいたら・・・撃つわ」

「お、お、落ち着け!!俺は君に危害を加えるわけじゃない!!」

「縛って脱がせて抱き付いておいて、もつと卑猥で破廉恥なことをするつもりだったんでしよう」

顔を赤くし、銃口を男に向けるアンジユ。

男は弁明しようとしたが、足元にカニが近づいており、男の足を挟む。

「痛あああああ!!?」

突然の痛さに、驚きアンジユに倒れ込み、股を埋めるような感じになった。

「ぎ、ぎめん!!」

男は直ぐに離れるが、アンジユは顔を赤くして男に発砲する

しばらくして……

「変態!ケダモノ!発情期!!」

男を蔓でグルグルに縛り付けて、ズカズカと歩く。



その頃のアルゼナル——。

アンジユとヴィルキスが行方不明となり、司令室で今後の話をしていた。

「機体の調子はよかったのに、どうして……」

メイはあの時、もっと強くアンジュを止めていればこんな事にはならなかったと思っていた。

「アンジュとヴィルキスを回収するんだ。最悪、アンジュが死体になってもだ」  
死体になっても回収……。

ジルがそこまで、アンジュが必要である事にサリアは驚いていた。

回収班はメイとサリア、整備兵が輸送機に乗り込もうとするが、ヴィヴィアンとエルシャがこつちに向かってきた。

「アンジュ、まだ生きてる！ わかるもん」

「早く見つけてあげないとね、きつとお腹空かしてるわ」

ヴィヴィアンとエルシャはアンジュが生きていると信じている。

エルシャはサンドウィッチを入れるバスケットを持って準備万端だ。

メイが反論する前に二人は乗り込んだ。

顔は見合わせるメイとサリア、兎にも角にもアンジュとヴィルキスを搜索する。



非常食を探しているが見つからない。

不意にサリアやジャスミンの言葉を思い出す。

「ノーマの棺桶か……」

すると、海水が増している。

どうやら満潮し、アンジュは急いでその場を離れる。

空が曇りだし、雨が降りだし雷鳴がとどろく。

大木の穴を見つけて雨宿りするが、飢えと雨の寒さで体が震えるが何か痛みを感じる。

蛇が噛みついており、急いで振り払い、その場から走り出す。

どのくらい歩いたのか体力が低下してきた。

先程の蛇に毒があったのか、体もだるく雨による体温低下により、アンジュは倒れてしまう。

「だれか……誰も……助けてくれない……」

これが、自分の最期になるのかと思うと涙を流し、目を瞑る。

「あの……大丈夫？」

声の方を振り向くと、先ほど縛り上げた男がいた。

どうやら同じ場所に辿り着いてしまったようだ。

男はアンジュの苦しい表情を見て、何かあったと悟る。  
急いで蔦を切り、アンジュを抱きかかえて容体を調べる。  
蛇にかまれたことを知り、傷口から毒を吸い出して処置をする。



男は秘密の隠れ家で泥だらけになったアンジュの体を拭く。

アンジュが指に着けてる指輪を見て、幼い時の事を思い出す。

——紅蓮の炎が街を燃やす。

——両親は息絶えて、幼い自分は泣いている。

——片腕を無くした黒髪の女性と女神のオブジェがついていた白い機体。

「・・・ヴィルキス」

男はもう一度、アンジュを見る。

何故、この女性がヴィルキスに乗っていたのだろうか？

「・・・んっ」

気が付くと、最初に目覚めた洞窟だ。

「動かない方がいいよ。毒は吸い出したけど痺れは残っている。

それに、動けない女の子にエッチな事はしてないからね」

男は素晴らしいながら、スープを盛り付ける。

「これに懲りたら、あんな格好して森に入ったらダメだよ」

「・・・余計なお世話よ」

「食べる？」

「いらないわよ」

そう言うが、腹が鳴っている。身体が正直なのが恨めしくなってきた

渋々と口を開けて、食す。

「・・・不味い」

そう言いながらも口をアーンツとあけるアンジユ。

男はクスリツと笑う

「気に入ってもらえてよかったよ、ウミヘビのスープ」

ウミヘビという言葉にギョツとし、飲みこむアンジユ。

するとある言葉を思い出す。確か、蛇にかまれた部分は――。

「さつき、毒を吸ったと言ったわよね」

「うん、そうだけど・・・ハッ!？」

男は気が付き弁明するが・・・

ガブツ!!

「痛ああああああああああ!!?」

鼻を嘔まれたようだ・・・。



結局、見つからず基地に帰還した回収班。

エルシヤは飲み物を飲んでいた時に、ヒルダが待つていた。

「エルシヤのお得意のお節介かしら?」

「アンジュちゃんとりユガくんを誰かが受け入れてくれないと二人とも孤独になるわ。

そんなの寂しいじゃない、同じノーマだからね」

エルシヤの言葉に、納得ができないヒルダ。

「それにアンジュちゃんとりユガくん似ているじゃないの。」

昔のヒルダちゃんに。だから放っておけないの」

「似ている?あのクソ女と殺人鬼と?・・・殺しちゃうよ、あんたも」

ヒルダが脅して言うのと、その場を去る。

入れ違いにリユガはヒルダを見て、結果報告を聞く。

「アンジュは・・・見つからないようだな。その様子だと」

「心配していたの？」

「あいつがいないとドラゴン狩りに張り合うのがヒルダしかないからな」

「あらあら」

「・・・それに、あいつにはまだ帰る場所はある。俺には帰る場所が無い」

「ここに来る前に人を殺してしまい、殺人鬼という烙印が押されている。」

「だから、戻る場所も待ってってくれる人だっていない。」

「やっぱり、優しいわね」

「気のせいだろ」

「じゃあ、ゾーラ隊長に花を飾っているのも？」

「・・・見たのか？」

「エルシャは舌をペロツと出していた。」

「ブラフに引っかけたってしまったようだ。」

「隠しても仕方ないので、告白する。」

「・・・まあ、花ぐらい飾ってもバチが当たらんだろうと思ってな。」

「それに、ミランダとココが少しでも生き延びやすいように、パーツ用の資金を与えているんだよ」



「溜めていたお金をあの二人に使っていたの？」

「まあな……。ところで、俺も捜索隊に加わってもいいか？」

「リュガくんも？」

「ああ、ジル司令にブルートの出撃許可をもらってくる。

分散して、捜索した方がはやいだろう？ 異論は認めないからな」

そう言つて、ジル司令から捜索許可を貰いに行こうとする。

なんだかんだで、情を捨てきれないような気がしてきたリュガだった。

## アンジュとタスクとリユガ

次の日。

ヴィルキスを修理ができるということで、男は早速、作業に取り掛かっていた。

「貴方、マナが使えないの？それにどうしてパラメイルの事を知っているの？」

アンジュの問いに男は険しい表情をする。

「・・・俺はタスク。ただのタスクだよ」

そう言つて、男——タスクは整備を続ける。

「直せるの？」

「此処にはよくバラバラになったパラメイルが流れ着いてくるからいじっている内にね」

「へえ・・・」

タスクと一緒にヴィルキスの修復作業を手伝うアンジュ。

彼女は不意に自分を見失いかけたが叱責したりリユガと自分の事を助けてくれたタスク。

アンジュの心の中で少しずつだが、凍てついた心が溶けていくような気がしてきた。



その日の夜――。

浜辺で寝転んでいる二人。

無人島で楽しく日々を暮し、互いに打ち解けたようだ。

「空なんてずっと見てなかつたから……綺麗……」

アンジュは空を見て星を眺める。

タスクが顔を赤くして。

「君の方が綺麗さ」

アンジュは少しドキツとする。

良い雰囲気になるが、タスクはアンジュを押し倒すが、静かにしろというサインをする。

フツ、夜空にとなにかが見える。

「……凍結されたドラゴン？」

二人は凍結されたガレオン級ドラゴンが輸送されていくのを目撃していた。

そこにスクーナー級ドラゴン3匹が襲撃、輸送へりは反撃するもむなしく全て撃墜さ

れてしまった。

ドラゴンを輸送していた機体は全滅し、この島の奥へと墜落した。

タスクはアンジュの手を引っ張って逃げようとしたが、目の前にスクーター級ドラゴンが落ちて来た。

先程の戦闘でボロボロだが、二人を睨み襲い掛かってくる。

「パラメイルを今すぐ、直して!!」

「解った!!」

二人はヴィルキスがあった海岸へ向かう。

アンジュはナイフを構えて、ドラゴンに立ち向かおうとする。

ドラゴンはアンジュに喰ってかかろうとするが、翼で弾かれてナイフを落としてしま  
う。

「これを!!」

タスクはアサルトライフルをアンジュに投げ渡し、キャッチする。

急いで直さなければアンジュが喰われてしまう、焦ってしまうが落ち着いて修理を進  
める。

アサルトライフルを撃ち、牽制するがドラゴンの尾で弾かれてしまう。

喰いにかかろうとするが、アンジュの指輪が光、ヴィルキスが銃を持っていた手が動

きドラゴンへと発砲する。

不意をつかれたドラゴンが怯み、アンジュはこの機を逃さずドラゴンに攻撃を加えようとするが――。

目の前に黒い機体が現れ、ドラゴンを蹴り飛ばし、チェーンソーで心臓を突き刺す。

「よお、楽しいバカンスのようだな、アンジュ?」

「その声・・・リュガ!?!」

「男がパラメイルに乗っているのかい?」



朝日が昇りはじめ、一筋の陽光が照らす。

スクーター級ドラゴンの死体は海に攫われ、流れていく。

三人はその光景を静かに見守っていた。

「仲間を助けようとしたんだ。帰りがかったんだね、自分達の世界に・・・」

「ドラゴンはただ、人間を喰らう様な連中かと思っただが、仲間意識があるのか・・・」

「・・・リュガはどうして、ここに?」

「お前とヴィルキスの搜索していたところ、

輸送機とドラゴンが戦闘して島に落ちたの見て来たわけだよ。

しかし・・・いつから、彼氏持ちになったんだ？」

彼氏という言葉にアンジュは顔を赤くし反論する。

「そ、そういうわけではありません!!」

「はいはい。」

じゃあ、俺は救難信号を出して位置を知らせておくよ。

別れぐらい、二人つきりにしておくよ。

・・・キスぐらいしておけよ？」

「違います!!」

顔を赤くして怒るアンジュ、リュガは涼しそうな顔でプルートに乗り込んで救難信号を出す。

アンジュは深く息をついてタスクの方を向いて決意する。

「私、帰るわ。今はあそこしか、私の戻る場所はないみたいだから・・・」

「うん、お別れだね」

タスクが頷くが、アンジュはタスクの襟元を掴み、顔を赤めて言う

「いいこと？ 私とあなたは何もなかった。」

何も見られてないし、何もされてないし、どこも吸われてない。

全て忘れなさい!!いいわね!？」

「わ、解った・・・」

二人のやりとりにリュガは笑いを押し殺している。

アンジュは優しく微笑み自分の名前を名乗る。

「アンジュよ、タスク」

「良い名前だよ。またいつか・・・アンジュ」

「・・・ところで、あの黒いパラメイルに乗っている人は？」

「彼はリュガという男性のノーマよ。少し説教が五月蠅いけどね」

アンジュの言葉を聞いて、リュガとプルートを見るタスク。

しばらくして、サリアたちが到着し、アンジュとヴィルキスを回収する。

リュガはタスクの方を見てから、機体に取り込み後を追う。



タスクは荷物を持って墓標を後にする。

自分の隠れ家にはパラメイルの様な機体が置いてあり、二枚の写真を見る。

幼いタスクと両親と煙草をくわえた男性とおっとりした女性が写っている。

グーグルを見つけ、機体を駆り無人島を後にする。



## 再会

## ◆アルゼナル物資搬入場◆

「食料良し、薬品類良し……あーソイツは其処に運んでおいておくれ」

「確かに受領しました今後ともよろしくお願い致します」

ジャスマンは物資搬入の確認をしていたが、4つの影に気がついていなかった。

一方、今日もドラゴン狩りを終えて基地の廊下を歩いているアンジュたち。

ヒルダ、ロザリー、クリスの三人は不満な顔をしている。

「クソ！またアイツらだけ荒稼ぎしやがって！」

「……なんで生きてるの？」

「どつちがゴキブリなんだか……」

ロザリーは胸からネジを取り出しアンジュの頭部目がけて投げ突けようとする。

「アイツの頭にネジ穴開けてやる！」

「バレたら、指令に怒られるよ……」

シルの折檻が嫌なクリスはロザリーを止めようとする。

流石にシルの叱りが怖いのか躊躇うロザリー。

「バレなきやいいじやない」

「……それもそうだね」

ヒルダがそう言ったのでクリスも悪乗りする。

「そういうこと、これでも喰らいな害虫女！」

そうロザリーがネジを投げようとした瞬間、警報が鳴り出す。

「ひえっ!? 違います違います! 私何もしてませんよ!?!」

「ロザリー違うみたいよ」

「え?」

ヒルダに言われロザリーは顔を上げる、館内放送が鳴り響く。

《総員に告ぐ! アルゼナル内に数人の侵入者有! 対象は上部甲板を逃走中! 直ちに付近の者は侵入者確保に協力せよ!》

「侵入者!?!」

それに驚きを隠せないエルシャ、対してリュガは呆れた顔をしている。

「……って、警備がザルなのか?」

「とにかく向かいます! 上部甲板の侵入者を対処するわよ!」

「イエス・ママ!」

リュガたちは上部甲板へ向かう

## || 上部甲板 ||

「まったく、シュージがこけたせいで見つかったじゃないか」

「俺のせいにするなよ!!」

二人は逃げながらケンカしているが警備兵たちが現れて警備棒を振りかざすが小柄な少年がマナを使つて弾く。

「ケンカしないで、速く逃げよ!!」

「……残念だが、それは無理のようだ」

前も後ろにも警備兵たちが取り囲んでいる。

「すみません、三人にも迷惑をかけてしまって……」

「なーに、気にする事ねえよ。俺たちだって、アイツに会うために侵入したからさ」

「それに女性一人では、心細いだろう」

「でも、僕たちがピンチだよ……」

メイドと男性3人はどうするかと考えている。

アンジュとリュガは見覚えある姿と声を聞き、まさかだと思った。

「モモカ!!」

「シュージ、テンゲン、ゼノン!？」

声の方を見る侵入者たちは驚きの声を上げる。

「アンジュリーゼ様!!」

「「リュガ!!」」

◆アルゼナル 司令室◆

侵入者たちの正体はアンジュとリュガの知り合いと判明しエマは委員会と連絡している。

「モモカ・荻野目、シュージ・グラムス、テンゲン・ベルトル、ゼノン・スプリンです。はい・・・はい・・・。了解しました。」

「委員会はなんと?それとも・・・予想通りか?」

「最高機密であるアルゼナルとドラゴンの戦闘、それらが漏れたら・・・。」

あの四人はなんとかありませんか?ここに来ただけなのに」

「ただ、ここに来ただけねえ。ノーマの私に人間が作ったルールを変える事なんてできませんよ」

ジルは吹かした煙草を灰皿で潰し消す。



モモカはアンジュの部屋に、シュージ、テンゲン、ゼノンはリュガの部屋にいる。

「全く、危険を冒してまでこんな所に来るとは……」

「どうしても、リュガに会おうと思つてあのメイドさんと協力してここに来たんだ」

昔からシュージの無茶苦茶ぶりには解る。

けど、ここまでやるとは思わなかつた。

「……ニツクはどうなつたんだ？」

「ニツクはあの時、死んじまつたさ。即死だそうだ」

「腹が貫通し、出血多量、臓器と背骨の一部が破壊された」

「そう、か……」

やはり、あの時の一撃でニツクは死んでしまったのか。

「けど、ニツクだつて僕たちの事を親友として見ていなかったと思うよ。」

大学に入れたのだから親が権力と金の力で入つたようなもの。

僕たちと友人になつたのもただの番犬みたいな扱いしてたしさ」

「あいつは、ノーマの事が恐ろしい存在だと認識しているからな。無理もないさ」  
「…ミスルギ皇国が滅んだと聞いたが、本当なのか？」

三人はその言葉を聞いて、縦に頷きゼノンが口を開いた。

「リユガがアルゼナルに連行された三日後。

アンジュリーゼ皇女がノーマだとジュリオ皇太子が告白したんだ。

ノーマに関わった僕たちまで狙われることになったけど、なんとか逃げ延びたんだ」

「お前たちはアンジュのメイドとどうやって、知り合っただ？」

「なんとか、アルゼナルに入る方法を探していたところ偶然、出会ってな。

ゼノンとテンゲンの知恵でどうにか荷物に紛れ込んで侵入できたというわけよ」

「シュージが途中でドジを踏まなければ、バレずに済んだのだから」

「バレたらバレタでシュージがマナ使って、コンテナを兵士に向けてブン投げたから余

計に被害が出たからさ」

テンゲンとゼノンの言葉にリユガは苦笑いをする。

そういえば、シュージは後先を考えずに行動するし、怪我とかも多かったな。

今でも思うけど、どうして停学ならなかったのか不思議なぐらいだ。

「けど、親友と再会できて、よかったよ。これから、どうすればいいのか問題だけだね」

「危険を冒してまでここにきて、すまないが、俺はお前たちの親友には戻れない」

リユガの言葉に三人は驚愕する。

「ミスルギ皇国でお前たちと共に過ごしたリユガ・黒鋼・ホクトは死んだ。

今の俺はドラゴンを殺すノーマのリユガ。ただそれだけの存在だ」

「アンジュリーゼ皇女も髪を切つて、戦士の顔つきになつていたが、お前も」

テンゲンの言葉にリユガは頷く、空気が悪くなりかけたがゼノンが両手で叩く。

「まあまあ!!積もる話はあるけどさ、夜も遅いし寝ようよ」

ベットの数が足りないのが、シュージとテンゲンは寝袋を持っておりそれで寝ることに。

ゼノンは空いているベッドで寝る

三人が寝静まり、リユガは空に浮かんでいる満月を見て、眠りに入る。



◆アルゼナル 食堂付近◆

「ここつて飯とかあるのか」

「味はお前たちの口に合うか解らんが・・・」

四人は食堂へと歩いているが――。

「なんたることですか!!」

大きな声が響く。あの声の主はメイドのモモカのだ。

食堂の方へと急ぐとモモカが怒っている。

「アンジュリーゼ様に席を譲りなさい!!」

「やっぱ、イタ姫様のメイドね」

なにやら口論になっているようだ。

朝食を食べに来ていたココとミランダにに事実を聞く。

「あのモモカさんが”アンジュ様に席を譲りなさい”と言って、口論になっているんです」

「やっぱり、元皇女さまの従者だからかな……」

何にせよ、食堂で暴れるのはよろしくない。

止めに入るリユガはアンジュたちの方へと歩む。

「ストップ。朝からケンカか? 見えて飽きないな」

「あら、あんたも来ていたの?」

「腹が減ったから飯を喰う。それ以外になんの理由がある?」

モモカはリユガの顔を見て、何かを思い出す。

「もしかして、貴方は……人を殺したというノーマの?」



人殺しという言葉に苦い顔をするリュガ。

ロザリーが便乗する。

「そうだよ、イタ姫様のメイドさん。そいつは人殺しのノーマサ」

ロザリーが暴言を言うと、シユージからブチツと音が聞こえた。

「き、君!!今すぐ、謝った方が!!」

ゼノンがそういうが、既に遅い。

「なんだと!!このアバズレ!!」

シユージがロザリーの胸ぐらを掴み、持ち上げる。

「ロ、ロザリー!?!」

「何するのよ、あんた!!」

ヒルダがシユージに掴みにかかるが、シユージは椅子をヒルダに目掛けて蹴り飛ばす。

間一髪、避けるが蹴り飛ばした椅子は壁に直撃し粉々になった。

「あんた……!!」

今度はロザリーを投げようとするが、リュガは肩を掴む。

「シユージ、離してやれ」

「リュガ!!こいつは酷い事を言ったんだぞ!?!何も知らないで、軽々しく!!」

「シュージ!!頼む!!」

リュガの言葉にロザリーを離す、シュージ。

「……………すまない」

頭を下げるリュガはその場を後にする。

テンゲン、ゼノン、シュージは後を追いかける。

## 変わらぬ絆

自販機でハンバーガーを購入して簡単に食事を済ませる4人。

「けど、どうしてリュガが殺人鬼だって知っているんだろう？」

「言ったのは俺だ。遅かれ早かれ知るだろうから、言った方が楽だと思ってな」  
「変わってしまったなりユガ。前のお前は温厚で優しいが今はどうだ？」

まるで、戦を楽しむかのような狂戦士か破壊者みたいだ」

「テンゲン!!てめえまで!!」

シュージはテンゲンの言葉に反論するが、リュガは言葉をつづける

「テンゲンが言っていることは本当かもしれない。」

あの平和な日常が、退屈で窮屈を感じた、こっちは命の危険があるけど

ドラゴンと戦って飽きない日々が続くようになったよ」

「ミスルギ皇国で過ごしていた時、そんなにつまらないと感じたの？」

「おまえらと過ごした日々は楽しかったさ。あの時、ニツクを殺した時から何もかも壊れたから

兎にも角にも、お前たちの知っているリュガはニツクを殺した時に死んだ。

…すまないが、格納庫で機体の整備をする」

ハンバーガーを食い終わり食堂を出ていくリュガ。

格納庫へと向かう途中、司令室から声が聞こえる。

エマ監察官とジル司令官だ。

「では、四人は……」

「ここを知ってしまった以上、ミスルギ皇国に戻され処刑されるだろうな。」

この施設の秘密保持のために、な」

秘密保持のために処刑。

モモカ、テンゲン、シュージ、ゼノンは俺やアンジュに会いに来ただけなのに殺され

る。

なんとか、止めなければ……。アンジュを探しに、リュガは駆け出す。

◇ ◆ ◆

戦闘終了後。

「あんのアマ、戦闘中にアタシの機体をまた蹴っ飛ばしやがってえー！」

「邪魔って…私の事邪魔……」

「今日のアンジュとリュガはピリッピリだったにや〜！」

「何呑気な事言ってるの！とんでもない命令違反よあんなの！」

それぞれアンジュとリュガの行動に不満を持った愚痴を零す。

「まあまあ落ち着いてサリアちゃん」

エルシャはサリアを落ち着かせようとするがサリアは腕を組んでアンジュリュガの行動に憤慨する。

「これが落ちついていられる訳ないでしょう！ たった二人でほとんどのドラゴン狩られたんだから」

「悪いが、今回は説教を聞く気はないね。こっちは急いでやらなければいけないのでね」  
リュガはそう言つてアンジュと共に駆け足で準備をする。



滑走路にて荷物をまとめたモモカ、シユージ、テンゲン、ゼノン。

「お世話になりました、僅かでしたがお幸せでした。アンジュリーゼ様に伝えてください」

モモカはジルとエマに頭を下げる。

シユージとテンゲンは迎えの兵士が方に背負っている銃を見てヒソヒソと話す。

(やつぱ、この基地に一般の人間に知らされるのが不味いのか?)

(……おそらく我々を口封じするのだろうか)

船に乗ろうとする、モモカ、シユージ、テンゲン、ゼノン。

その時だった。

「待ちなさい!!」

「待ってくれ!!」

アンジュとリュガだ。両手になにか持つて走ってくる。

「その娘、私を買います!!」

袋の中には大金のキャツシユをジルとエマに置く。

「俺もだ。その三人を買う」

リュガも貯めていたキャツシユを置く。

「は?……はあー!?!」

アンジュとリュガの発言にエマは驚き目を丸くしている。

「ノーマが人間を買うく!?!こんな紙屑で!?!そんな事が許される訳が——!」

「いいだろう。移送は中止とする。その娘と男たちはこいつらのものだ」

「はい!?!」

ジルの放った発言にエマはまたしても驚きを隠せない。

「そーそんな……!ちよ、ちよつと待ってください!」

エマはマナを使い、二人分のキャツシユを持つて後を追う。

「ここにいてもいいのですか……。アンジュリーゼ様の御傍にいても、いいのですか?」

「…アンジュ。そう呼んで」

「はい、アンジュリーゼ様!!」

アンジュはフツと笑い、モモカは後を追いかける。

「結構、思い切ったことするな」

「よかったのか、あれほどの金を使って?」

「また稼げばいい。友人は失ったら戻ってこないからな。」

三人もアルゼナルで仕事ができるようジル司令に頼んでみるよ。

改めて、よろしくな」

リュガは笑顔で三人に向けて歩き出す。

三人は初めて見たリュガの笑顔に驚きしばし呆然するが後を追う。

## サリアの憂鬱

今回の出撃にて、アンジュとリュガがドラゴンを刈り尽した。

二人は報酬金を多く貰えたが……。

「てめーらが報酬独り占めしてるせいで、こっちはおまんまの食い上げだ！」

「ケンカ売る暇があったら、少しはドラゴンを早く倒すという考えをしたらどうだ？」

それに、俺やアンジュに弾丸撃っても弾の無駄遣いだ」

リュガはばつさりとロザリーに反論する。

「アンジュ、リュガ。何故、命令がきけないの？」

サリアがアンジュとリュガに尋ねる。

「ドラゴンなら倒しているじゃない」

「敵対するドラゴンを殲滅しているだけだ。その何が悪い？」

二人は当然の対処をしているためか、悪いとは思っていないようだ

「そういう問題じゃないわ!!これ以上、無視をするなら……!!」

「罰金でも処刑でもなんなりと」

「邪魔するなら、ドラゴンより先に始末する」



アンジュとリュガそう言ってその場を立ち去る



◆アルゼナル ◆ジルの部屋◆

「タスク、生きてたんだね、あのハナタレ坊主」

「アンジュを助けたのがあいつだったのね」

「じゃあヴィルクスを修理したのはその『騎士さん』だったんだ！」

「それでは、アンジュは男と2人つきりだったってこと!？」

サリアは思わず頬赤くして、アンジュとタスクの事を思う描く。

「ジャスミン、タスクとの連絡は任せたよ。いずれまた『彼ら』の力が必要になる」

「はいよ」

「それから、もう一人計画の参加するものを紹介する」

ジルがそう言うのと、其処にいたのはリュガだ。

その姿を見て驚くサリア。

「リュガ!?! どうして貴方が!?!」

「ジル司令が、俺の両親について教える条件に参加しろと言われたんでな」

「お前なら上手くやれる。期待しているぞサリア」

ジルの言葉にサリアは隊長としての重圧がくる。

流星にジルの言葉にマギーとジャスマンは顔を見合わせて心配になる

〜サリア隊長日誌 3月5日〜

◆アルゼナル 食堂◆

エマは先日のでアングジュとリュガに説教をしている

「ありえないわ！人間がノーマの使用人になるなんて！」

エマはアングジュがモモカを買い取った事にまだ納得していない様だった。

「ノーマは反社会的で無教養で不潔で、マナが使えない文明社会の不良品なのよ!？」

「はいはい」

アングジュは空になった器を置き、モモカが次の食事を差し出す。

リュガは監察官の言葉に五月蠅いのかぶつきらぼうに返す、

「それがどうした？ここは、ノーマが暮らすアルゼナル。」

監察官が言う人間様のルールとここのルールは違う。

まさか、そこまで頭まで固いわけではないだろう？」

「んなつ!?モモカさん、貴女はいいのですか!？」

「私は、こうしてアンジュリーゼ様に仕えて幸せです」

モモカの答えにエマはため息ついて落ち込む。

「良かったねモモカン、アンジュと一緒に居られて」

つとその中でエルシャがため息をする。

「どつたのエルシャ？」

「もうすぐフェスタの時期でしょ？、幼年部の子供たちに色々送ろうか迷ってるんだけど……」

エルシャが通帳を見て苦笑いしながら言い、それにサリアが聞く。

「アンジュとリュガせいよね。何とかしなくちゃ……」

「どんな罰でも金でなんとかするだろうねアイツら、聞きやしないさアンタの命令なんてさ」

アンジュの事を考えているとヒルダがサリアに何やら嫌みそう言い放って。

「何が言いたいのか？」

「舐められてるんだよアンタ。ゾーラが隊長だった時はこんな事なかった筈だけどね現隊長さん？」

「おっと、食堂でケンカはご法度だぜ。お嬢さん達」

第三の声の正体はコック服を身に纏ったシュージだ、デザートを運んでいるようだ。

「シュージはリユガの親友でしょ？なんとかならないかしら？」

「あいつ、昔から頑固なところがあるからな、聞いてくれるかどうか解らんぜ？」

それにこんな状況だから、本当に聞く耳持つのかどうか」

そう言いながら、シュージはババロアをみんなに配る。

ヴィヴィアンは「おおく!!」と目をキラキラと輝かせている。

サリアは席を立ち、食堂を離れようとする。

「食わねえのか？」

「遠慮するわ」

#### ◆アルゼナル ジャスミンモール◆

「皆・・・ほんと自分勝手、私だって好きで隊長をしてる訳じゃ・・・」

不満を持つサリア。

隊が身勝手な事ばかりとアンジュとリユガ好き勝手な行動と言う事にストレスを溜まらせていく事に徐々に耐え切れなくなり、彼女はそのままジャスミンモールへと向かう。

到着した所にジャスミンに札束を渡し、それにジャスミンに言う。

「……いつもの」

「……一番奥のを使いな」

サリアはジャスミンにキャツシユを払い、一番奥の個室を使う。

数分後、リユガがやってきて服を買いに来たようだ。

「ジャスミン、試着したいが……」

「一番奥のを使いな」

リユガにそう伝えて、一番奥へと向かう。

ジャスミンがキャツシユを数えている途中、思い出す。

「……………あつ」

さて、サリアが使用している試着室では……………。

「愛を集めて光をギュっ、恋のパワーでハートをキュン。美少女聖騎士プリティー・サリアン!!」

魔法少女の衣装を着こなしてポーズを決めて、フフツと笑う。

(※作者も思わず、腹筋崩壊を起こしたシーンでもある)

その時――。

「……………」

「……………あ」

サリアは引きつった顔で壊れたブリキ人形みたいにリユガの方を振り向く。

「……………邪魔した」

リユガはカーテンを静かに閉めて、速足で立ち去る。

ジャスマインはあちやーという顔をした。

(見られた見られた見られた!! よりもよって、リユガにいいいい!!)

このままでは、コスプレ隊長という不名誉が!!

ヒルダは笑うのはもちろん、ジル司令が失望した顔でため息をつくというイメージが  
過る

「……………こうなったら……………」

何か決意、いや、思いつめた顔をするサリア。

## 溜めていた思い

溜めていた思い

### ◆アルゼナル 医務室◆

「…………ふむ。なるほど」

テンゲンはマギーの助手として働いていた。

医学部に所属しているため、薬や手術の補佐もできる。

しかし、女性ライダーたちはテンゲン目当てで毎日、相談に乗っている。

「あの、お時間があれば食事はどうでしょうか？」

「生憎だが、食事をする時間はとれん。君たちの健康管理をしなければいかんので」

女性ライダーのカルテをスラスラと書いて返事をする。

フツと扉を見ると、サリアが凄みのある顔で歩いていた。

（…………あの表情からして、焦っているのか、それとも……）

### ◆アルゼナル リュガの部屋◆

リュガは部屋で寝転んで、サリアの姿を思い出す。

「……真面目な人間ほど変な趣味があるんだな……」

とにかく、脅しのネタ……もとい、笑いのネタになりそうだと思う。

ドアが開かれると、サリアだった。

心なしか、顔が赤く、怒っているような感じの表情だ。

「……よお、昼間の姿は面白かったぜ」

「忘れなさいよ!!」

ナイフを取り出し、リュガを斬りにかかろうとするが、避ける。

「あれを見られて、恥ずかしいから冷静な判断ができてないな、隊長さん。

あんたがどんな趣味を持っていようと俺には関係ないね!」

サリアの足を引っかけて転ばして距離を取るリュガ。

体勢を立て直したサリアはナイフを構えて斬りにかかる。

リュガは避ける素振りも見せず、ナイフの刃を素手で掴む。

これには驚くサリアだが、その隙についてリュガはナイフを取り放り投げる。

「おまえだって、俺とアンジュが死んでもいいと思ってるだろう?」

目の前で撃たれそうになっているにも関わらず、咎めようともしない。

俺はアンジュみたいに我慢強くもねえし、キレたらあいつらを殺そうかと思っていた



ぐらいだ」

ズカズカとサリアに近づいて、胸ぐらを掴む

「アンジュが海に沈む時、お前はアンジュではなくヴィルクスの方を心配してただろ？」

ヴィルクスを取られて悔しいとか思っているのか？」

的確な言葉を言われて、サリアは更に憤る

「……貴方に、貴方に何が解るのよ!？」

サリアは拳を振り上げて、リュガの頬を殴る。

「……解るわけないだろ、俺はあんたじゃない。アンタは俺でもない。どうするかは自分で考えろ」

そう言っつてリュガは自室を出て行く。

再び医務室。

「……それで、サリア隊長とケンカしてできたのか」

「……まあ、な」

「マギー医師がいたら確実に傷を増やすかもしれないぞ」

「すまん」

消毒、包帯を巻いて処置完了する。

「お前なら、避けれたことなのに何故、ワザと受けたんだ？」

「……少しでもサリアの負担を減らせればなと思つて。色々抱え込み過ぎて発散できればなと」

「不器用な性格だな」

そんな会話を医務室の入り口前でエルシャとヴィヴィアンは聴いていた。

---

翌日の戦闘区域、リユガは唐突にある提案をする。

「俺は5分の間、戦闘に参加せず待機する。殲滅できなかったら俺とアンジユの命を狙うようなことを二度とするな」

「いいわよ。受けて立つわ」

サリアが反論しようとするがヒルダが仕切る。

戦闘が始まり、ドラゴンはドンドン数を減らしていく。

あと少しで終わろうとするが、ガレオン級ドラゴンが4体も出現した

「うそ!!？」

「な、なんでこんな時に!？」

そして、5分経ちドラゴン殲滅が失敗する。

リュガはフツと笑い戦いの準備に入る。

左腕が大砲になり、肘部分からホースが出現し海へ伸ばす。

「汲み上げ開始」

駆動音が響き海水を汲み上げる。

発射口から海水の弾丸を勢いよく連射し残ったスクーター級ドラゴンたちの腹部を貫く。

超高压水発生ポンプで加圧された水は、音速の約3倍に達し、破壊力のあるウォータージェット。

レーダーの照準をガレオン級ドラゴンに合わせ、心臓目掛けてスナイプショットを決める。

次々と狙い撃ちをし心臓を大きく抉れたガレオン級ドラゴンたちは血を吐き、海へと没した。

「約束は守れよ」

ヒルダ、ロザリー、クリスはリュガを睨む。

ヴィヴィアン、エルシャ、ミランダ、ココはリュガの事を心配している。

サリアはまたしても命令違反に加えて独断行動をするリュガに悩ませる。

第一中隊の空気がますます悪くなっていくが、新たな反応が出現する。

現れたドラゴンは今までの飛行タイプではなく四足歩行タイプのドラゴン、特徴は巨大な角、獣の様な尻尾だ。

「もしかして、あれって……初物!？」

「新種のドラゴンということか」

「コイツの情報持ち帰るだけでも大金持ちだぜ!」

「どうせなら初物喰いして札束風呂で祝杯といこうじゃないか!」

ロザリー、クリス、ヒルダは先行し、新種ドラゴンに攻撃を仕掛ける。

こんな時に興奮するヴィヴィアンが妙に静かだ。

「どうした、いつものように歓喜しないのか?」

少し皮肉気に言うがヴィヴィアンが少し沈んだ表情をしていた。

「…なんだろうピリピリする。ヒルダ戻れ!」

ドラゴンが咆哮を上げたかと思うと角が光りその瞬間周囲が何かに包まれた。

ヴィヴィアンが警告を促したが時既に遅くヒルダ達の機体が囚われてしまった。

「なっ!？」

「う…動けねえ…」

「一体何なのコレ!？」

『新型ドラゴン周囲に高重力反応！』

「重力!?!」

オペレーターからの解析結果に驚く。

「ちっ、鈍重かと思ったが：そんなドラゴンか」

更にドラゴンが角を光らし、重力範囲を広げ始めた。

サリア、エルシャ、ヴィヴィアンが重力に捕まってしまった。

「皆を：はなせええええええええええ！」

なんとか立ち上がるとうとするヴィヴィアン。しかし、重力のせいで地に倒れてしま  
う。

重力場から逃れたアンジユ、リユガ、ココ、ミランダ。

どうにかしないと重力場に捕まった連中が潰されるのも時間の問題だ。

「ど、どうしよう……!?!」

「このままだと、皆さんが!!」

戸惑うココとミランダ。

「貴方の武器で何とかならないの?」

「カッターでもウォータージェットでも、重力に阻まれるしなあ」

「役に立たないわね」

「お互い様だろ」

どうするかと考えていたが、プルートの目が輝きだす。

なんとプルートの背から2本のアームが出現したのだ。

「へえー、こんな隠し武器があるとはね」

アームの先端がグラップルとなっている。

操縦席からゴーグルと腕をはめ込めるぐらいの装置が出できた。

仕組みを理解し、ゴーグルをつけて両腕をはめ込む。

「その角を押し折ってやる!!」

アームが伸びていき、重力をもともせず、ドラゴンの両角を掴む。

サリアたちの目の前に信じられない光景が起きた。

体格差は明らかなのに、大型ドラゴンを持ち上げたのだ。

「なっ!?!」

「嘘でしょ!?!」

サリアとヒルダが驚愕する。

「おおおー!!カッチョイイ!!」

ヴィヴィアンはいつも以上に興奮していた。

「おらああああああああああああつ!!」

一気に下まで振り下ろし大型ドラゴンを地面に叩き付けた。その衝撃は凄まじく、地面が陥没し、反動で、ドラゴンの角が両方とも押し折れたのだ。

すると、サリアたちを襲っていた重力が消えて、動くようになった。

「返す!!」

折った角をドラゴン目掛けてブン投げて、背中に当てる

重力が解けて動けるようになったサリアたち、後は倒せるだろう。

アンジユも参加しようとしたが……。

「待った」

アームを使い、ヴィルキスを捕縛する。

「な、何をするの!?!」

「今回はあいつらに任せよう。両角の重力がなければただのカカシだ」



基地へと帰還し、今回の戦闘配給している。

「うひょおー!こんな大金夢みたいだ!」

「夢じゃないよー！」

ロザリー達は山積みにもされたキャッシュユを見て顔を綻ばせていた。

あの新型ドラゴンはフリゲート級と新たに認定された。

「うー……」

「仕方ないか、角を押し折ったぐらいだし」

アンジュとリュガは今回の報酬が少なかつたようだ。

アンジュはリュガに止められて、攻撃に参加できなかつたし、リュガはドラゴンの角を押し折り、身体に突き刺しただけ。

一方の皆は分厚い報酬金を貰えたようだ。

「……その、ありがとう。リュガ」

「気にすんな。まあ、俺も意地を張り過ぎたし反省はする。………たぶん」

後半は聞こえないように小声で言う。

サリアに耳打ちをする。

（今度はそつちが約束を果たせ。秘密の趣味をばらされたくなければな？）

（うぐ……解つたわよ……）

コホンツと咳払いするサリア。

「色々あつたけれど私達はこのチームでやっていかなくちやいけない。



アンジュ、リュガも報酬独り占めやめなさい。アンタは放っておいても稼げるんだから。

「これは隊長命令よ」

「誰もアンタの言う事なんか聞きやしないって……」

「……良いわよ別に私の足さえ引つ張らなければね」

アンジュは予想外に肯定する。

「私も良い……かな。今回、リュガのおかげで助かったから……」

いつも隠れがちなクリスがそう言う。

「ま、まあ……私はしばらく金がある内はアタシも良いかな」

ロザリーも続けて言う。

「チツ……裏切者」

ヒルダは納得できないのか立ち去る。時間がかかるかもしれないな。

アンジュとモモ力はサリアたちと一緒に何処かへ行ったようだ。

自室に戻るとゼノンが待っていた。

「リュガ、君宛にだけど……何か知っているかい？」

マナ通信を開くとそこにはこう書かれていた

《私はシュレディングー、君の父の親友だ。君にあることを話したい。ミスルギ皇国で

待つ

謎の人物シュレディンガー。そして、滅んだとされるミスルギ皇国。  
また、新たな騒動が起きようとしている。

## 真実を求めて

「アンジュとヒルダが？」

事の始まりはマーメイドフェスタという公休日のことだった。

ローゼンブルム王国の王女であるミステイを人質をとったアンジュ、ヒルダ、モモカの三名はミスルギ皇国へと向かったのだ。

司令室でジル、ジャスミン、マギーと集まって今後のことを話していた。

「幸い、ミステイ王女は無事だったがアンジュとヒルダの姿が無い」

「それで、俺を呼び出した理由は？」

「アンジュとヒルダを連れもどせ」

「脱走したから、放っておいても……」

ミスルギ皇国。そこで待つというシユレインガーという人物。

それに、本当に滅んだのかどうか確かめるチャンスでもある。

「じゃじゃ馬でお転婆娘を連れもどす仕事でもしますかね」

「随分、聞き訳がいいな？」

リュガは紙をジルに渡す。

「シユレディンガーという人物だが、”ミスルギ皇国で待つ”。おかしくないか？皇国は滅んだはずじゃないのか？」

それにジルは口を閉ざし、リユガはジツと視る。

「まあ、言えない理由があるならいいけどさ。メイとゼノンにプルートを万全にしておくと言っておく」

リユガはそう言つて司令室を後にする。

ジャスミンはフム、と頷く

「……シユレディンガーって、あいつも動き出したのかい？」

「おそらくラプラスとカルネアデスも動き出すだろうな。計画の為に……」

煙草を灰皿へと潰すジル。

その眼にはわずかながら怒りがあつた。



アンジュとヒルダを搜索しに、ミスルギ皇国へ着いたリユガ。

プルートを隠し、帽子を被つて歩く。

アンジュとヒルダを搜索するのは後にして、待ち合わせ場所へと向かう

「ここか……しかし、懐かしい所に待ち合わせか」

幼い自分と両親が住んでいた家だ。空き家となっており、誰もいない…。

「座標はここで合っているよな？」

空き家に入り中を探る。所々、壊れているがあの時の光景を思い出す。

そういえば、地下室があつたが……まだ、あるかな？

地下室へと降りる。目を瞑ればそこは父親の仕事場。

いや……他にもあつた。昔見た黒い大きな巨人が……。

「あれがなんなのか二人とも教えてくれなかつたな」

頭をポリポリとかく。

「どうやら、来たようだな」

声が見る方を見ると、金髪の蒼眼、口はマスクで覆われた男が立っていた。

蒼いコートを羽織っており両手はポケットに入れたままだ。

「あんたが、シユレディンガーか？」

「よくここまで来たねリユガ。なるほどね、顔は母譲りか」

「母さんを知っているのか？」

「まだ、君が赤子だった時にラプラスと一緒に世話を任されたことがあつてね

ちなみに二人が結婚したとき、仲人役を任されたよ」

「そうなのか……。ところで、話があるんだよな？」

「この世界の正体を知りたくないか？」

「世界の正体？どこぞのクイズ少女みたいにつき合うのなら帰るが？」

「これからいう事は全て、本当の事だ。信じられない事だろうが……」



母に会ったヒルダだが、悲劇的なものだった――。

妹にあたる子供がいて、自分の事を忘れていた。

折角、ここまで来たというのにノーマだからこんな残酷な仕打ち。

絶望し、力なく当てもなく歩いていたが検疫官たちが集まりだす。

抵抗もしないヒルダを拘束しようとするが――。

「ちよつと待った」

女性の声が響き、検疫官たちは動きを止める。

黄色の長髪、ツインテールに纏めたチャイナ服の女性。

茶色の短髪、ハーフェニムとブラウスの女性だ。

「その娘は私たちがアルゼナルに送り届けるわ」

「しかし、危険なノーマです。お二人に任せるわけには……」

検疫官が何か言おうとしたが、黄色の髪的女性は首を傾げ笑顔で言う  
「私は無駄な事は嫌いなんだけどね？」

その言葉で検疫官たちを黙らせる。

茶髪的女性は、ヒルダを抱きかかえ、黄色髪的女性と共に歩みだす。

「……可哀そうにね。ノーマという烙印を押されてこの仕打ち」

「神様が作ったルールは残酷、叛いちやえばいいピョン♪」

「シユレディングガーはあの少年に真実を伝えたのかしらね」

「真実を知ってそれが幸せなのか不幸せなのか本人次第♪」

クスクスと笑う黄色髪的女性。

だが、その眼にはこの世界に対する不平等で不条理を憎んでいる眼だ



夜のミスルギ王国を警戒しながらアンジュを搜索するリユガ。

(マナ社会の成り立ちと父さんたちの目的、か……)

く回想開始く

「マナ国家を滅ぼす?」

「正確に言えばマナ社会を創ったある神と呼ばれる男を倒すためだ。

最もあの男はどこまで掌握しているかは解らんが……」

「そもそも、親父とアンタはどういう関係なんだ?」

「まずはそこから説明しよう。」

私やパプロフ、ラプラス、カルネアデス、メビウスはマナ社会の技術に献上している

”古の天才”と呼ばれている

だが、本当の目的はマナ国家を崩すための存在だ」

「マナ国家を崩すため……」

「我々は過去にノーマと”古の民”が多大な犠牲を払って神から強奪した機体ヴィルキスとその資料を盗み出し研究した。

一つはある人物に渡し、もう一つは——君が乗っているパラメイルだ」

「なっ……!?!」

ヴィルキスは神と呼ばれる存在から奪い取った機体。

ブルートはその機体と資料を基に造られた機体。



しかし、疑問が生じる。

「それだったら、ヴィルキスを使って当の昔にその神を倒せたんじゃないのか？」

「そもいかなかった。神はヴィルキスに封印を施した。しかし、今はその人物が使えるようになった」

それがアンジュというわけか。

つまり、ジルが言っていたリベルタスというのはここで繋がるといいうわけか

「……そして、君は——」

シュレディンガーが言いかけた時、マナ通信が開かれる。

内容を見て、数回頷く。

「……アンジュが処刑されるようだ。急いで助けに行った方がいい」

画像を見せると痛めつけられたアンジュの姿だった

く回想終了く

「……親父も母さんもこの計画に参加していたのか？」

二人もマナを持つものでありながらマナ国家を崩すためアルゼナルに協力してたわけか。

「こうなったら、親父と母さんと会って詳しい事を聞くか」

リュガは急いで、アンジュが走り出す。

だが、何故だろうか――。

身体が軽く、力が湧き上がりそうなこの感覚、まるで自分がヒトで無くなりそうな気分だ。

## 決別の世界

### 決別の世界

全てはジュリオが仕組んだ罠だった。

アンジュが死なないという事から、シルヴィアを使ってミスルギ皇国で処刑させようという計画だった。

幽閉された父はあの後、処刑された。

アンジュはその中で泥沼に落ちているミスルギを完全に断ち切る事を決意する。

(ようやく目が覚めた、こんな世界……こっちから否定してやる!!)

そう決意したアンジュは歌い始めて、その場にいた者達は突然の事に静まり返る。

兵がアンジュを強引に絞首台に送り、首に輪を掛ける。

それをジュリオが笑みを浮かばせる。

「さらばだ、アンジュリーゼ」

ジュリオが手を上げようとした時に――

――ドオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

大きな音が響き渡り、一斉に見るとそこには異様な光景だった。

装甲車を持ち上げるリュガの姿だ。それは人間でもノーマでも到底あり得ない業だ。そんな異質で異形の光景を誰もが驚く

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

装甲車を国民たちに向けてブン投げた。

逃げ遅れた国民たちは悲鳴を上げて逃げるが何人かは巻き込まれて潰れていった。

「あ、あれは……殺人鬼ノーマだ!!」

国民たちは我先にと騒いで逃げるがリュガはそんな事に目もくれず息を深く吸い込み。

——ガアアアオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!

猛獣、いや地獄に住む怪物の雄たけびをあげる。

誰もが足を止めて怯み、尻餅をつき怯えだす。

リュガは囚われているアンジュとモモカの所へ駆け出す。

「な、な、何をしている!!あのノーマを撃ち殺せ!!」

ジュリオの言葉に兵士たちは銃を構えて撃つが、リュガは右へ、左へと避けながら走る。

飛び掛かって兵士を殴り、蹴り飛ばす。

更に、兵士を盾にして襲いくる銃弾を防ぎ、死体を投げる。

「い、いの!!」

シルヴィアは鞭を振りかざすが、リュガは受け止めて鞭を取り上げる。

鞭を地面に叩き付け、兵士たちを鞭でしばく。

「はやく、アンジュを殺せ!!」

絞首は間に合わないだろうとジュリオは兵士たちに命じて銃殺しようとするが、閃光が奔る。

ジュリオの横を通り、搭乗している人物からナイフが投げ込まれ、アンジュを吊していたロープを切る。

その者は落ちて行くアンジュをキャッチするのだが……。

「うわっ!」

思わずバランスを崩してしまい落ちた。

「アンジュ!!大丈夫……か……」

駆け寄るのだが、大変な光景だった。

何とアンジュの股間に頭を突っ込んで、アンジュは真っ赤な顔になる。

そいつはもがいていて、アンジュはさらに真っ赤にある。

「い、いの……!!」

「ぐあつ!!」

アンジュはその人物の腹を蹴り飛ばし、壁に激突した瞬間、タスクの顔が現れる。

「た、タスク!?!」

「無人島でアンジュと一緒にいた男か……」

「や、やあ……久々だね。アンジュ、リユガ」

「護衛兵! 何をしている! 早く取り押さえろ!!」

くらんだ目から回復したリイザは、兵にアンジュを捕獲を命令する。

それに気づいたリユガはタクスに言う。

「タスク、アンジュとモモカを連れて逃げる!!」

「解った!!」

タスクはアンジュとモモカを連れて、黒い空中バイクに乗り込む。

逃がすまいと追いかける兵士だが――。

「悪いが……通行止めだ!!」

絞首台の柱の一部をもぎ取ったリユガは兵士たちを力任せに叩きのめす。

兵士が銃剣をリユガの腕に刺すが――。

「……やったら、やられる覚悟はできてんだろう、な!?!」

相手の頭を掴みアイアンクローをする。

メキメキとし、ゴシヤリと頭蓋骨陥没させて、放り投げる。

刺さった銃剣を抜いて、叩き壊す。

「感謝してるわお兄様、私の正体を暴いてくれて。ありがとうシルヴィア、薄汚い人間の本性を見せてくれて

その事にシルヴィアは思わず引いて、アンジュはそのまま叫ぶ。

「さようなら、腐った家畜の故郷よ!!」

「なにをしている!!追ええええ!!」

リュガはナイフを取り出しジュリオ、目掛けて投擲する。

弧を描いたナイフはジュリオの右足に刺さる。

「ぎゃあああああああああああああああああああ!!!」

「権力を貪るゴミクズが」

リュガはジュリオに吐き捨てて、アンジュたちの後を追いかけてミスルギ皇国から脱出する。

その光景を遠くから見ていた二人の人物がいる、シユレディングーと黒髪の煙草をくわえた男だ

「あれが、貴方の切り札ですか」

「ああ、ここまで覚醒するとは思わなかったが、あいつは見事それを使いこなせたという

わけだ」

「だが、自分の息子にこの世界の運命を託すことになるんだぞ？」

「俺たちはこんな腐った世界を変えなければならねえ、利用する物はなんだってするさ。息子であらうともな」

新しい、タバコに火をつけて啜える。

「俺がアルゼナルに行く、息子に真実を告げないといけないからな」



タスクが用意した輸送機に乗り込んだ四人。

「ごめんなさい、アンジュリーゼ様……」

モモカはジュリオに自分が利用されていた事に気付かず、主であるアンジュを危険な目に合わせさせて仕舞った事に罪悪感を感じており、必死に頭を下げながら謝っていた。

しかし、アンジュは頭を横に振り、モモカの頭を撫でる。

「何言ってるのモモカ、お蔭でスッキリしたんだから」

「え？」

アンジュの意外な言葉にモモカは顔を上げる。



「私には、家族も仲間の故郷も何にもないって分かったんだから」

「……ああ、まさか。あそこまで酷いとは思わなかったぜ。あれが人間の本性か」

リュガも故郷の人間たちの本性を見て、救いようがないと見切りをつけたようだ。

アンジユは次にタスクの方を見て、頭をグリグリとする

「どうして股間に顔を埋める必要がある訳？ 意地なの？ 癖なの？ それとも病気なの！？」

鬼気迫る顔でタスクを問い詰めるアンジユ。

今なら小型ドラゴンが逃げ出しそうな気迫だ。

「まあ、そいつは置いといてだ。タスクはどうしてあそこにいたんだ？」

「連絡が来たんだ。カルネアデスという人からアンジユがピンチだったね」

「カルネアデス？」

「……親父の仲間の一人か」

「知っているの？ それにリュガもどうしてここに？」

「まあ、順を追って説明するよ」

リュガはミスルギ皇国に来た理由、シユレディングアの事、父親の計画の事、そして  
ヴィルキスとプルートとの秘密の事。

「……あなたのお父さんにそんな計画が」

「ああ、親父と母さんに直接会って話を聞かないと解らん  
なにはともあれ、無事に皇国から脱出できた。

後はアルゼナルへ帰還するだけだ。

タスクはアンジユが身に着けていた皇国の指輪を渡す

「ありがとう」

「アンジユの髪、綺麗な金色だよね」

「え．．．？それが何よ．．．」

タスクの言葉に顔を赤めるアンジユ、照れている表情だ

「下も金色なんだね」

「死ね!!!この変態騎士!!!」

最低な発言をしてアンジユの怒りが頂点に達し、タスクをボコボコにした



無事、アルゼナルに着艦。

「ここでお別れだね、アンジユ」

「行くの？」

「俺にはまだやるべきことがあるからね」

タスクはそう言うが――

「その必要はないピヨン♪」

声が見ると、ジルともう一人の女性がいた。

もう一人の女性はなんといかウサギのような感じだ。

「タスクくん、お姫様の救出ありがとう♪お姉さん、とても嬉しいよ♪

でも、このまま単独行動すると危険だからここにいてもいいよ♪

ジル司令には話はつけさせてもらったし」

「じゃあ、あんたがカルネアデスか？」

「そのとーり♪君がリュガくんか。なるなるパブロフとメビウスの子というわけか」

「パブロフって…親父の仇名だろ？メビウスというの？」

「ありやりや？シユレちゃん、話していなかったのか」

まあ、積もる話は後にしてゆっくり休むといいよ♪

プルートは私とラプラスとで修理するから♪」

リュガはいまいちカルネアデスの性格がよく解らない。

アンジュは脱走した罪により独房へと連行された。

独房へ入ると、其処にはヒルダがいた。

「どうしたのよ・・・?」

「故郷に帰ったのはいいけどさ、ママは私を受け入れてくれなかった。

ノーマだから、こんな仕打ちにされたのよ。

それから、検察官に捕まったけど女性二人が私を庇ってここに連れ戻されたのよ」

「・・・ようやく、解ったのよ。世界を壊しちゃおうか、全部ね。」

虐げ、辱め、陥れる世界なんて、そんな世界なんか私から拒否するわ」

アンジユの言葉にヒルダはクスリツと笑う

「いいねえ、協力してやってもいいわよ?」

ケンカしていた仲だが、ようやく和解できた二人。



その夜。

リユガはカルネアデスが話があるという事で部屋に入る。

茶髪の女性が座っており、立ち上がる

「貴方がパブロフの息子という訳ね。私はラプラス。」

シユレディンガーから聞いているけど貴方のお父さんとお母さんとは研究仲間ね」

「じゃあ、あんたらがヒルダを助けてアルゼナルに運んだというわけか」

ラプラスは肯定の頷きをする。

「しかし、親父がパプロフ、シユレディングー、ラプラス、カルネアデスつと会ったが、メビウスという人は何処にいるんだ？」

メビウスに会ってないという言葉に驚くラプラス。

「まさか、お父さんから何も聞いてなかったの？」

「なんで、そこで親父が？」

「……メビウスというのは君のお母さんのミリル・黒鋼・ホクトの事だピョン」

カルネアデスの言葉にリュガは驚く。

まさか、自分の母親が天才の一人だなんて。

「親父はそんな事、喋ってくれなかったな」

「当然ね。私たちの存在は身内でも明かさないようにしているわ。」

かえって危険だし、巻き込まれる可能性だつてあるから」

本当にそうなのかと思いたいリュガ。けど、不安が消えそうにもない。

すると、歌が聞こえ始めた。

「綺麗な歌ね」

「お姫様の歌か」

独房にいるアンジュは月を見始め「永遠語り」を歌い出した。  
アルゼナルに響く歌はこの時だけ、癒されそうになった。  
そして、新たな戦いと真実が迫っていた――。

## 竜の歌 前編

アンジュとリュガがアルゼナルに帰ってから数日が立つ――。

「あゝ、サリアお姉様だ」

サリアが呼ばれた方を見ると、幼年部の子供たちとその担当員が居た。

「サリアお姉様に敬礼」

子供たちがサリア達に敬礼をし、サリアも子供たちに向かって敬礼をする。

子供たちは「サリアお姉様綺麗」、「おつきくなったら第一中隊に入る！」とそう言つて去つて行き。

担当員も挨拶をして子供たちの面倒を見に行った。

サリアは幼い頃の自分を思い出す。自分もかつてはジルの様になりたいと幼い頃からの夢であつた。

「どうしたの？」

「幼年部の子供たちに、お姉様って呼ばれた。もうそんな年かな？」

「まだ17じゃん」

「もう17よ。同い年になつちやつた。」アレクトラ」と



アルゼナルの海岸に、後部から煙を上げるヴィルキスが降下して来た。  
ヴィルキスはそのままアルゼナルの海岸に着地する。

そこに乗っていたのは当時メイルライダーとして戦っていたアレクトラこと”  
ジル”  
だった。

「アレクトラ!!」

アレクトラの元に、当時、司令官であるジャスマンと部下のマギー達もやってきた。

ジャスマンはアレクトラの右腕が無い事を見て、すぐにマギーに命令する。

「マギー！鎮痛剤だ!!ありったけの包帯を持ってこい!!」

「イエス・マム!!」

その様子を上のデッキにいる、まだ当時幼かったサリアとメイが居た。

「あれは……お姉様なの？」

サリアが見ている中で、ジャスマンはアレクトラをヴィルキスから下ろす。

「しつかりしろ、アレクトラ！一体何があった!?!」

ジャスマンはアレクトラから事情を聞く。



しかし、アレクトラはある者からメイに伝言があると言うばかりであった。

それを却下するジャスミンは何があつたかと事情を問う。

ところがアレクトラは突然、ジャスミンへと謝る。

「ごめんなさいジャスミン、私じゃあ使えなかつた…。ヴィルキスを使いこなせなかつた!!」

涙ぐんでジャスミンに謝り、それにはジャスミンは何も言えなかつた。

「そんな事ないよ!」

そこにメイとやって来たサリアが居て、サリアはアレクトラの弱さを否定する。

「わたしが全部やつつけるんだから!」

アレクトラに向かって力強く言う、アレクトラはそれにサリアの頭に手を置いて撫でる。



格納庫に着いたサリアはヴィルキスを見る。

（一体私に何が足りないの？ アンジュと私に一体何が違うって言うの？ あの子にヴィルキスは渡さない!）

「どうしたのかしら？そんな怖い顔をして」

声がる方を見ると、茶髪の女性がいた。

確か、カルネアデスと一緒にいた——。

「ラプラスさん？」

「覚えていてくれてありがとう。今、プルートの調整と修理を終えたところよ」

「あの…プルートってリユガの両親が造ったパラメイルなんですよね？」

「ええ、二人はこうなることを予想して造ったのかもしれないわね。」

それに、私もカルネアデスもシュレインガーも協力して造ったわ。

——全ては2つの神を滅ぼすための」

最後はサリアに聞こえない様に喋るラプラス。

「…タスクの事も知っているの？」

「ええ、彼の両親とリユガの両親は知り合いだからね。それらを通じて、知り合えたわ。」

まだタスクは子供だったから、覚えているのかどうか解らないけどね」

フフツと笑うラプラス。

「話は変わるけど、貴女はヴィルキスに執拗に拘っていないかしら？」

「…っ!!」

的確な事を言われてサリアは少しだけ狼狽える。

「アンジュにとられたのがそんなに悔しいのかしら？でも、それは悪い事ではないわ。

人は誰しも他人が持っているのを嫉む、いいことだと思おうわよ」

「・・・失礼します」

サリアはそう言つて、立ち去る。

「ちよつと厳しい事を言つたかしら・・・」



一方のアルゼナル司令室、レーダーに何かをキャッチした。

「これは、シンギュラー反応です！」

「場所は？」

ジルが出現地を特定しろと命令を言い、それにパメラが急いで特定する。

「それがアルゼナル上空です！」

出現場所はアルゼナル上空、そしてアルゼナルの上空にゲートが出現し、そこから大量のドラゴン達が現れる。

「スクーナー級。数は・・・20・・・45・・・70・・・120・・・、数特定不能！」

「電話もなっていないのにどうして!？」

エマが司令室に到着して、電話が鳴らなかつた事に疑問を感じていた。

ジルは基地全体放送で、アルゼナルの皆に言う。

「こちらは司令官のジルだ、総員第一戦闘態勢を発令。

シンギュラーが基地直上に展開、大量のドラゴンが効果接近中だ。

パラメイル第二、第三中隊全機出撃。

総員白兵戦準備、対空火器重火器の使用を許可する。総力を持ってドラゴンを撃破せ

「よ」



「おいおい、ドラゴンが大量出現って・・・どういふことだよ!？」

「解らん!!だが、連中は本気で我々を潰しにかかつてきたのだからな」

シュージとテンゲンも武器を持ってドラゴンの襲撃に備える。

リュガも武器を整えて、アンジュとヒルダを思い出す。

「……アンジュとヒルダが心配だ。あいつらを迎えに行く」

「気を付けろよ、リュガ!!」

独房へ向かうリユガ、シュージとテンゲンは領いて、ゼノンと合流へ向かう

パラメイル第二、第三中隊がドラゴンをなんとか、迎撃しているが数が多すぎて減る気配がない。

すると上空に居るドラゴン立はゲートの回りを飛び回ると、ゲートから4機のパラメイルがゆつくりと降下してきた。

その内の一機の紅いパラメイルはヴィルキスと同じ間接部が金色のパラメイルであり、そこから歌が流れていた。

「♪♪♪♪」

その光景を臨時司令部にいるジルが双眼鏡で見ていた。

「パラメイルだと・・・!?!」

同じ様にアルゼナルの上空で戦っている中隊の隊長のエレノアもその機体に目を奪われる。

「何こいつ? 何処の機体?」

皆が見ていると、その機体がいきなり金色の染まり始め、その両肩が露出展開し、そこから光学兵器が発射された。

エレノアを含め第二中隊と第三中隊の数名を含むメンバーは消し炭へとなっていた。

中隊を消し去った光学兵器はそのままアルゼナルに直撃し、強烈な光が包み込む。

「ありやりや・・・酷いことになってるね」

半分ほど削られたアルゼナルを目にしたカルネアデスとラプラス。

それをチャンスとしたドラゴン達は一齐に襲い掛かってきた。

「……少し気が引けるけど、倒すしかないわね」

ラプラスは槍を取り出して、ドラゴンの首を撥ね飛ばす

「けど、ある意味チャンスかもね。お姫様とリユークンが覚醒する刻かも♪」

カルネアデスは背中からショットガンを取り出して、ドラゴンの脳天を撃ち貫く  
他に誰かがいたのなら常人離れている二人に驚愕するだろう。



ヒルダとアンジュが囚われて独房へたどり着くりユガ。

扉を開けに掛かろうとするが、そのうちのスクーナー級ドラゴンが独房へと突撃し破壊した。

ドラゴンは唸り声をあげて二人を喰らおうとするが――。

「どっせええええええええええい!!!」

リユガの回し蹴りがドラゴンの側頭部に直撃し外へと飛ばされ落ちた。

「ど、ドラゴンを生身で蹴飛ばすなんて、あんた、人間やめてない?」

「まあ、自分でも人間なのか解んなくなってきたわ」

呆れるヒルダをよそにリュガはそう返答をする。

急いで格納庫へ向かうが……。

「流石に一週間も独房にいたからか、臭うぞ二人とも」

「うっさい!!」

リュガは乙女の最大の禁句を言い、ヒルダとアンジュに殴られた。

「……イテエ」

涙目になりながらも二人の後を追う。

## 竜の歌 後編

「第二中隊全滅！第三中隊！隊長と部下四名以下ロスト！」

紅の機体から放たれた光学兵器によって、被害が相当なものとなった。

パメラの報告を聞いたジルはすぐさま次の指示を出す。

「残存部隊を後退！第一中隊のサリア達に集約、サリア達を出せ！」

「了解！」

パメラはすぐに通信し、ジルは上空のパラメールを見ながら思った。

「(あの武装……)」

一方の格納庫内でドラゴンと戦っているサリア達に命令が下る。

「了解！皆！パラメールに騎乗！」

「「イエス・マム！」」

サリア達のパラメールはデッキへと上げる。

その時にジルからサリアに通信が来る。

『サリア、もう説明しなくても分かっているな？』

「はい」



『よし。それとアンジュはどうした?』

その事にサリアは重い表情で言う。

「シュージとテンゲンによると連れて来ると」

『そうか。なら、アンジュに伝えろ。あのパラメイルはヴィルキスでないと無理だ』  
その事を聞いてサリアは思いつめた表情で言う。

「司令、私がヴィルキスで出ます!」

『黙れ!今は命令を実行しろ』

「お願いです!司令!!」

『黙って命令に従え』

そう言い残してジルは通信を切る。

それにサリアはどうしても納得が行かなかった。

「どうしてよ……ジル。ずっと……ずっと頑張つて来たのに!!」

サリアはアーキバスから降りて、ヴィルキスの方に向かい乗り込む。

ゼノン、メイ、タスクが驚く

「サリアさん!なにを!」

「サリア!!」

サリアは二人の静止も聞かずにそのままヴィルキスに搭乗して皆に言う。

「サリア隊！出撃！！」

「「イエス・ママ！！」」

デツキから発進したヴィルキスを含むパラメール隊はドラゴン迎撃の為に出撃してしまつた

遅れてリユガ、アンジュ、ヒルダが遅れて格納庫へ入るのだが――。

「……ヴィルキスがない!？」

「アンジュ!!無事だったんだね!!」

「タスク、ヴィルキスは!？」

「それが、サリアが乗っていつて……」

「なんだつて、そんな事を……とにかく追いかけるぞ!」

リユガはプルトに乗り込み、ヒルダはグレイブ・カスタムに乗り込む。

アンジュはヒルダのパラメールに乗って、ヴィルキスを取り戻す。

「ヒルダ、お願い」

「OK!!振り落とされない様にしっかりと捕まつてな!!」

三人もいざ、戦場へ――。



ヴィヴァン達がドラゴンを撃ち落として行くが、サリアは単体でドラゴン側のパラメイルへ向かう。

しかし、ヴィルキスの調子が悪く出力が上がらない事にイラ立ちを現す。

「もつとーもつと早く飛べるでしょ!?!」

その時にドラゴンがやって来て、それにサリアは追い払おうとヴィルキスで蹴るが逆に弾かれてしまい飛ばされる。

何とか体制を整えて、呼吸を整えながらもヴィルキスの性能に驚きを隠せない。

「嘘よ…ヴィルキスがこんなのパワーが無いなんて、どうして!?!」

困惑するサリアだが、アンジユとヒルダ、リユガは追いつき横に並ぶ

「サリアー！私の機体返して!!アイツは私がやるわ!」

「私のヴィルキスよ!!あなたはおとなしく基地に戻りなさい!!」

サリアは聞き入れずヴィルキスのライフルで攻撃する。

だが、紅の機体はかわしており挑発する、サリアは怒りが溜まる。

「馬鹿にして……!」

『どんなに頑張っても出来ない者は出来ないのだ』

「そんなはずない!誰よりも頑張ってきたのよ!!私!!」

『無駄だ』

紅の機体がヴィルキスを蹴飛ばす、アンジユとヒルダはヴィルキスを追いかた、リユガはドラゴン側のパラメイルへ向かう。

緑と水色の機体が動こうとするが、紅の機体が手で制止した。

(緑色の機体と水色の機体を止めた？あの赤、黄色がリーダーか!!)

デストロイヤーモードに変化し、先に赤い機体に攻撃を仕掛ける。

赤い機体はヒラリツと避けるが間合いを詰める。

突然、黄色の機体が割り込んで大刀を振りかざす。

「悪いがお前の相手はわたしだ」

通信から聞こえたのは男の声だ、あの機体に乗っているのは人間なのか？

すると黄色の機体のコクピットが開き姿を現す、黒の短髪に王のマントを羽織っている。

「我が名はゼランディア。こいつは愛機——黄龍號。問おう、お前の名は？」

「……リユガだ」

相手が名乗ったのなら、自分も名乗るかえすリユガ。

ゼランディアはフツと笑いコクピットに入り、大刀を振り回し構える。

「今はこの出会いを楽しもうじゃないか？リユガ」

「……そうだな」

プルトの右腕を油圧クラッシャーに変えて構える。

お互い駆け出し、武器と武器がぶつかり合う音が響き渡る。

墜落するヴィルキスを追いかけるアンジュとヒルダ。

ある程度、近くなった距離からアンジュはヴィルキスに飛び乗り操縦桿を握る。

「無駄よ、もう距離が―」

「無駄じゃないわ！私とヴィルキスなら!!」

一気にスラストをフルにして、海面ギリギリで浮上して、サリアを掴んでヒルダに連絡する。

「ヒルダ!」

『何?!』

「落とすから受け取って!」

『はっ!?!』

そう言つてアンジュはサリアを放り投げてしまった。

「うわわわあああゝゝ!!!」

「ええゝゝ!?!」

ヒルダは突然の事に慌てて拾いに行き、何とかサリアをキャッチして後部に乗せる。

「~~~~つ!!別料金だぞ、馬鹿姫!!」

それにアンジユは笑みを浮かべて、不明機を見る。

「さしてやりましょうか!」

アンジユはヴィルキスをフライトモードからデストロイヤーモードとなる。

真つ先に紅の機体と交戦するが互角の戦いを繰り広げた。

紅の機体は距離を取り歌唱し、紅の機体がまた黄金に変わりはじめた。

「この歌は……」

それは永遠語りと似ていて、それにアンジユは同じように歌いだす。

「~~~~♪~~~~♪~~~~♪~~~~♪」

ヴィルキスが白から黄金に変化して両肩が露出展開、

それを見たりユガ達、司令部にいるジル、ラプラスとカルネアデスも見ると。

「歌?アンジユの機体と赤い機体から歌が響く」

「お前とあの金髪の小娘は感じるのか、サラが奏でる星歌を」

戦場に歌が響くとヴィルキスと紅の機体が黄金に染まり、両肩が展開する。

エネルギーが渦を巻き、同時に発射し均衡し強烈な光が包まれる。

同時にブルーと黄龍號も変化が起き、二機が共鳴し合っている。

「これは……!?!」

「——」 星歌、邂逅し歌唱すれば。原初の機体、覚醒か」

戸惑うリユガだが、ゼランディアが言葉を呟く。

「偽りの民が、何故——」 真なる星歌を?」

紅の機体のコクピットが開かれ姿を見せる。

それは純粋な黒い長髪、額には紅い滴の飾り、凜とした女性だ。

「あなたこそ何者!?!その歌は何!!」

「真実は”アウラ”と共に」

その言葉を残し、女性は紅の機体へ乗り込みゲートへ向かう。

一方のリユガとゼランディアも——。

「お前は何か知っているのか? ヴィルキスとプルートの秘密があるのか?」

「刻が来れば解る。次に会う時を楽しみにしているよ」

黄龍號と紅の機体は仲間と合流しゲートへと入り込んだ。

その光景を見てたラプラスとカルネアデス。

「……遂にこの時が来てしまったのね」

「でも、これで覚醒の兆しが見えたね。最後の鍵は”歌”か」

ドラゴンの集団と謎のパラメイルたちの被害は相当なものだった。

# 誕生と真相

## 誕生と真相

ドラゴン達の襲撃があつたその数日後…。

無数の島が浮いていて、その場所に社交場の様な丸くて大きなテーブルが置いてあつた。

その場所に各国の首相達が集まっていた、その中にジュリオもいた。

彼らの回りにはアルゼナルを襲撃しているドラゴンの映像が映し出されていた。

「ドラゴンが自ら攻めて来るとは……」

「それにこのパラメール、まさかドラゴンを引き連れて？」

一人の首相の目に映る映像にはあの不明機が映し出されていた。

「シンギュラーの管理はミスルギ皇家のお役目、ジュリオ・・いえ陛下。ご説明を」

女性の首相がジュリオにシンギュラーの発生に付いて聞いてきた。

しかしジュリオは頭を傾げながら言う。

「それが、”アケノミハシラ”には起動した形跡が全くないのです」



「馬鹿な！あり得ん！」

肥満な首相がジュリオの説明に納得が行かない事に拳をテーブルに叩き付ける。

「直ちにアルゼナルを再建し、力を増強せねば」

「だが、それも行かんのだ」

年老いた首相がマナで次の映像を映し出す。

すると光学兵器を発射するヴィルキスの映像が映し出された。

「この機体、まさか！」

「ヴィルキスだ」

それにはジュリオを含め各国の首相達は言葉を詰まらせていた。

「前の反乱の時に破壊された筈では？」

「アルゼナルの管理はローゼンブルム王家の役目。何故放置していた？」

それにはローゼンブルム王家の首相は表情を歪めながら黙る。

「監察官からは異常なしと報告を受けていた」

「まんまとノーマにあしらわれていたと言う事か、無能め」

「その襲撃の最中、こんな物を見つけたのだ」

一人の首相がマナで新たな映像を映し出す。それはリュガだ。

アンジユを処刑しようとした時に現れ、多くの被害を出した。

「うわっ!!こゝ、こいつは!!」

ジュリオは思わず椅子から落ちて、怯えながらリユガに指をさす。

「こゝ、こいつが私の脚を傷つけた奴だ!!」

「こいつは……パプロフの息子ではないか?」

「5年前、行方不明となったあの天才の一人のか?まさかノーマに」

各首相たちが驚き戸惑いを隠せなかった。

「落ち着きなさい、今はどう世界を守って行くかを話し合うべきです」

女性の首相が皆にそう言い聞かせ、一人の首相が言う。

「……ノーマが使えない以上、私達人類が戦うしかないのでしょうか?」

その事に各国の首相達は思わず戸惑いの声上がる。

木の裏で聞いていた一人の男性が立ち上がる。

「え、エンブリヲ様!」

一人の首相が思わず言う。世界最高指導者であるエンブリヲは皆の所に行く。

「本当にどうしようもないな」

「し、しかし、ヴィルキスや天才たちが造った兵器がある以上、アルゼナルを再建させる

には……」

「ならば、選択権は幾つかある」

それに皆はエンブリヲに目線が行く。

「一、ドラゴンに全面降伏する」

それには思わず息を飲む首相達、エンブリヲは構わず言う。

「二、ドラゴンを全滅させる」

「そ、そんな!」

「三、世界を作り直す」

最後の選択肢にそれにはジュリオが反応する。

「全部壊してリセットする、害虫を殺し土を入れ替える。正常な世界に」

エンブリヲは肩にのって来た小鳥をなでながら言う。

「壊して作り直す、そんな事が可能なのですか?」

それにエンブリヲは笑みを浮かべながら言う。

「すべての”ラグナメール”とメールライダーが揃えば、共に作り直すのだろうか?期待しているよ」

「は、はっ!!お任せ下さい!エンブリヲ様!!」

ジュリオはそう言い、エンブリヲと他の首相達は消える。

残ったのエンブリヲだけとなったが、背後に黒と白の髪、右半分は道化師の仮面をつけた男性が立っていた。

「聞きましたよ。世界を創り直すのかい？」

「……ああ、上手くいかないものだね」

「なら、満足いくまで再創——リメイク——すればいいさ」

右手に赤、青、緑の玉を出してスツと握ると黄色の玉になった。



アルゼナルでは損害が大きく外壁はどうにもならず、そのままの状態だった。

ジャスミンとシュージはドラゴンの死体を大きな穴に落としていく。

格納庫ではゼノン、メイ、ラプラスがパラメイルの修理、医務室ではマギーとテンゲンが負傷者の手当てをしていた。

サリアは反省房の中に居る、ヴィルキスに乗りこなせなかった事とジルの事でシヨックを受けていた。

墓場で黄昏れているリュガはゼランディアが気になっていた、プルートと黄龍號を知っていた素振り。

「問題が多すぎるなあ、親父達の計画といい、ゼランディアといい……解らないことだらけだ」

はあーとため息つく中、後ろからカルネアデスがリュガを抱きしめる

「ふふふくこんな所で黄昏れているのかね少年？」

「……そういう、あんたはサボリか？」

「残念く、君に会いたい人がいるんだピョン♪」

カルネアデスの言葉に、タバコを啜えた男性が立っていた。

リュガはその男性を見て、驚く

「親父……!?!」

「五年ぶりだな、リュガ」

天才が一人であるパプロフにしてリュガの父、エルド・黒鋼・ホクトだ

「5年もいなくなつて……突然、帰ってくるなんて勝手すぎるぜ……ところで、母さんは？」

「そのことで話がある。ミリルは……別世界の人間、いやこつちの世界ではドラゴンと呼ばれている」

今、信じられない単語を耳にした。

ドラゴンといえば、襲ってくる生物のはず。

その母が……ドラゴン？

「母さんが……ドラゴン？」

「この間、ドラゴンと共に襲ってきたあの連中はミリルとは同族なんだ。

お前は人間とドラゴンの間に生まれた、人間離れした技を体験しているだろ？」

思い返してみれば――。

ニツクを貫いた時も、装甲車を持ち上げた時も、銃弾を回避できたもの、ノーマでは到底不可能だ。

リュガの脳内が整理がつかない状況、追い討ちをかけるようにエルドは口を開く。

「……そして、お前の機体プルートには、ミリルの魂が宿っている」

衝撃の言葉にリュガの頭が真っ白になりそうだった。

「うそ……だろ……」

「……あれは、機体が完成した日だ」

### ◆◆回想開始◆◆

——5年前、秘密研究室

「ミリル。ようやく完成したぜ」

「まだよ。この機体の本当の完成は魂を入れることで完成するわ

マナ国家は思っている以上に恐ろしい存在だわ。それ以上の対抗をしなければいけ

ないの。

私が、この子に魂を吹き込むことによって……」

「本気で言ってるのかミリル!! そんな事したら……」

「私たちはリユガに酷い事をしたのよ。」

本当ならマナがいつまでも使えて争いの無い世界にいられたもの。

でも、私たちがそうはさせなかった」

写真を取り出すミリル。

幼いリユガと一緒に写っている家族の写真だ。

「……あんな箱庭の世界にいても、本当に幸せなのかと言ったら違う、な」

「遺伝子操作、肉体強化、20歳を迎えた時にマナを減衰。」

全ては世界を破壊するための兵器として造った。

リユガには苦しい思いはさせない、私はそれ以上を背負うわ」

親として何より母親として最低な事をした。

地獄に落ちて、苦しみを罪を全て受けていてもいいぐらいだ。

そして、機体を完全にするために母は自ら生贄となったのだ。

◆◆回想終了◆◆

「そして、ミリルはプルートの魂を入れて、完成したというわけだ」

「……肉体強化？ マナを減衰？ マナ国家を倒すための兵器？ ドラゴンと人間の間に生まれれた？」

リュガは頭を抱えて、首を横に振る。

普通に生まれたというわけではなく、SFやファンタジーによく話に出てくる生まれ方をした。

今の自分は人間でもない。ましてやドラゴンでもノーマでもない存在だ。

そして、プルートに母の魂が入っている——。最初の出撃の時に無人操縦してきたのも。

リュガの心は怒りと憎悪の炎が燃えたぎり、エルドの胸ぐらを掴む。

「俺を兵器に仕立て上げ!! 母さんの魂を機体に閉じ込めた!!」

あんたは……あんたらは人間が冒してはいけない事をやったんだ!!」

カルネアデスは辛い顔をして背けていた。

つまりラプラスもシュレインガーも、この件を知っていた。

「……恨まれたっていい、怒りを俺にぶつけて殺しても構わない」

エルドはリュガの両肩を掴む



「俺は妻と息子を残酷なことをしたくなかった。

あの神を倒せるためとはいえ、夫として父親として人間として最低な事をした。

家族をバラバラにしたクズ野郎として受け入れるさ」

この話が本当だとすれば、今まで襲ってきたドラゴンは人間、つまり人間を殺してきた。

” 同族殺し ” ——、それが頭に過り罪悪感が襲う。

「……俺に今後、どうしろというんだ？ 教えてくれよ」

身体を震わし、涙を流し、天に向けて咆哮をする。

「俺は……俺は————————!!!」

リュガの心と頭がグチャグチャで整理がつかない状況だ。

そんな時、放送が鳴り響く。

『こちらはノーマ管理委員会直属、国際救助艦隊です。ノーマの皆さんドラゴンとの戦闘を——』

## 解放する怒り 前編

放送が鳴る、少し前――。

アンジユたちもドラゴンの正体が人間であることを知る。

ジルはリベルタスを言うがアンジユの罵声を気にせず、森を歩き考えていた。

「神様か」

誰かの声が聞こえ、ジルは足を止めて振り向くと、そこにはエンブリヲが立っていた。「私は自分から名乗った事は一度もないぞ?」創造主」と言う意味であれば、正解かもしれないが」

世界最高指導者がアルゼナルに居た事にジルはすぐさまマグナムを取り出してエンブリヲに撃ちこむ。

しかし、弾丸はエンブリヲの身体をすり抜ける様に後ろに木に当たり、ジルはエンブリヲを睨む。

「エンブリヲ……!!」

ジルはマグナムを構える。

だが、エンブリヲは涼しげな笑みをしてジルの方へ向かう。

「怒った顔も素敵だなアレクトラ、今は司令官のジルか？」

「貴様がここにいるという事は、カノープスもか？」

「彼はここにきてないよ。それとも、彼にも会いたかったのかい？」

「ああ、会って今すぐに殺したいさ」

「私の様に不滅の存在ではないが……彼は相当強いぞ？」

それとも、忘れたわけではないだろうな？君の腕がそうなったのは」

エンブリヲの言葉に僅かながら、ジルの表情は怒りになる。

「相変わらず傲慢で辛辣な言葉を吐くわね」

別の声がする、ラプラスだ。

「おや、君もここにいたのかい？」

エンブリヲは笑顔を崩さず話すがラプラスは怒りの表情になる。

「貴方とカノープスは、私たちの仲間ヘンペル、いえ——カシム兄さんを殺した」

「私は彼を手駒にしようとしたがカノープスが細胞残さず原子分解にさせたそうだ」

その言葉を聞いて、ラプラスは憎しみに満ちた顔でエンブリヲを睨む

「それでも、兄さんを殺した貴方達を許さない!!」

今にも飛び掛かろうとしたいが、エンブリヲは死なない存在というのは知っている

「ふむ？来たようだな」

エンブリヲは違う方向を見る。

それにジルは同じ方を見るとマナの映像が映し出される。

『こちらはノーマ管理委員会直属、国際救助艦隊です。ノーマの皆さんドラゴンとの戦闘——』

「…強行手段を取るわけね」

ラプラスはそう言いジルはすぐさま構えるがすでにエンブリヲは居なかった。

ジルは舌打ちしてラプラスに言う。

「……後で聞かせて貰うぞ」

ジルはすぐに臨時司令部へと向かう。

ラプラスはパプロフたちの方へと向かう。

同時にその放送を聞いていたアンジュ達、その放送を聞いていたモモカは嬉しながらアンジュに言う。

「アンジュリーゼ様！助けです！助けが来ましたよ！」

「……いやな予感がするわ」

「どういう事だ？」

タスクはアンジュの言葉に振り向く

「考えて見なさい。今までノーマの私たちを毛嫌いしていた連中が急に助けに来るなん

てあり得るの?」

テンゲン、シュージ、ゼノン は驚き戸惑う。

シュージはアンジュに問う

「まさか、畏の可能性が?」

「……多分」

アンジュの推理にジャスミンは「ふむつ」と感心する表情をしながら頷く。

その中でアルゼナル付近の海域で、ミスルギ艦隊がアルゼナルへと進攻していた。

艦の中で旗艦エンペラージュリオ一世に乗艦しているジュリオが笑みを浮かばせていた。

「さあ、最後の再会と行こうじゃないか。アンジュリーゼ」



臨時司令部でパメラ達はその放送を見ていた。

「耳を貸すなよ、たわ言だ」

パメラ達が振り返るとそこにジルがやって来て命令を言う。

「対空防御態勢!今すぐだ!」

「「イエス・マム！」」

ジルの命令と同時にアルゼナルは対空防御態勢へと入る。

アルゼナルの動きを知ったミスルギ艦隊、その事を兵士はジュリオに報告する。

「アルゼナル、対空兵器を起動！」

「やれやれ、平和的に事を進めたかったが……」

ジュリオは呆れると言わんばかりにマイクを取り、全艦艇に流す。

「旗艦エンペラージュリオ一世より全艦艇へ、たった今ノーマはこちらの救援を拒絶した。」

これは我々、いや全人類に対する明白は反逆である、断じて見過ごすわけには行かない。

全艦攻撃開始！」

命令と同時に全艦隊からミサイルが発射されて、それにいち早く察知したバルカンが吠える。

「来るよー！」

「え？」

モモカは何が来るか分からず、アンジユは舌打ちをする。

「皆、基地の中に戻るわよ!!」

アルゼナルにミサイルが降り注ぎ、対空兵器が撃ち落とすも、一部は防ぎきれずにアルゼナルに直撃する。

アンジユ達は何とか爆風に巻き込まれずにアルゼナル内部へと退避した。



「始めやがったか」

「……シユレディングーもこっちに向かってるピョン」

「解った。リュガ……お前には整理がつかない状況だが、今は生き延びる事だけ考えてくれ」

エルドはそう言うがリュガは何も答えずだ。

「急いで、プルートの乗り込むめ。いいな？」

「……ああ」

リュガはふら付きながらも格納庫へと向かう。

エルドとカルネアデスは自分たちがやるべきことへそれぞれ向かう。

格納庫へ向かうリュガだが、マナの特殊部隊と遭遇する。

「殺人鬼のノーマだ!!」

「殺せ!!」

ライフルを構えるが、リュガは怯える事もない。

むしろ、目の前のはただのゴミクズ程度と思っただけだ。

特殊部隊たちが発砲しようとした次の瞬間――。

ドゴツ!!

リュガは回し蹴りで兵士の首をあらぬ方向へと蹴り曲げた。

次々と特殊部隊を素手で息の根を止め、薙ぎ払った。

「ああ……ニツクを初めてコワシタ感覚だな……」

そう言いながらも、格納庫へと向かう。



アンジュはサリアに連れられて最下層へと向かわされていた。

アンジュの他にジャスミンも居て、モモカを担いで向かっていった。

「良いの?この基地が大変なんですよ?」

「言っただしよ、貴方には大事な使命があるって」

「関係ないわそんな事、あんた達の使命なんて分かりたくもないわ」



リベルタスには協力する気はないアンジュ。

それを言い聞かせようとするサリアも何とかするも駄目だった。

「では息を止めて下さい！アンジュリーゼ様！」

モモカがコシヨウを振りまき、辺り一面コシヨウまみれとなり、息が出来なくなった。

「アンジュ！何処なの！くしゅん！！」

その際にアンジュとモモカは何とか逃げ出した。

モモカのとつさの行動にアンジュは感心した。

「随分大胆な事をするようになったわねくしゅん！」

「アンジュリーゼ様の影響でくしゅん！」

鼻をかみながらもその場から何とか逃げるアンジュとモモカ。

サリアの報告を聞いたジルは歯を噛みしめ、アンジュの捕獲の命令を与える。



食堂に付いたアンジュとモモカ、モモカはマナの光で灯りを照らしていた。

「こちらですアンジュリーゼ様、ここから行けそうです」

灯りを前に向けた途端二人は息を飲む、そこには焼け焦げた人が沢山いた。

それにアンジュは嘔吐し、それにモモカは駆け寄る。

「アンジュリーゼ様！み、水を！！」

すぐさま食堂のキッチンに向かったモモカ、アンジュはあたりを見渡していると。

「大切な物は失ってから気づく、何時の時代も変わらない心理だ。」

全く酷い事をする、こんな事を許した覚えはないんだが」

謎の男が居て、それにアンジュは振り向いてみる。

その男こそエンブリヲだった。

「君のお兄さんだよ、この虐殺を命じたのは」

「なっ!？」

その事にアンジュは驚き、エンブリヲは言い続ける。

「北北東14キロの場所に彼は来ている、君を八つ裂きにする為にね。」

この子たちはその巻き添えを食ったようなものだ」

——バン!!

「きやああああああ!!」

キッチンから銃声がし、モモカの悲鳴が聞こえてアンジュはすぐに向かう。

向かうと二人の特殊部隊がモモカを狙っていて、モモカは左肩を撃たれていたが、動ける右手でマナの光を出して防御をしていた。

アンジュは銃を取り出し、一人を撃ち殺して、もう一人は両肩を撃ち抜く。

「あなた達がやったの? お兄様の命令で?」

「貴様、アンジュリーゼ！」

すぐに銃を構えるも、アンジュに手を撃たれてしまう。

「う、撃たないでくれ。我々は……ジュリオ陛下の命令で……」

——バン!!バン!!バン!!バン!!

アンジュは撃ちまくり、弾切れになっても引き続けていた。

それを見たモモカは慌ててアンジュを止めた。

「大丈夫です！モモカはここに居ます!!」

アンジュはすぐに後ろを見る。

あの場所に居たエンブリヲの姿は無く、それにアンジュは決心する。

「行かなきゃ！」

「えっ？」

モモカはその事に意味が分からずだった。

「アンジュ!!」

アンジュは横を見るとタスクがやって来た。

「タスク！」

「銃声が聞こえてすぐに向かったんだ。でも良かったよ君が無事で」

タスクが一安心して話していると、アンジュが言う。

「タスク、行かなくちゃいけない所があるの」

「え？何処に？」

「いいから！一緒に来て！」

アンジュはそう言つてモモカと共に格納庫へ行き、それに慌てるタスク。

「ああ！ちよつと待つてアンジュ!!」

タスクは慌ててアンジュを追いかけて行き、格納庫へと向かつて行つた。



ヴィヴィアンを運ぼうとしている兵士たち、輸送機の前に誰かがいる。

「シュレディンガー博士!!」

「何故、博士がここに？」

「……その女の子を返してもらおうか」

その言葉に驚愕する兵士たち。

「博士、何を言っているのですか!？」

「この女は危険です。今すぐに処分せよと……」

兵士たちはそう言うが、シュレディンガーは目を瞑り、言葉を発する

「では、死ね」

ブカブカの袖から三本の鉤爪を展開し、兵士たちの喉を次々と刈る姿はまるで豹。顔に付いた血を拭いヴィヴィアンを抱える。

「……この基地も我々も危ないか」

シユレディンガーはヴィヴィアンを抱えて、安全な場所へ――。

## 解放する怒り 後編

格納庫ではヒルダ達が特殊部隊に対して猛反撃をしていた。

部隊の一人がグレネードを投げ、そのグレネードがロザリーのグレイブの右の連装砲に直撃して吹き飛ぶ。

「ああ!!新しい連装砲が!!」

「この野郎!!」

ヒルダとロザリーはマシンガンで撃ち返すが、その隣でクリスが絶望するかの様にひそめていた。

「……もう駄目だ、私達死ぬんだ……」

「死の第一中隊がこんな所で死んでたまるかってんだ!」

「今さら隊長づらしないで!!」

「はいはい……」

クリスの嫌みを流すヒルダだったが、一人の特殊部隊が狙っているのに気付く。

それにヒルダがクリスを庇う。

「クリス!!」

ヒルダが庇うと、左肩に銃弾を受けて仕舞う。

「く……！！このくそおおお！！」

撃たれた事にキレたか、ヒルダは敵に向けてライフルを撃ちまくり、相手は穴だらけとなり海に落ちて行った。

クリスは自ら庇ったヒルダに啞然とする。

「どうして……」

「アタシ等は仲間だよ、誰も死なないしもう死なせないってな！」

その事にクリスとロザリーはただ黙ったまま聞いていた。

今度は敵が投げたグレネードがエレベーターシャフトに直撃して、シャフトが崩れる。

「エレベーターシャフトが！」

「これではパラメイルを下ろせません！」

部下の言葉にメイは齒を噛みしめ、不味い状況になって来る事にロザリーが問いかける。

「ど、どうするんだよ！ヒルダ!?!」

「く……！！」

その時、リュガが現れた。

テンゲン、シュージ、ゼノンはリュガに駆け寄る

「リュガ、無事だったのか!!」

「お前だけ、どこにいったのか解らなかつたら心配したぞ」

だが、リュガはなんの返事もない。

三人は怪訝な表情して、シュージはもう一度、リュガに問いかける。

「おい、どうしたんだよ。リュガ……?」

「テンゲン、シュージ、ゼノン……。俺、お前たちの親友でよかった……」

三人はリュガの言葉に理解ができなかった。

リュガはプルートに乗り込み、戦場へ向かう。

「おい、リュガ!!」

「一体、どうしたんだろう……?」

シュージとゼノンは何が何だか解らないが、テンゲンは何かを理解していた。

リュガが抱えこんでいる重い何かを……。

遅れてアンジュ、モモカ、タスクが格納庫に到着する。

「お前、何処に行つてたんだ!!」

「ごめんね。これから行くところがあるの。シュージ、モモカをお願い」

アンジュはモモカをシュージに託しヴィルキスに乗り込む。



「アンジュさん、何処へ!？」

「……お兄様の所よ」

アンジュはヴィルキスを動かす。ジュリオ達が居る艦隊へと向かって行く。

「……私たちも行くとしますか」

ヒルダはそう言うのでライフルを置いて自分のパラメイルの場所に向かう。

「ヒルダ……」

「アタシたちも行かなきゃね」

ヒルダに続き、ロザリー、クリスもパラメイルに乗り込み行こうとするが――。

――バンツ!!

敵兵が残っており、クリスが狙撃され、操縦不能となったパラメイルは瓦礫に突っ込んでしまった

更に足場も崩れ出し、助ける事は不可能になった……。

「クリス!!」

「クリス……。ちくしょう……てめえら全員ぶっころす!!」

ロザリーは涙を流して、円盤ドローンを撃ちまくる。

だが、クリスの近くにエンブリヲが立っていた。

タスクもアンジュを追いかけようとバイクに乗ろうとしたが、肩を掴まれる。

振り向くと、シュレディンガー、ヴィヴィアンを背負っていた

「シュレディンガーさん!? その女の子は……」

「話は後だ。今すぐ、リュガとアンジュを追いかけるぞ。エンブリヲも何処かにいるはずだ」

リュガの後を追うアンジュ。サリアが追い付き、対峙する。

「戻りなさい、アンジュ!! 使命を果たして!! 何が不満なの? 私の夢も居場所も奪ったんだから……そのくらい……」

「最低最悪で、何食べてもクソ不味かったけど……好きだった、ここでの暮らし

それを、あいつが全て……壊した!!」

するとアンジュの指輪がうつすらと光始め、剣を抜きサリアのアーキバスを落とす。

「邪魔をするなら……殺すわ!」

その事に答えるかの様に指輪が光、端末も光を放つとヴィルキスは赤色に変化する。「許さない……勝ち逃げなんて許さないんだから! アンジュの下半身デ

ブーーーーー!!」

そのまま落ちて行くサリアは叫びながら海へと落ちて行く。

アンジュは再び、ジュリオ率いる艦隊群へ向かう。



円盤ドローンの群が遅いくるが、腰部のホイールエクスカバーターを操作して叩き落とす

両肩アームの大砲から火炎が勢いよく噴き出る。

最大出力で放ち炎は意志を持つているかのように戦艦を覆い尽くし逃げ場をなくす。

「逃げるー苦しめー泣き叫べええええええええええええええええ!!」

更に火炎の出力を上げ炎の柱が次々とあがる。

その光景はまさに——灼熱の火炎地獄。

「恐怖に慄きながら、死んでいけええええええええええええええええ!!」

炎が収束し、大爆発が起こし戦艦を焼き尽くす

蒼かった海は紅蓮の炎の海が生まれ、黒雲が生まれる。

「うおおおおおおおおおとおおとおおとおお!!」

リュガの瞳が赤く染まり、吼える。

【ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!】

プルートも呼応するかのよう、吼えた。

出力を調整して炎を剣にして切り裂いたり鞭のように振りかざして薙ぎ払う。

今のプルートは全てを破壊し焼き尽くす破壊神だ。

一方のヴィルキスも紅に染まり、赤く染まった剣で戦艦を両断し、紅のオーラを纏つ

た状態で戦艦に突っ込み破壊する。

遂に、ジユリオが乗る戦艦に立つリユガとアンジュは司令室を見る。

「ひいひいっ!？」

「てめえは今すぐに殺してやる。骨も細胞も残さずに!!」

「生きる価値のないクズめ!!」

二人が止めを刺そうとしたその時だ。

「待ちたまえ」

リユガとアンジュの前に現れたのは、紫色のパラメイル、宙に浮いているエンブリヲだ。

「アンジュ、リユガ。君たちは美しい。その怒りは純粹で白い。

理不尽や不条理に立ち向かい、焼き尽くす炎の様に、気高く美しい。

つまらない物を燃やして、その炎を燃やしてはいけない。———だから、二

人の罪は私が背負うよ」

目を閉じ、歌唱するエンブリヲ。

紫色のパラメイルの両肩が開きエネルギー渦が発生する。

「これって…!？」

「ヴィルキスと赤い機体と同じ…!!」

紫色のパラメイルは光学兵器を発射、ジュリオが乗っている旗艦へと直撃する。

「う、うわああああああああああああああ!!」

閃光が収まると、ジュリオが乗っていた旗艦が跡形もなく消え、海面に大穴が開いていた。

アルゼナルを抉った時の威力が桁違いすぎる。

「てめえはいつたい何者なんだ…?人間という感じでもない」

エンブリヲは何かの気配を感じた。

ロケット弾が飛んでくるが、エネルギーシールドで防ぐ。

ランチャーを構えた、シユレディンガー。

タスクはバイクを操作して、アンジュとリュガへ近づく。

「アンジュ!!そいつは危険だ!!離れるんだ!!」

エンブリヲと紫のパラメイルは狙いを定めたが――。

「やめろおおおおおおおおおおお!!」

プルトのカメラアイが光、口が開かれる。

すると、口から渦を巻く青白い光学兵器が放たれた。

「むっ!!」

エンブリヲはそれに驚き、光学兵器を間一髪でかわし、空に直撃すると閃光が炸裂す

る。

「プルートのこんなものが……」

驚く、リュガ。シュレディンガーはプルートを見て呟く。

「……やはり、彼女がメビウスが目覚めたのか？」

今度はアンジュのヴィルキスが青色に代わり、リュガ、タスクたちを巻き込み転移した。

「ほう、つまらん筋書きだが、悪くない」

崩壊したアルゼナルからその光景を見ていた仮面の男が立っていた

「ふん。私を葬るために天才共が作り上げた最終兵器——ドラゴメールか

完全に覚醒するまえに手を打たねばならないね」

## 荒廃世界

見知らぬ土地の廃墟でアンジュたちが集まっていた。

全員、気絶していたがリュガにある舌が伸びて来て、頬を舐める。

それに目を覚ましたリュガはその方を見ると、ドラゴンが見ていた。

「うお!」

リュガはそれに驚くが、そのドラゴンは自分に指を指しながらジェスチャーする。

『アタシアタシ!』

「……あつ!?!お前ヴィヴィアンなのか?」

『そうそう!』

再びドラゴン態へとなっているヴィヴィアンは「キュ〜イ!」と吠えた。

『あれれれ? 面白いえば、リュガはこの姿を見るの初めてだよね? なんて声が解るの?』

「……まあ、半分はドラゴンの血が流れているから声とか解ったんだろうな。とにかく

アンジュを起こしてくれ」

リュガは気絶しているタスクとシユレディンガーを起こす

「おい、タスク。シユレディンガー。起きろ」



「う、うくん……あ、あれ、リュガ？」

タスクとシュレディンガーは目を覚ました。

「確か、我々は海にいたはずだか……」

「けど、廃墟の場所に居る。どうなっているんだ？」

ヴィヴィアンに起こされたアンジュは辺りを見渡す。

「え？ 此処、何処!？」

全員は通信機でアルゼナルに通信を入れていた。

「こちらアンジュ、アルゼナル応答せよ」

しかし……何度も通信を試みるも誰も出ない。

「どうなってるのよ!」

「しかし、大昔に栄えた文明って感じだが……俺たち未知の世界に飛ばされたのか？」

それに原因があるとすれば……ヴィルキスが蒼くなつたところだよな」

「ヴィルキスやプルートの特別だ。君たちも戦闘でそれを経験したはずだ」

シュレディンガーの言葉に先程の戦闘を思い出す。

あの時のプルートとヴィルキスは戦艦相手に叩き壊した。

アンジュは居ても立っても居られないのか、ヴィヴィアンと共に偵察へ向かう。

空を飛んで、いるとどこもかしこも廃墟が広がるが、ある建物が目に入る。

「アケノミハシラ……!？」



「ここがミスルギ王国!？」

「ええ、宮殿も街も綺麗さっぱり無くたっていたけど。あれはアケノミハシラだった、見間違えるはずがないわ」

アンジュは此処がミスルギだと言う証言にタスクとリュガはただ啞然とする。

「でもおかしいの、アケノミハシラも街もずっとずっと大昔の前に壊れたって感じだった」

「俺たちは未来世界に飛ばされたということか？」

何がおどろかわからない状況だ。

小型ロボットがある放送を流しながら横を通り過ぎて行く。

『こちらは首都防衛機構です。生存者の方はいらつしやいますか？』

首都第3シエルターは今でも稼働中、避難民の方を収容——』

その言葉を聞いて、一行は第3シエルターに向かう。

シエルターに入ったが中の人々達が白骨化した死体ばかりだった。

「……餓死したのかひでえな」

シユレディンガーはゴム手袋を両手に付けて死体を調べる。

「……信じられんことだが、数百年以上の遺体のようだ」

衝撃の真実に言葉を失う。

すると、モニター画面が開かれる

『管理コンピュータひまわりです。ご質問をどうぞ』

「一体どうなってるの!?!生きている者はいないの!?! 一体何があったの!?!」

『ご質問を受け付けました、回答シークレンスに入ります』

辺りが暗くなり、何かの映像が映し出される。

あたりが戦争している映像だった。

『実際の記録映像です。統合経済連合と汎大陸同盟機構による大規模国家間戦争——  
』。

”第七次大戦”、”ラグナレク”、”D-War”などと呼ばれる戦争により地球の人口を11%まで減少』

その事にリユガ達は思わず息を飲む、すると目の前にある機体が目に映る。

『その状態を打破すべく、連合側は絶対兵器——ラグナメール——を投入』

それはエンブリヲが操っていた機体だった。

しかもそれだけじゃない。リユガ達の目にアンジュが乗っている”黒いヴィルキス”が6機も映し出された。

「あれは……ウイルス!?」

黒いウイルス達は光学兵器を発射し、アケノミハシラを壊す映像が映し出される。

『こうして戦争は終結、ラグナメールの次元共鳴兵器により地球上の全ドラグニウム反応炉が共鳴爆発。』

地球は全域に渡って生存困難な汚染環境となり全ての文明は崩壊しました。以上です、他にご質問は?』

「世界が……滅んだ?」

アンジュとタスクは目の前の光景に驚きを隠せなかった。

そして、リュガはその当時崩壊した時期を問う。

「……それは何時の出来事だ?」

『538年193日前です。』

世界各地2万976ヶ所のシエルターに、熱、動体、生命反応なし。

現在地球上に生存する人間はあなた方4人だけです』

コンピューターはそう答え、リュガはモニター画面に向けて殴打し割れた音が響く。

「ふざけやがって……」



辺りは夜になり、シエルターに残っていた食べ物を集めて食事をとるリュガたち

「……しかし、どうしたもんかねえ」

「ふざけないでよ!! 私はこの目で見た物しか信じない!!」

「……てめえはそういう性格だったの忘れてたな。少し現実を受け入れろよ、ワガママ娘!!」

お互いイライラが募っていたのか、口でゲンカになる。

タスクはアンジユを、シュレディンガーはリュガをなだめに入る。

「こんな時にケンカしてもなにもならん。落ち着け二人とも。アンジユ、君もだ」

「貴方に関係ないでしょう?それにジルの作戦。」

目的の為なら何人犠牲しても良い考えなんて潰れても良かったのよ。

あんな最低最悪のゴミ作戦、笑えるわ」

それを言った途端にタスクが……。

「じゃあ、俺の両親もゴミに参加して無駄死にした……そう言う事か」

「えっ?」

タスクが突如言いだした事にアンジユも振り向く。

「俺達、古の民は、エンブリヲとカノープスから世界を解放する為にずっと戦って来た。

父さんも母さんもマナが使えない俺達やノーマが生きて行ける世界を作ろうとして戦い……死んだ！

死んでいった仲間も……両親の思いも……全部ゴミだと言うんだな!! 君は!!」

タスクは今まで見せた事のない静かな怒りの表情にアンジユは戸惑い、リユガは黙っていた。

アンジユは謝ろうとしたが、タスクはそのままどこかに行ってしまった。

しかし、タスクが言っていた奇妙な言葉があった。エンブリヲとカノープス。

「なあ、シユレディンガー。タスクが言っていたエンブリヲとカノープスってなんだ？」  
「エンブリヲはヴィルキスと同じラグナメイルーヒステリカを使う男。」

カノープスはエンブリヲと共に行動していた右半分仮面をつけた男。

10年前、私やパブロフ、ヘンペル、ラプラス、カルネアデス、君の母であるミリルは二人の元で働いてた」

「なんだと……!?!」

「だが、二人の所業を知り、タスクくんたち古の民と秘密裏に計画を練った。

ヘンペルは私やラプラス、カルネアデスに肉体改造を行い常人とはかけ離れた肉体強化に成功した。」

リユガ、君が20歳に向かえてマナが枯渇する技術はヘンペルのおかげでもあるから

ね」

「そのヘンペルは……?」

「……ヴィルキスを強奪し設計図を奪う事に成功したが、その犠牲になってしまった。

彼の死を無駄にしないためにもエンブリヲとカノープスはなんとして倒さなければ  
ならない」

シユレディンガーの言葉をただ、聞くリユガとアンジュ。

アンジュは命をかけたその計画にタスクの両親が関わり、命を落とした。

あんな暴言を言つて後悔をした。



翌日——。

(……タスクにどう言えば……)

どうにかタスクに謝りたいが償う方法がない。

アンジュは地下の店にある物を見つけ、それを見て何かを思いついた。

一方、機体の修理をしているリユガとタスク。

シユレディンガーはヴィヴィアンをなんとか戻せないか色々と診断していた。

「……タスク、これ」

アンジュが戻ってきて手には金色に輝くネックレスだ。

「あの、に……似合うかなと思って……それだけ……」

「……ありがとう、アンジュ」

タスクはアンジュが持つてきてくれたネックレスを首にかける

リユガはフツと笑う。

「タスク、アンジュの事を許してくれないか？生意気で融通が効かないが、真つ直ぐなん

だよ」

「うん、解っている」

「それにさ、お前らは人どうしだから、いいんじやねえか？俺みたいな半端な奴と違うし

さ」

「どういうこと？」

「……親父に会って、真実を知ったんだよ。

俺はドラゴンとノーマの間に生まれて、プルートの中にさ母さんの魂が入っているっ

て……

S Fとかファンタジーみたいな話じやねえか」

リユガの出生とプルートの秘密を知り驚愕するアンジュとタスク

「怒りが爆発して、グチャグチャになって何もかも消え去りたいと思ったださ……」。

けどさ、昨日のタスクとシユレディングーの話聞いて、生きようかなと思っただ



よ。

命をかけて死んでいった連中のためにも、エンブリヲとカノープスを倒さないといけないからさ」

過去は変えることも戻すこともできない。

例え、自分の正体は何であれ、生きていくことを決めたりユガ。

もうリユガには迷いは無くなったようだ。

「……さてと、飯の準備でもしますかな。二人は休んでなよ。飯ができるまで愛でも語らってな」

リユガのぶつきらぼうな言葉に顔を赤くするアンジユとタスク。

シユレディンガーとヴィヴィアンも空気を読んだのか、リユガの後に続く。

「私ってホント駄目ね、何をやってもすぐに頭に血が上って…」

「君は元皇女。俺達とは考え方が違うんだからさ…」

二人はつまらない事に思わず笑いだす。

目線が近い事にタスクとアンジユは少しばかり頬を赤くする。

「ねえ…もつとくっ付いたら？」

「えっ?! い、いや……?!」

アンジユの誘いにタスクは真つ赤な顔で慌ててしまい、戸惑いながら言う。

「お、俺はヴィルキスの騎士だ!! 君に手を出すなんてそんな!!」

「無人島の件やミスルギ皇国の件で散々、私の股に突っ込んだのに?」

痛い所を突かれて、タスクは黙り込んでしまう。

「もしかして、私の事…嫌い?」

「そ、そんな事ある訳ないだろう!!」

「それじゃあ何で……?」

「そ、それは……恐れ多くて……」

アンジュはタスクに意外な言葉に思わず振り向く。

「10年前…いや、正確には538年前か。」

リベルタスが失敗して右腕を失くしたアレクトラは二度とヴィルキスには乗れなくなり、

俺の両親も仲間も死んだ。俺にはヴィルキスの騎士の使命だけが残された」

タスクの話す事にアンジュはただ黙って聞いていた。

「でも……俺は怖かった、見た事も会った事もない誰かの為に戦って死ぬ使命が。」

俺は……逃げた、あの深い森に戦う理由生きる理由も見当たらず、ただ逃げた。

そんな時に君と出会った」

「えっ?」

「君は……戦っていた、抗っていた」

アンジュが必死に戦っている姿にタスクはどうやら気づかされた様なのだ。それを聞いたアンジュは顔を上げた。

「あれで目が覚めたんだ。俺……何やってんだろうって。」

あの時やつと騎士である意味を見つけたんだ。俺は歩き出せたんだ。

押し付けられた使命じゃない、自分の意思で……だから俺は君を護ればそれで良いと——」

「ヘタレ」

アンジュの言葉にタスクは彼女の方を見て、アンジュは微笑みながら言う。

「でも純粹」

アンジュはタスクの手を握って、それにタスクは顔を赤くするがアンジュは突如暗い顔になる。

「私は血塗れ。人間を殺し……ドラゴンを殺し……血の繋がりのある私の兄ですら死に追いやった。」

私は血と罪と死に塗れてる……貴方に守ってもらう資格なんて」

「そんな事ない！アンジュ！君は綺麗だ!!」

タスクの言葉にアンジュは一瞬目を大きく開き、タスクはアンジュの両肩を掴む。

「君がどれだけ血に塗れても、俺だけは君のそばにいる！」

「……暴力的で気まぐれで好き嫌い激しいけど……それでも？」

アンジュはその事をタスクに言うと、タスクは笑みを浮かばせて言う。

「ああ、それでも」

その事を聞いたアンジュはタスクの信頼する事によりやく素直となり、そつと目を閉じて口を上げる。

タスクは答えるかのようにアンジュとキスをした……。

(全く、やつとか……)

(若いつていいものだな……)

(きやあ〜〜)

物陰に隠れていたリユガ、シユレディングー、ヴィヴィアンはアンジュとタスクを見て喜んでいた

すると……急に暗くなり上を見るとガレオン級ドラゴンがこちらに降りようとしていた。

「アンジュ!!タスク!!全力で逃げろ!!」

リユガの言葉に反応した二人だが、逃げそびれてしまう。

機体は動けないし、逃げるのも無理だ。

「……襲ってこない？」

ガレオン級ドラゴンが首を垂れると二人の女性が乗っていた  
「ようこそ、偽りの民達よ。我らの世界……」 本当の地球へ

## もう一つの地球へ再会へ

二機のパラメイルとドラゴン達の群れに連れられて、何処か別の場所へと向かわさされていた。

リユガたちはコンテナの中に入っていた。

「しかし……生存者がいたとはな。だが、どうしてドラゴンと一緒にいるのか謎だが……」

「あの人たちから情報を得られればこの世界が解るかもね」

一行がたどり着いた場所は和風の宮殿だった。

コンテナが開きナーガとカナメが刀と薙刀を構える。

「大巫女様がお会いになる。コチラへ」

突然、ヴィヴィアンの背中に麻酔弾が撃ち込まれ、それにヴィヴィアンは気を失う。

ヴィヴィアンの異変に気付いたリユガたちはヴィヴィアンの方を向く

「何をする気だ!？」

リユガは食ってかかろうとするがナーガとカナメが構えるが一人の声が響く

「心配することはない。そいつを治療するだけだ」

声の主にリュガは振り向く。

アルゼナルを強襲し、戦い合った——ゼランディアが姿を現す

「お前、どうしてここに!？」

「無礼だぞ、この御方はバルドル一族の王。大将ゼランディア様だ!!」

ナーガは今にもリュガに斬りに掛かろうとするが、ゼランディアが制止した。

「やめろナーガ、そいつは大事な客人でミリルの息子だ」

「なんで、母さんの名前を知っているんだ!？」

母親の名前に反応してリュガはゼランディアに問う。

「色々と話したいが……大巫女様を待たせるわけにはいかん。ついてこい」

宮殿に入り、通路を歩き、玉座の間に着いたリュガ達。

そこに数人の者達がその場に座っていて、すざれに隠れていた。

ゼランディアは一番上の者に問う。

「大巫女様、連れてきました」

「ゼランディア、その者達がお前が認めたという男と異界の女と男か？」

「女の方はラグナメイルが一つ、ヴィルキスを操る者です」

「……お主等、名は何と申す？」

「人の名前を聞く時は、まずは自分から名乗りなさいよ!」

アンジュが怒鳴り声で叫び、それに他の者達はざわつく。  
ナーガとカナメはアンジュに睨みつける。

「大巫女様に何たる無礼を！」

ゼランディアはクククつと笑っていた

「肝が据わっている女だ。同族なら、中々の実力者になってたよ」

「特異点は開いておらぬはず、どうやってここに来た？」

アンジュは答えそうにないのでリユガが代わりに答えた

「ヴィルキスが青くなって、気がついたらここに来た。証拠とかないと思うが……」

「それと、プルートと呼ばれる機体もですね」

別の女性の声が聞こえ、そのすざれから女性が出て来た。

女性にアンジュは見覚えがある女性だった。

それはアルゼナルを襲撃してきたあの美しい黒髪の女性だった。

「あなたは……!!」

「私は神祖アウラの末裔にしてフレイヤー一族の姫、中将サラマンディーネです」

「ようこそ真なる地球へ、偽りの星の者達よ」

「知っておるのか？」

大巫女がサラマンディーネに問いかけ、それにサラマンディーネが答える。



「この者ですわ。先の戦闘で我が機体と互角に戦ったヴィルキスの乗り手は……」  
「あの者が………」

大巫女がアンジュをそう見て眩き、そして他の者達が大巫女に言いだす。

「あの女は危険です！ 生かして置くわけにはなりません！」

「早急に処分を!!」

「やれば。死刑には慣れている。ただし……ただで済む事は思わない事ね」

「やめろアンジュ。こんな所で争っても何も解決にならん」

「でも……!!」

「ヴィヴィアンだって、こいつらの手に渡っている。下手に刺激したらヴィヴィアンが危ない」

その言葉にアンジュは渋々と黙る。

「お待ちください皆さん、女はヴィルキスを動かせる特別な存在。

それに男は半分は我々の血が流れており、ミリルの息子です。

ここは生かして置く方が得策かと、この者達の命……私にお預け頂けませんか？」

「私からも頼む。ミリルの息子に伝えないといけない事が山ほどあるからな」

サラマンディーネとゼランディアの言葉に周囲は納得したようだ



客室に案内されたアンジュたち。

サラマンディーネとゼランディアは座り、御茶と菓子を用意する。

「さて、何から聞きたいんだ？」

「……は……本当に地球なのか？」

タスクの問いにゼランディアは「ああっ」と肯定の返事をする

「なら。お前らは一体なんだ？」

「……人間ですわ」

「だがドラゴンの羽と尻尾があるが……？」

「それについては後で話すでしょう。それで地球が二つあるとしたら、信じるか？」

一部の間がこの地球を捨て、移り住んだのが、お前らが住んでいる地球だ」

「……何故、そんな事を？」

「あなた達はあの廃墟を見たはずですよ。この星で何が起きたのかを……」

「世界戦争に環境汚染か……。それで移り住んだというわけか？」

「ああ。ミリルはいち早くエンブリヲとカノープスの存在を知りお前たちが住む地球へ渡った」

「母さんはこの世界から俺たちの世界へ渡ったのか……」

「そっちの世界でミリルと同じ志を持つ者ができ、エルドという男と愛し合ってお前が生まれたというのも知ったさ。」

そのエルドという男は大きな器を持ってたな。

ミリルがドラゴンだと知っても《ドラゴンでも人間でも関係ない、ミリルを愛する》つと

父さんと母さんは種族を越えた愛を育んでいた事を知るリユガ。

それなのにあの時の自分は、最低な両親だと思ってしまうことを恥じ入っていた。リユガはある疑問が思いつき、ゼランディアに問う。

「じゃあ、なんで母さんの事を知っているんだ？」

「……ミリルは。私の妹だからな」

「「えええええー！！？」」

ゼランディアの言葉に衝撃を受けるリユガとアンジュとタスク。

シユレディンガーは知っていたが、エルドに口止めされていたようだ。

「まあ、呼ぶなら義兄さんって呼んでくれよ。叔父さんって呼ばれたくないしな。」

話を戻すがエンブリヲとカノープスはある計画を実行したんだ」

「計画……？」

「それについては、直接見せたほうがいいでわね」  
サラマンディーネは立ち上がり、リユガたち一行はある場所へと向かう。

## もう一つの地球～母が遺した物～

もう一つの地球～母が遺した愛～

アケノミハシラと同じ塔へとたどり着く一行。

「アウラの塔とわたくし達は呼んでいます。嘗てのドラグニウムの制御施設ですわ」

「ドラグニウムって、シエルターのモニターが説明してた言葉だな」

サラマンディーネ達は制御施設内を進みながら説明していた。

「ドラグニウムは22世紀末に発見された強大なエネルギーを持つ超対称性粒子の一種。

世界を照らす筈だったその力は、すぐに戦争へと投入されました。

環境汚染、民族対立、貧困、格差、どれ一つも解決しないまま人類社会は滅んだので「す」

環境汚染、民族対立、貧困、格差：元の世界でもそれらが起きたがマナで解決した。

こちらの地球ではマナというものがないのか？

エレベーターに乗って操作して稼働させる

「そんな地球に見切りをつけた一部の人間たちは、新天地を求めて旅立ちました。残された人類は一つの決断を下します。」

「自らの体を作り変え、環境に適応すること。遺伝子操作により、生態系ごと」  
「そうやって、ドラゴンが誕生したわけか」

エレベーターは目的の場所へと着く、巨大な空洞が広がってた。

「ここに”アウラ”が居たのです」

ゼランディアは装置を動かすとホログラムに神々しく純白に輝く白いドラゴンが姿を現す。

「アウラ。汚染された世界に適応するため、自らの肉体を改造、偉大なる始祖。最初のドラゴン」

「私達は罪深き人類の歴史を受け入れ、贖罪と浄化のため、生きることを決めたのです。」

「男たちはドラゴンに姿を変え、世界の浄化のために生きる」

「つまり今まで襲ってきた大型ドラゴンは、こちら側の男性というわけだ。」

「ただ、ひとつだけ疑問がある」

「俺は半ドラゴンだから、解るが……ゼランディアはなんで人間体のままなんだ？」

「ミリルに特別な処置を施されたんでな。お前の成長を見る事と護る事をな」

しかし、アウラはエンブリヲとカノープスが連れていきやがった

アウラのエネルギーを利用し、おまえらの世界の力の元——”マナ”を発展させた」

マナの誕生の理由を知り驚愕するリユガたち。

「少しは分かって貰えましたか？　ですが、まだあなた達は知らない事があります」

「え？」

サラマンディーネに問いかけられて、それにアンジユはサラマンディーネの方を向く。

「あなた達の戦いが偽りの戦いをしている事を、分かって貰えますか？」

「偽りの戦いって……」

「あなた達が私達の同僚を殺している事にあなた達の世界が維持されてる事です」

アンジユはその事を聞いて驚く。

サラマンディーネの話を聞くとあの世界にマナのエネルギーを維持しているのはドラゴンの心臓から取り出されたドラグニウムだと言う。

ドラゴンからドラグニウムを取り出すにはドラゴンを連れて行く必要があるらしい。

可能とするのが今まで行つて来たあのドラゴンとの戦いであった。

それを聞いたアンジユはある事を思い出す。

(それじゃあ、あの時——!?)

あれはタスクと二人つきりで無人島で見た。凍結されたドラゴンを輸送されているのを。

「分かって頂けましたか？偽りの地球、偽りの人間、偽りの戦いと言った意味が」  
アンジュはサラマンディーネが自分達の世界の偽りの真実を話す

「それでもあなたの世界に帰りますか？偽りの地球へ」

「……当然でしょ！貴方の話が全部本当だったとしても私達の世界はあつちよ！」  
「ちよつとアンジュ！話を聞いてたの!？」

タスクはアンジュを慌てて止めるも全く聞かずだ。

「そうか……ならお前らを拘束させて貰う。これ以上、同朋を殺させる訳にはいかん」  
ゼランディアはアンジュの前に立ちはだかり、戦おうとしたが――。

「いい加減にしろ、アンジュ!!」

リユガが声を荒げて、止めに入る。

一同は、リユガを見る

「俺たちはエンブリヲとカノープスの掌で踊らされた。

ここで争っても何も解決しない、倒すべきなのはエンブリヲとカノープスだろ!？」

「リユガ……」

「なあ、ゼランディア。俺の母さんはどうして俺の機体に魂を入れるような事をしたの



か知らないか？」

リユガの問いに、ゼランディアは重苦しい表情になりながら、口を開く

「アウラを取り返そうとしてもエンブリヲには『ラグナメール』、カノープスには剣である『トリアングルム』を持っている。

共に強力な兵器で勝ち目は無い。そしてミリルはある一つの計画を出した」

「ある計画……？」

「自分を犠牲にして究極にして絶対兵器ドラゴメールを造る。

ミリルは霊力が強力で機体に血、骨、魂を使う事でやつらの機体に対抗できる最後の手段。

プルートには魂を、黄龍號にミリルの骨を使ってドラゴメールは完成した」

五年前の出来事に自分を犠牲にして最後の切り札を造ったミリル。

リユガもアンジユもタスクもただ言葉を失った。

「当然、私もエルドもサラも反対したさ……。

犠牲にして完成させなければいけない代物を。

だが……ミリルはなんて言ったと思う？」

ゼランディアはリユガの両肩を掴んで真っ直ぐに言う

「私はどんなに傷ついても辛くても我慢できるわ。リユガは私の大事な子供だから。

それが母親として最後の仕事だから』。

……………リユガ、お前はここまでミリルに愛されているんだな」

母の大きな愛にリユガは涙が止め処なく流れ、歯を食いしばった。

「泣きたい時は思いつきり泣いてもいい。泣いた数だけ強くなれる」

ゼランディアはリユガを抱きしめた。

それが止めとなり、リユガは涙を流し泣いた。



日が沈みかけ、夕暮れ。

真実を知ったリユガたちはどうするのかしばらく、こっちの世界で休むことにした。

どのみち機体が完全に直らなければどうすることもできない。

リユガの後ろにサラマンディーネとゼランディアが立っていた

「母さんは、俺を護るために……………辛かったよな」

頬に涙が伝うが、涙を払い決意の顔をする。

「俺にやるべき事ができたな……………」

「やるべき事ですか……………」

「エンブリヲとカノープスを倒す。それに神に逆らい、神を殺すのは、いつだって人間とドラゴンだ」

リュガの言葉にサラは驚き、ゼランディアはフツと笑う

（神に逆らうのは人間とドラゴンか。

ミリル……お前の子はとてつもなく大きい器を持っている

だから、見ていてくれ。リュガと共にエンブリヲとカノープスを倒すのを!!!）

——— 竜の世界、新たな誓いを立てた。

## トリアングルム

夜——。

宮殿の玉座の間で大巫女、サラマンディーネ、ゼランディア。

アウラの民の巫女たちが集まっついて、彼女達の前にリザーディア——リイザがホログラムで通信回線を開き話していた。

「それは真かりザーディア！」

『はい大巫女様、新生ミスルギ帝国の地下。アウラの反応は確かに此処から』

リイザの報告に巫女たちは思わず声を上げ、大巫女は領きながらリイザをほめる。

「よくぞやってくれたリザーディア、時は来た。」

アウラの子よ、これよりエンブリヲとカノープスの手から全能の母——アウラを奪還する。

リザーディア、特異点解放のタイミングは手筈通りに」

『おおせのままに』

そう言い残してリイザは通信を終えて消える。

「これはこの星の運命を掛けた戦い、アウラと地球に勝利を！」

『勝利をー』

大巫女の声と同時に皆も頭をさげる。

会議が終わったゼランディアはヴィルキスとプルートの修理をしているシュレディンガーに会う。

「やはりというべきか、ミスルギの地下にアウラがいるか」

「決戦の時は近い。シュレディンガー、お前たち天才の力を借りたい」

「何を今更、エンブリヲとカノープスを倒すために君たちと協力している。

ヘンペル、いや……カシムの仇を取らなければ死んでいった彼に申し訳ない」

シュレディンガーはそう言い、ヴィルキスとプルートを見る。

「ヴィルキスはOKだが、プルートは封印を解かなければならん。

カノープスが所持している剣——トリアングルムを使ってくるはずだ」

「ああ、トリアングルムと対等に渡り合うには黄龍號とプルートが必要だ」



寝室へと案内されるアンジュ、タスク、リュガ。

「お前たち、二人はこの部屋だ。リュガは別室だ」

ナーガ、カナメが部屋の前に立つが、この部屋はアンジュとタスクが使用するようだ。  
「えっ!?二人で!？」

「ああ、ではまた早朝の時に」

ナーガとカナメの後をついていくリユガ。

タスクとアンジュは思わず目線を合わせると、顔を赤くして、視線を逸らす。

しばらく歩くと、襖の前に立つナーガとカナメ。

「お連れしました」

「どうぞ」

開けると、サラマンディーネが座っていた。

「まさかだと思うが……」

「ええ、リユガは私と一緒に」

「姫様に手を出したら、私は許さんぞ……!!」

ナーガは今にも斬りかからんとする目でリユガに忠告する。

それに対しサラマンディーネはナーガを咎める

「ナーガ、お止めなさい。カナメはナーガと共に行きなさい」

「え!!し、しかし、サラマンディーネ様!!」

ナーガが戸惑いながらもサラマンディーネに問う。

「……ナーガ?」

サラマンディーネから凍り付くような視線を放ち、二人は慌てて襖を閉めて、その場を離れてた

「……警戒しないのかよ?」

「ええ。それに……貴方に襲われても……」

少しだけ頬を赤く染めるサラマンディーネ。

(ドラゴン世界の女性って……肉食系なのか?)

二つの意味で感じたリユガ。

しかも、布団が一つで二人分は入れるサイズだ。

サラマンディーネが先に入り、リユガは背を向けて寝る

「どうして背を向けるのですか?」

「……女と一緒に寝るのは初めてだからな……」

少し焦りながら、言うリユガ。

サラマンディーネはイタズラな顔になり、リユガを抱きしめる。

「!!?」

背中に温もりと柔らかな感触——胸を押し付けられているのを感じる。

心臓がバクバクと鼓動し、身体が火照るの感じる。

「……男性の背中って広いのですね」

「……ゼランディアがいるのにか？」

「ゼランディアは兄の様な人でもあり、アウラの守り人でもあり、師範ですわ」

「アウラの守り人？」

「彼の一族はアウラを守護する戦士。彼と貴方の母はアウラを奪還することに命をかけていますわ」

命をかけるほどまで、アウラを取り戻す使命を背負っている。

母も自分の命を犠牲にして、プルートと黄龍號を造った。

サラマンディーネだって、アウラを取り戻すために戦っている。

リュガはサラマンディーネの方を向き、彼女を抱きしめる

「……リュガ？」

「……俺にはこうするしか安心させてやれないと思う。

命をかけて戦っていたからさ、今だけは安心させてやりたいと思っている」

不器用な優しいさにサラマンディーネはフツと笑い彼の胸に顔を埋める。

(彼は本当に優しいのですね……)





次の日――。

「貴様、サラマンディーネ様に何かしたんじゃないだろうな……！」

「……まあ、お互い抱きしめ合って寝たぐらいだしな」

その言葉にナーガは震え出し、斬りに掛かろうとしたがゼランディアが止めに入る  
「落ち着けて、リュガもサラも大人だからさ」

「し、しかし……!!」

「ナーガ、お前はもう少しサラ離れしないと……。それに、二人は間違いないから  
だろっよ」

そんな会話をしてタスクとアンジユの部屋の前に来て、サラマンディーネが襖をノックし入る。

「おはようございます……あら？」

タスクがパンツ一丁でアンジユの寝間着が完全に崩れていた状態。

リュガは「またか」と思い、ナーガとカナメ頬を赤めており、ゼランディアはふむつとしていた

「朝の“交尾中”でしたか。どうぞお続けになつて？」

「どうして、そう見える……」

とんでもない発言にリユガはツツコミを入れる。

「ちがー！ー！ー！！！」

アンジュはタスクを突き飛ばしてしまい、終いにタスクの尻を何度も蹴っていた。

リユガ達が朝食に行くと、そこにはヴィヴィアンと母ラミアの姿が居て、共に朝食を取っていた所だった。

「サラマンディーネ様、ゼランディア様」

「よく眠れましたか？」

「それが、ミイと朝まで喋りしてまして……」

「寝不足」

ラミアがそのミイと言った言葉にリユガは頭を傾げる。

「ミイ？誰だ……？」

「ヴィヴィアンの事だよ。彼女の本当の名前だって」

タスクからその事を聞いたリユガは思わずヴィヴィアンの方を向く。

ヴィヴィアンの本当の名前がミイと言うのは予想も付かなかっただろう。

「貴方がミリルの息子ですか？母と同じ色の瞳と顔立ちをしていますね」

「母さんを知っているのか？」

「私たちに知恵や勉学を教えてくださいました御方です。……立派に育ちましたね」

ラミアはリュガの頬を優しく撫でる。

母はこちらの世界でも、頑張っていたことを知る。

その時——。

「なんだ……?」

ゼランディアは窓から外の景色を見る、アウラの塔から何やら異変が起きていた。

ある空間が変化して行き、ある風景が映る。

アンジュがまだ学生だった時に試合した事がある試合会場——

「あれは……エアリアのスタジアム!」

異変の空間はその人々を飲み込み、街を崩し、がれきと共に生き埋めにさせて行く。

「一体何が……!?!」

「サラ、いくぞ!!」

「ナーガは街の人々を!!カナメは大巫女様に報告を!!」

サラマンディーネは指示を出し、ゼランディアと共に外へ出る。

「焰龍號!!」

サラの額の宝玉が光り、空から焰龍號がやってくる。

「黄龍號、招来!!」

ゼランディアは刀を天に掲げると空から黄龍號がやってくる。

「アンジュ、俺たちもあいつらを助けに行くぞ」

「……ええ」

アンジュ、リュガ、タスクはシュレディンガーの所へ向かう。



「皆さん！すぐに宮殿に避難を!!」

それに皆はすぐに避難をし始めて、サラマンディーネとゼランディアは落ちて来るが、れきを次々と破壊して行く。

サラマンディーネとゼランディアは気配に気づく。

迫っている異変の空間が止まり、三体の機体が出現する。

—— 盾と槍を持つ騎士風の灰色の機体。

—— 全身が透明感あり、女性の様なフォルムをした翡翠色の機体。

—— 6つの黒いモノリスを浮かばせている黄色のラインが入った黒い機体。

三機は、焰龍號と黄龍號を囲む。

「この機体は……!?!」

「トリアングルム……!!」

一方、シュレディンガーの研究所へとたどり着いたアンジュたち。

「シュレディンガー、機体は!？」

「いつでも出撃できるぞ。それに、ミルルが遺した資料やパーツを使ってプルトの改修もした」

「母さんが遺した物を改修したのか、ありがとうよ」

「リュガ、アンジュ。あの三機はカノープスが所持している剣……トリアングルムだ

エンブリヲが所持しているラグナメールと同等、それ以上の性能を持つ。気を付けろよ」

「……解った」

アンジュはヴィルキス、リュガはプルトへと乗り込み、サラとゼランディアの所へ向う

ガギイン!!ガギイン!!

灰色の機体——デネボラが繰り出すランスの突きを弾くゼランディア。

翡翠の機体——スピカからツララを放ち、切り払うサラマンディーネ。

黒い機体——アルクトウルスは、熱光線を放つが、二人はなんとか避ける。

「デネボラ、スピカ、アルクトウルス。一度に三機も相手をする手強い……」

「それに、次元が迫ってきてますから時間だって……。まさか、敵の狙いはこれ？」  
焦る二人だが、アンジュとリュガと合流する。

「何やってるのよ！サラマンドリル!!」

「名前、間違えているぞアンジュ……」

二人は異変の空間が人々を飲み込んで行く光景に驚愕する。

するとタスクから通信が入る。

「空間を歪ませているのはエンブリヲの仕業だ。

エンブリヲは時間と空間を自由に操る事が出来るんだ！

俺の父さんも仲間も石の中に埋められて死んだ……。あんな風に!!」

「ひでえ事をしやがる……。!!」

三機はプルートを見つけると、一直線に向かい囲むように立ちふさがる。

「狙いは俺か……。!!」

デネボラは槍を構えて、連続で突くが、チェーンソーで迫り合いをする。

斬りに掛かろうとするが、スピカは翡翠の独楽を生み出し、プルート目掛けて放つ。

チェーンソーで切り裂くが翡翠の独楽が弾け、氷の結晶となりプルートを傷つける

「厄介な!」

反撃に両手をウェルダーに変形させて、スピカ目掛けて火炎放射を放つ。

しかし、アルクトウルスはモノリスを使い、シールドの様に使い火炎放射を防ぐ。

モノリスから無数の穴が開き、レーザーを放つ

「あの黒い楯は防御にも攻撃にも使えるのかよ!!」

敵の多彩な武器を前に、攻撃に転ずることもできない

「アンジュ!!サラマンディーネ!!二人は迫りくる空間を何とかしてくれ!!」

この三機は俺が抑えておく!!取り返しのつかないことになる前に!!」

アンジュとサラマンディーネは戸惑っていたが、リュガを信じて空間を止めに向かう。

ゼランディアはリュガと並び立ち、手には大剣を構える

「一人でやろうとするな。俺も協力する」

「それじゃあ、頼むぜ」

プルートのチェーンソーを、黄龍號は剣を構えてトリアングルムと交戦する。

## 超絶進化

シュレディンガーとタスクも避難活動をしている中、街の非難を手伝っていたヴィヴィアンの姿が発見する。

何かと思い、駆けつける二人が見た光景はラミアが瓦礫に埋もれていたのだ

「何でこんな危ない事をしたのさ！アタシだったら訓練を受けてるからへっちゃらだったのに！」

「子供を守るが…お母さんのお仕事だからよ…」

辛そうな顔をせず、笑顔を見せるラミア

「お母さんさん……………」

「ヴィヴィアン、大丈夫か!？」

「うん、でもお母さんさんが……………」

ヴィヴィアンはラミアを見て言い、シュレディンガーは頷く。

「任せろ、こういう時の道具がある」

両手にグローブを装着するシュレディンガーはラミアを下敷きになっている瓦礫をどかす



自由になったラミアは立ち上がろうとするが瞬間足を痛める。

「うっ……!!」

どうやら下敷きの際に足を怪我した様だ。

「大丈夫か!」

「……ミイ! 貴方は彼らと共に逃げなさい!」

「やだ!! 行かない!!」

その事にラミアは啞然とする。

「えっ?」

「私……お母さんと一緒じゃなきや行かない!!」

ヴィヴィアンがラミアの事をお母さんと言った瞬間、ラミアは思わず嬉し涙を流す。

「……ラミアさん、私の背に乗ってください。」

タスクとヴィヴィアンはラミアさんを私の背に乗せるのを手伝ってください」

「はい」

「合点!!」

シュレディンガーはシャガミ、タスクとヴィヴィアンはラミアをシュレディンガーの背に乗せて四人は急いで宮殿の方まで走る。



トリアングルムと交戦するリユガとゼランディア。

デネボラのアイカメラが輝きだすと、巨大な槍へと変形し猛スピードで突っ込んでくる。

二機は避けて、デネボラの攻撃を見て驚く。

「アイツ、変形できるのかよ!？」

デネボラ・ランサーは反転して、また突っ込んでくるが避ける。

しかも、敵の攻撃が加速してきている。

スピカとアルクトウルスはその隙を狙ってくるかのように、攻撃を仕掛けている。

一方、迫りくる次元にどう対処すればいいのか考えているアンジユとサラマンディーネ。

「あれが……あるじゃない!!アルゼナルをブツ飛ばしたアレ!!」

アンジユが言うのはアルゼナルを削り飛ばした光化学兵器。

しかし、サラマンディーネは首を横に振るう。

「ダメです。都是おろか、神殿ごと消滅してしまいます……」

「だったら、3割引で撃てばいいじゃない!!」

「そんな調節できません!!」

「あなたお姫様でしょ、サラマンマン!!危機を止めて、民を救う。それが上に立つ者の使命よ!!」

その言葉にサラマンディーネは覚悟を決めて、歌唱しアンジュもまた歌唱する。

「♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪」

二人が同時に歌うとプルートの変化が起きる。

すると、メインモニター画面に文字が表示される。

「これは……何かの呪文か?」

始めてみるが読める、リユガは目を閉じ、呪文を唱える

「リザーレム・ドラグーン・ローア!!」

リユガが呪文を読み上げると同時に、プルートに変化が起きる。

背には青色の翼が展開、腰に竜尾が生え、口と思われる部分が開かれる。

その姿はまさに——ドラゴン。

ゼランディアは驚きつつも笑う。

「ミリルが残した機械のパーツとプルートの姿はこの時のためという事か…!!」

「これなら、いける……!!」

リユガの瞳の色が金色に染まり、トリアングルムへ向かう。

。デネボラ・ランサーが猛スピードで突撃するが、両手で掴み、大きく振りかぶって――。

「おらあああああああつ!!」

――バギイイインツ!!!!

地面に叩き付けると同時に、デネボラの刃が粉々に砕かれた。

スピカが冷凍光線を放つが、翼から炎が吹き出し羽ばたかせ熱風を巻き起こし冷凍光線を掻き消す。

「突っ込む!!」

炎の翼でスピカにぶつけると、スピカに罅が入り地面に叩き落とす。

アルクトウルスは不利になったと判断し、スピカとデネボラを回収して、消え去った。

「……向うの世界に戻ったか……。あれが強化されたプルートのかか……」

ゼランディアは更なる進化を遂げたプルートを見る。

機械の竜人とも言える姿だ。

焰龍號は金色となり”収斂時空砲（しゅうれんじくうほう）”の準備をし、ヴィルキ

スはウリエルモードとなりディスコード・フェイザーを展開。

同時に放たれた光化学兵器は異変の空間に直撃し、消滅した。



どうにか危機は去り、一息つく一同。

空は茜色になっている。

「……それにしても、二人の歌に反応してプルートが変化したのか」

「いや、変化ではなく進化と言うべきだろうな。ミリルが造ったドラゴメイルは生きた機械。」

プルートが完全に目覚めるには、二人の歌が必要だったわけか」

ゼランディアは推測する。

「貴女が歌ったのは、エンブリヲがこの星を滅ぼした歌……貴女はあの歌を何処で……？」  
「お母様が教えてくれたの、どんな時でも進むべき道を照らす様になって」

アンジュは自分の歌を覚えてくれた母の事を言い、それにサラマンディーネは言う。

「なるほど、わたくし達と一緒にですね？」

「えっ？」

”星の歌”……私達の歌もアウラが教えてくれた物ですから。

何て愚かだったのでしょうか、貴女は私の所有物だなんて……」

「アンジュは元皇族。上に立つ者が皆を動かす指導者。」

誰かを救う為に何をするべきかをよく知っているからな」

リユガはアンジユを見ながらそう言い、それにアンジユは少々照れくさそうに顔を逸らす。

そう話す中でサラマンディーネは髪をおさえながら言う。

「アンジユ…：私はあなたのお友達になりたい、共に学び…：共に歩く友人に——」

「長いよね、サラマンデンデンって……」

「えっ?」

「『サラ子』って呼んでいいなら」

「……：アンジユ、ネーミングセンスないな」

「な、何よ!文句あるの!」

「もつと、良い名前で呼べよ。サラマンディーネだから、サラとか……」

「ありがとうございます。素敵な名前で読んでくださって」

サラはリユガに近づいて抱きしめる。

リユガの顔はトマトの様に赤くなり、頭から煙が出ている。

(二人の子供が見れる日は近いかもな……)

ゼランディアはフツと笑っていた。

## 夜空の下に流れる涙

迫りくる時空とトリアングルムを追い払ったその日の翌日。

風呂に入っているアンジュはサラにミスルギ皇国に侵攻の話聞いて、アンジュはそれに問う。

「私に戦線に加われつとでも言うつもり？」

「まさか、貴女は自由ですよ？この世界に暮らす事もあちらの地球に戻る事も……。」

我々と共に戦っても貰えるとなればそれ程心強い物はありませんが。

明日の出撃の前に貴女の考えを聞いて置きたくて……。」

「私の……？」

アンジュはそれに頭を傾げ、それにサラは頷く。

「あなたとリュガは、民を救っていただいた恩があります。出来る事なら何でもお手伝いしますわ」

アンジュはそれを聞いて少しばかり考えた。



「そっか……。アンジュもその話しをしていたんだね」

「そっちも？」

「ああ、俺とタスクはシュレインガーとゼランディアからアウラの事を聞いた」

「アウラを取り戻せばエンブリヲとカノープスの世界に大打撃を与えられるのは間違いないからね」

「本当に、それでいいのかしら……」

アンジュのその言葉にリュガとタスクは振り向く。

「信じられないのよ……」

「サラの言葉にか？」

「何もかもが……」

アンジュは空を見上げながら……これまで起きたことを思い出す

「ドラゴンが人類世界に侵攻してくる敵だつて言うのも嘘。

ノーマの戦いが世界の平和を守るつても嘘。

あれもこれも嘘ばっかり……もうウンザリなの」

ジルは最初にそう言ってたが……全くの嘘だった。

父親、仲間の天才たちから本当の事を知り、同族殺しをしたのだ。



けど、過去をやり直すことはできない。

「誰も分らないよ。何が正しいかなんて…」

大切な事は、今までの過去ではなく、これからの未来を考えよう。

失敗してもやり直せるからよ。どんなに、時間がかかっても…」

タスクが突如その事を言い出し、それにアンジュとリュガは振り向く。

「大切なのは、何が正しいかじゃなくて、君がどうしたいか…じゃないかな?」

笑顔で言うタスクにアンジュは心をゆきぶられ、聞いていたリュガは笑っていた

「君は自分を信じて進めば良い、前にも言ったけど…俺が全力で支えるから!」

「くくくく、タスク。こんな太陽が昇っているうちに告白か?」

「えっ!?!」

リュガのからかいにタスクは思わず振り向きながら驚く。

アンジュは少し頬を赤くして髪をいじくる。

「バカね…:そんな自分勝手な理屈が通じる訳ないでしょう?」

「えっ?そう?」

タスクはそれに振り向き、アンジュは安心するかの様な雰囲気を見せる。

「でも救われるわ、そう言う能天気な所」

「フツ、お褒めに預かり。光栄で——」

良い雰囲気なのに……石にぶつかりタスクはアンジュの方へと倒れ——。

「うわああああああっ!？」

「えっ!?!きやああああああっ!!」

アンジュを巻き込んで倒れ込んで、そこに運悪くヴィヴィアンがやって来た。

「皆!皆!お母さんがお礼したいって!」

煙が晴れると、そこにはアンジュがタスクに上になって、頭に自分の股を当ててる風な感じだった。

ヴィヴィアンは頬を少し赤くして、可愛らしいポーズをとる。

「~~~~~!!この、A級発情期がああああああああっ!!」

——バコッ!!

アンジュの鉄拳がタスクを吹き飛ばし——場外へ飛んで行き、崖の下の川に落ちてしまった。

「……………あいつ、ラッキースケベの星のもとで生まれたのか?」



夜——。

川から無事救助されたタスクはあちこち包帯を巻いており、両手が使えない状態だ。アウラの民の女たちがタスクにお肉を食べさせえていた。

「はい、あ〜ん♪」

タスクが食べてくれた事にその女たちは喜んでいた。

「うわ〜！食べてくれた〜♪」

「男の人って可愛い〜！」

「えっ？そ…そう…」

「タスク、鼻の下を伸ばしているとアンジュに殴られるぞ」

肉をムシャムシャと喰いながらタスクに注意するリュガ

「あ、それは……」

「——— 楽しそうね」

タスクとリュガは運悪くアンジュがその場にやって来た事に固まる。

アンジュの右手に何やら見覚えのある形をしているバーベキューのお肉串を持っていて、

その先端のキノコを思いつきかぶりつく。

——— ガブツ!!

その光景を見てタスクは股をおさえ、流石のリュガも真っ青になり後ずさりする。

女たちは悲鳴をあげてその場から逃げて行く。

それにアンジュは鼻で笑い飛ばし、タスクのそばまで行つて隣に座る。お肉を差し出す。

「はい、あ〜ん」

「えっ?」

「何よ? いらないの?」

アンジュの行動にタスクは少々戸惑いを隠せない。

「えっ? …… な、何で?」

「手、使えないんでしょう? 少しやり過ぎたわ」

アンジュは頬を赤くして、申し訳ない表情をしながら謝る。

「このくらいどうつてことないさ。アンジュの騎士は不死身だからね」

「あの高さから落ちたのに両手ですむとか……体頑丈だな」

「そういうリュガも私を助ける時に車とか持ち上げてブン投げたじゃない」

「あの時は、自分がドラゴンだって知らなかったしさ……。そう、俺は……」

——バケモノ。

アンジュやタスクとは……全く違う。

あの時、吹っ切れたかと思つたけど、ダメなのかもしれない。

「悪い……一人で飯食ってくるわ」

リュガは無理な笑顔を作り、その場を逃げるように去る。



「……なにやってんだろうな、俺は……」

仰向けで星空を眺めるリュガ。

暗くなったのかと思いきやサラがやって来た。

「此処に居ましたか」

「サラか……」

サラはリュガの隣に座り、問いかける

「何を考えていたのですか？」

「俺は……人間なのかドラゴンなのか解らなくてね……」

半人半竜、中途半端な存在、混ざりモノ。

情けないなあ、この前はあんなだけ泣いて、神を倒すといった男がこんなだと……」

「生きている物は悩んで苦しんで、それを乗り越えて前に進むものですよ。」

リュガ、貴方は独りではありませんわ。

私もいます、ゼラもいます……。だから、頼つてもいいのですよ」

サラは頬を赤くして、リユガに言う。

リユガは上半身を起こして、サラと正面から向き合い抱きしめた  
ギユつと強く強く、離さまいと抱きしめる

「……リユガ？」

「ありがとう……。なんか凄い、嬉しい……」

サラは微笑んでリユガを抱きしめて背中を優しく撫でる。

その光景を見ている三つの影――。

「サラマンディーネ様も安泰ですね」

「ああ、リユガなら任せられるな」

カナメとゼランディアはうんうんと嬉しそうに頷くがナーガは、今にも飛び出しそうだがゼランディアが抑えている。

「離してください!!あの狼藉者を叩き斬って……!!」

「駄目だ。サラの将来の相手を斬るんじゃない。まったく……。気づかれんうちに帰るとするか」

ナーガを抑えたまま去るゼランディア、その後が続くカナメ。

夜空に輝く星々はリユガとサラを優しく見守っている。

## Ⅱ主人公&機体資料Ⅱ

名前 リュガ・黒鋼・ホクト

性別 男性

年齢 20

特徴 瞳の色：蒼、黒の短髪、細マッチョ

CV 藤原啓治

履歴

大学では機械工学を学んでおり上位に入るほどの成績が良い。

両親は共に5年前に行方不明。

四人の友人と楽しく、過ごしていたがマナが無くなり、ニツクのせいで”ノーマ”と告発される。

結果、親友に裏切られた怒り、悲しみ、憎悪によりニツクを殺害する。

アルゼナルへ收容され、ノーマであることと人を殺した殺人鬼として受け入れ、甘えも優しい心を捨て、敵性生物ドラゴンを殺すことを決意する。

しかし、どうしても情を捨てきれない部分があるらしい。

人間の父と母のドラゴンの間から生まれた半人半竜。  
ドラゴン化したヴィヴィアンの言葉を理解できるほどである。

### リュガの評価

- ・アンジユ（傲慢な印象だったが、なんだかんだで放つてはおけない）
- ・サリア（いろいろ教えてくれたのは感謝するが、予想外の事には弱い事を知る）
- ・ヒルダ（性格がきつそうだが、張合いがある）
- ・ヴィヴィアン（テンションが高いし、喧しい）
- ・エルシャ（いまいち性格がつかめん、見透かされている気がする）
- ・ロザリー（躰がなつてない犬みたいな感じだ）
- ・クリス（・・・影が薄い）

### リュガへ対する評価

- ・アンジユ（同郷だが、関係ない。説教が喧しい。・・・あの時の強い瞳は忘れない）
- ・サリア（粗暴が目立つが、戦闘能力は中々の者として見ている。助けたことに好意



を抱いている?)

- ・ヒルダ(ゾーラを助けてくれたことは感謝しているが、アンジュを庇う点がある)
- ・ヴィヴィアン(面白くて楽しい!!)
- ・エルシャ(乱暴だけど本当は優しい事に気が付いている。弟ができたみたい)
- ・ロザリー(太る、という言葉を使ったので許せない)
- ・クリス(目つきが怖い……)

●パラメイルについて

機体名プルート

型式番号AW—DRZ013 (XX)

全高8.8 m

頭頂高8.3 m

重量5.0 t

推力160 KN

リュガの父、エルドが開発した黒のパラメイル、装甲色は黒、関節や目の部分は真紅。高出力、高性能だが、操縦に難があり事実リュガしか扱えない。

デストロイヤー形態では後頭部に角があり、姿は悪魔もしくは闇黒騎士のような風貌

をしている（モデルは俺タワーの”Hリデモリションマシン”でアーム部分がない状態と想像してほしい）。

武装は工具や重機など戦闘用に改造したもので、右腕は近距離・格闘（パイルバンカー、チェンソーなど）、左腕は遠距離・射撃（ダイヤモンドカッター、クローラークレールなど）になる。

最初の出撃の際に無人操縦で助けた理由は——リユガの母ミリルの魂が宿っているからである。

もうひとつの地球にて強化されて、完全な姿へとなる。

## Ⅱ 武装Ⅱ

パイルバンカー（巨大な金属製の杭を高速射出し、敵の装甲を撃ち抜く）

チェンソー（対象物を切り裂く武器。最も使われていることが多い）

破砕機（固い装甲を破砕・粉砕する武器。ドラゴンの心臓を穿つに使った）

油圧カッター（巨大ハサミ。ドラゴンの皮膚などを切断するほどの切れ味）

ダイヤモンドカッター（近接武器にも使えるが、射出し遠くの敵を切り裂く）

クローラークレール（捕縛して、叩き付けたら、自分の方に引き寄せて近接戦闘に持ち込む）

ウエルダー（炎や放電によって、金属の接合部を溶かしたり、継ぎ合わせるために使われる溶接工具。超近距離では絶大な威力を持つ）

|| 完全形態の武装 ||

フレアウイング（翼から炎が噴き出す。熱風を起こしたり敵に叩く）

オメガブラスト（口と思われる部分が開き、渦巻く青白い光線を放つ。ヴィルキスや焔龍號の時空収束砲と同じ威力）

## 敵対する仲間

アウラの民がアウラを奪還するべく総力を持って進攻する為、戦力を集結させていた。

その様子に外に居たアンジユ、タスク、リュガ。

その中でヴィヴィアンは感心していた。

「うお〜！ドラゴンのフルコース〜！」

「凄いわね……………」

皆が思い思いでこの光景を言う。

「でも、残念ね〜。こんないい男がもう帰っちゃうなんて」

其処に現れたのはドラゴン側の医者ドクター・ゲッコ。

どうもタスクの事を色々と調べていたり、ヴィヴィアンのドラゴン化を完全に治してくれた人だ

「まあ…………俺の親友であるシュージなら調べてもいいが」

「本当に!?約束よ〜」

ゲッコはリュガの手を掴んで握手する。

タスクとアンジユは乾いた笑いをしていた。

ドラゴン達が集結して、大巫女が皆の前に現れるが大巫女の姿を見て唾然とする。

「あれが大巫女……?」

「サラとゼランディアが言うにはアウラ・ミドガルディアという名前だそうだ」

幼き大巫女——アウラ・ミドガルディアは民達に宣言をする。

「誇り高きアウラの民よ、原初のドラゴン、母なる竜アウラと言う光を奪われ幾星霜……ついに反撃の時が来た。」

今こそエンブリヲとカノープスに我らの怒りとその力を知らしめる。

我らアウラの子！例え地に落ちててもこの翼は折れず!!」

その言葉にドラゴン達は雄叫びをあげて、それにヴィヴィアンもつられるように興奮しながら吠えた。

宣言が終えて、サラは焰龍號、ゼランディアは黄龍號に乗り込み、告げる。

「総司令！近衛大将ゼランディア！我らの母なる竜——アウラを取り戻すぞ!!全軍出撃!!」

黄龍號と焰龍號が発進。

ナーガとカナメの蒼龍號と碧龍號が続き、ドラゴン達もその後を追いかけるように出撃した。

「俺たちも行くぞ!!」

リユガとアンジュたちも機体に乗込み、タスクとシュレディングー、ヴィヴィアンは空中バイクに乗る。

「特異点開放!!」

すると皆の目の前にシンギュラーが解放されて、皆は後に続く



シンギュラーを通り抜けると、青い空と青い海が広がっていた。

「(ここ)は……………」

「ここでクイズです! 此処は一体どこでしょうか!」

クンクン…正解は! あたし達の風、海、空でした!」

アンジュは自分の世界に戻って来た事に思わず嬉しさが出る。

「戻って来た…戻って来たのね」

一方サラは座標が違っている事にすぐに問う。

「到着予定座標より北東4万8000?!? どうなっているのですか、これは!」

「分かりません…! 確かに特異点はミスルギ上空に開く筈…!」

その時サラの機体のレーダーに警告熱反応が表示され、それにサラは前方を見る。すると目の前にミサイルが無数に飛んで来て、それにドラゴン達は光の盾を展開し防御する。

「何事!!」

煙が晴れた途端に無数のドラゴン達が海に落ちて行く。

ガレオン級が吠えた途端に緑色のビームがガレオン級の頭部を吹き飛ばして撃ち落とす。

それにサラは目を見開く。

「サラマンディーネ様!これは!?!」

「待ち伏せです……!」

サラが言った言葉にナーガとカナメは驚きを隠せない。

「待ち伏せ!?!」

「では!リザーディアからの情報は……!?!」

「今は敵の排除が最優先だ!!」

そう言ってサラ達は龍神器達をアサルトモードに変形させて、ドラゴン達に言う。

「全軍!!敵機を殲滅せよ!!」

サラとゼランディアが先頭に進み、その後にはナーガやカナメもあとに続く。

戦闘が始まるが、5つの黒い機体をみて驚愕する

「あれは……まさか……」

「黒いヴィルキス!?!」

「……あれはエンブリヲが所持しているラグナメールだ」

シュレディンガーがそう言う中、ドラゴン達が次々と落とされて行くのをヴィヴィア  
ンが見て、大声で叫ぶ。

「ああ!! やめろー！ー！ー!!」

「させるかああああああああ!!」

リュガはプルートを操縦し、人型へと変形して両手から淡い緋色のエネルギーシール  
ドが出現しドラゴン達を護る

「リュガ!?!」

「サラ、ゼランディア。一度退いて体勢を立て直せ!!」

「出来ません! エンブリヲからアウラを取り戻すまでは!」

「周りを見る!! この状態ではアウラを取り戻すのは不可能だ!!」

サラは言う通りに周りを見渡すと、戦況が混乱状態だ。

「それとも、大事な仲間を危険に晒す気か!?! 撤退してチャンスを作るんだ!!」

サラは目を開かせて、頭を冷やして操縦桿を握りしめて皆に言う。



「全軍、撤退する!! 戦線を維持しつつ特異点に撤退せよ!」

ドラゴン軍達は特異点に向かい撤退し始める。

「すまない……リユガ」

「謝るな。エンブリヲとカノープスはこの事を見抜かれていた。

生きていればアウヲを取り戻せる」

「ああ、それまで……生き延びてくれ!!」

最後にサラとゼランディアは特異点に入り、撤退は成功する。

アンジュはラグナメール・クレオパトラの方を見ると、クレオパトラがフライトモードになる。

「どうして、あんたが……」

ライダーのバイザーが透通って素顔が現れ、アンジュとリユガは驚愕する

「サ、サリア……!?!」

ラグナメール・レイジアにエルシャ、ラグナメール・テオドーラにクリスが乗っていた

「エルシャ、クリス……!?!」

「リユガ、アンジュ、どうしてあんたがドラゴンと一緒に戦って……」

「てめえら……エンブリヲの犬に成り下がったのか」

かつての仲間と敵対することになる最悪の展開。

サリアはエンブリヲの指示を聞き、少し驚く

「分かりました……エンブリヲ様。アンジュ、リユガ二人を拘束するわ。色々と聞きたいことがあるから」

サリアの一言に驚き、サリアはエルシャとクリスに言う。

「二人共、良いわね？」

「イエス、ナイトリーダー!!」

サリア、エルシャ、クリスはアンジュの方へと向かい襲う。

リユガは救出しようとしたが……ラグナメイル・ビクトリアとラグナメイル・エイレーネが立ち塞がる。

「あなた、こんなに弱かったんだ……強くなったのは私。エンブリオ様のおかげで!!」

サリアの猛攻に防戦一方となり弾き飛ばされ態勢を崩される。

「今よ!陣形、シャイニンググローストライアングル!!」

クレオパトラ、レイジア、テオドーラが三角形の陣でヴィルキスを囲みワイヤーで拘束する。

身動きが取れなく、アンジュは苦虫を噛み潰した表情になる

「させるか!!」

両手を變形し、ダイヤモンドカッターを連射出してワイヤーを切り裂きヴィルキスを解放する。

「リユガ……!!」

「悪いが、抵抗はするぜ。俺らを縛り付けようと思うなよ……!!」

だが、不利な状況は変わらない。

アンジユはあの時と同じように、跳躍しようとする。

「飛びなさい！ヴィルキス!!飛べええええええ!!」

ヴィルキスの色が青色に代わり、跳躍した。

「何処に行ったの……!?!」

サリアたちはアンジユたちを搜索する。



跳躍した場所はボロボロとなっていた基地だ

「あそこは……アルゼナル?」

完全に基地機能を失ったアルゼナルを見て眩き、それにアンジユはただアルゼナルを見て呆然とする。

夜、アルゼナルの付近に着陸したが、黒焦げの遺体が所々ある。

「酷い事をしやがる……」

「皆…何処に行つたの？まさか…」

「脱出して、無事で居るはずさ。ジルたちがそう簡単にやられる筈がない」

「ああ、パブロフ、ラプラス、カルネアデスも一緒だ」

「だと、良いが……」

ヴィヴィアンは何かに気付き、それにリュガ達を見る。

すると海の方に緑色の光の玉が浮いて、そこから三人の人影が現れる。

アンジュは恐怖のあまりに悲鳴をあげながらタスクに抱き付く。

「あ…あ…アンジュリーゼ…様？」

「ち、違う!!私は!!……え？」

アンジュは自分の本名を知っている事に反応する。

すると、その人物はマスクを外すとモモカだ。

「モモカ……？」

「アンジュリーゼ様ー!!」

モモカはアンジュに駆け寄って抱き付き、アンジュもモモカが現れた事に嬉しながら抱き付く。

ヴィヴィアンはその他の者達を見た時にマスクを外したヒルダとロザリーを見て驚

く。

「うわー！みんなだ！！」

「ヒルダ、ロザリーも無事だったのか」

「うわっ！！ドラゴン女!?!」

ロザリーはヴィヴィアンを見てビビって引いて、ヒルダは笑みを浮かべてアンジユに駆け寄る。

「本当に……………アンジユなの？」

「勿論よ、ヒルダ」

かつての仲間たちと合流し、あの後、何があったのか聞くこと……………。

## 決別の海 前編

## 決別の海 前編

無事アルゼナルの皆と合流したりユガ達。

アルゼナルの旗艦であるアウローラと共に海底へと進んでいた。

アウローラのブリッジに居るオリビエが提示報告をする。

「第一警戒ライン通過」

「まさか生きてたとは……」

ヒカルが別の部屋で話し合っているリユガ達の方を見ながら言い、それにはオリビエも同意しかねる。

「アンジュとリユガ、てつきりロストしたかと思つてました」

「今まで何処に行つてたんだ……？」

「それがシンギュラーの向こう……だつて」

パメラが言った言葉にヒカルとオリビエが思わず驚きを隠せない。

「うっそ〜!？」



「平衡宇宙と、もう一つの地球。ドラゴン…いや、遺伝子改造した人間の世界か…」

「ドラゴンの目的は、アウラの奪還。マナを得るためにノーマがドラゴンを狩る。」

「こんなバカげた戦いを終わらせることが出来るわ」

「だが……サラ達の侵攻作戦は失敗した。お互いの目的のためにも協力するべきだ」

アンジュとリュガはこれまでの情報を出す。

「敵の敵は味方、か」

ジャスミンが両腕を組んで納得している。

「冗談じゃね!!あいつらドラゴンは今まで仲間を食い殺したんだぞ!!」

ロザリーは反対で、その発言にヴィヴィアンは頬を膨らませてムツとする。

リュガはヴィヴィアンの頭をポンポンと撫でる

「確かにそうだが、俺たちの本当の敵はエンブリヲとカノープスだ。その策で俺たちは

踊らされたんだよ」

「奴らは信じるに値しない、神気取りのエンブリヲとカノープスを倒し、この世界を壊

す。

忘れた訳ではあるまい。兄妹、民衆に裏切られてきた過去。人間への怒りを。

差別と偏見にまみれたこの世界を壊す、それがお前の意志ではなかったのか？」

アンジュは言葉を詰まらせそうになったが、リュガが前に出る。

「あのドラゴンたちは良い奴らだよ。」

俺たちとドラゴン達と手を組めばエンブリヲとカノープスを倒せる。

それとも逃げ続けて、怯える気か？」

「貴様……!!」

「辞めるんだ二人共。リュガの言葉の一理あるぞ。現にわたし等の戦力が心持たないのも事実だ」

「サリア達が寝返っちまったからね」

「アンジュ、リュガ。お前さんたちはドラゴンとコンタクトとれるのかい？」

「ああ、できる。ヴィルキスとプルートの力を使えばな」

「それは凄い。ジル、ドラゴン達との共闘。考えてみる価値はあるんじゃないのかい」

ジャスマインの提案に聞いたヴィヴィアンは思わず嬉しがる。

しかし、ジルは黙ったまま返答せず、それにリュガ達は厳しい表情で見ている。

「……………ジル」

ジャスマインが再び問いかけ、それにジルはようやく口を開く。

「……………よかろう」



そう言ってジルは扉の方に向かう。

「情報の精査の後、こん後の作戦を通達する。以上だ」

そう言ってジルは出て行く。

「なんだか、冷たい感じだな」

「アンジュたちが戻って来た事に嬉しがっているのさ。そこはあたしが保障するよ」  
ジャスマインがそういうが、リュガはどうにもジルの事が気になる。



部屋にてラプラス、カルネアデス、シユレディングー、リュガ、アンジュ、タスクと集まる

「しかし、こんな戦艦を持っていたとはな……」

「私たちと古の民が作ったリベルタスの旗艦。この艦でエンブリヲとカノープスと戦って来たのよ」

「これがねえ……そういえば、親父は？」

「パブロフは単独でミスルギ皇国へ潜入したピョン。……三人はドラゴンの世界の真実を知ったのね」

「ああ……母さんの最期も……」

「それなら、私たちの話をしましょう。」

10年前……私たち6人の天才はカノープスの下で働いていたの。

エルドとミリルの目的を知った私たちは協力して彼らに対抗できる力を備えようとしたわ」

「そこで、眼につけたのが……エンブリヲが所持しているラグナメールが一つビルキス。ヴィルキスと名前を変えたのは反抗のための意味を込めてだ。」

ヘンペルことカシム・ゾル・グラムと多くの古の人々が払った犠牲で手に入れた物だ。後は、リュガ……ミスルギ皇国で私と会話していた通りだ」

「そういえば、貴方達の本名って……？」

天才たちの本名を聞き出すアンジュたち。

「ここまで、来たのなら隠す必要もないと天才たちは名を上げる

「私の本名はニコル・サンドラムだ」

「私の本名はリム・パルムスだピョン」

「私はカリーナ・ゾル・グラムよ」

シユレディンガー、カルネアデス、ラプラスは自分たちの本名を名乗る

「えっ？ヘンペルと同じ苗字？」

「ヘンペルは私の兄なのよ。カノープスが兄さんを殺したとエンブリヲから聞いたわ」  
天才たちから聞かされた経緯を知るリュガたち。

「そして、ヴィルキスの前の操縦者はジル、いえ本名はアレクトラ・マリア・フォン・レーベンヘルツだピョン」

その名前を聞いてアンジュは驚く

「確かガリア帝国の第一皇女の。病死したって聞いてたけど」

「病死した事にされているのよ。マナを持つ者たちにとつてのやり口ね。」

最初のリベルタスの時、タスクくんのご両親も仲間たちを失って、ジルも右腕を失ったわ……。

私たちは、それぞれ単独でエンブリヲとカノープスを倒す時を待っていたわ。

それが……リュガ、貴方なのよ」

ラプラスは真つ直ぐな目でリュガを見る

「……一番、悔やんでいたのは。パブロフだ。」

息子を世界を破壊する道具として仕立て上げた事を。

彼は妻を失い……子供までも手にかけていたことに今でも悔やんでいる」

そうだ。

親としての立場を考えれば……子供に世界の運命をかけた戦いに投じるような真似

はしたくない。

今度、父と再会したその時、謝って和解しよう。

## 決別の海 後編

||アウローラ 食堂||

「美味〜い！シユージの料理が懐かしい〜！」

「よく食べるねヴィヴィアン」

「やっぱ、元がドラゴンだからか？」

食い意地の強いヴィヴィアンの様子に呆れかえるしかなかった。

マギーがヴィヴィアンの身体をあちこち触りまくり、それに撥られてしまう。

「本当にキャンディーなしでもドラゴン化しなくなったのかい？」

「そう…らしい！」

「大した科学力だね〜」

マギーはサラ達の世界の科学力に感心する。

「向こうの皆は羽と尻尾があっただけ、アタシなんでないの？」

「あー……ばれるから切ったよ」

「うわっ!!ひでえ!!」

ヴィヴィアンの様子に向かいに座っているココとミランダ。

隣の席に座っている若者三人は苦笑いしながら見ていた。

それに……

「全く、あの時の二人がここまで強くなるとはね」

そう、元隊長のゾーラだ。

脱出した後にマギー、テンゲン、ラプラスが治療続けて遂に意識が戻ったのだ。

日常生活に支障はないがパラメイルに乗っての戦闘は無理のようだ。

「ま、色々と合ったんでな。ゾーラが寝ている間にな」

「ははは、生意気言うようになったか」

なんだかゾーラは嬉しそうな感じだ

「全く、心配させやがって。戦場からロストして、帰ってきたら、この男とはイチャイ

チャするわ」

「ごめんねヒルダ、悪かったわ」

アンジュが謝るとヒルダは少しばかり頬を赤くし明後日の方を向く。

「どうしたんだ、ヒルダ？」

「何でもないよロザリー。全く、お前等が居ない間大変だったからな」

「その事だが、俺達が居ない間何があった？」

リュガがその事を問い、ロザリーが少しばかり暗い表情で言う。

「お前たちが消えた後、アタシ等はとても苦戦した事ばかりなんだよ。」

アルゼナルは壊滅するわ、仲間が大勢殺されるわ、クリス達が敵になるわ……」

「サリア、エルシヤ、クリス……。あの三人がどうして」

「こつちが知りてえよ！容赦なくドカドカ撃つて来やがって！あんなのもう友達でも何でもねえよ！」

ロザリーが机をたたく。

いつも、クリスと一緒にいたからそんな気分なんだろう。

「そういえば、この船を護っていたのって……貴方達なの？」

「こいつ等が頑張ってくれたからな」

ロザリーは指を指して、三人の若い少女たちの方を向かせる。

「ノンナ、マリカ、メアリー。戦力不足でライダーに格上げされた新米たちさ」

「私達の後輩です！」

「足手纏いにならないよう頑張ってます」

ココとミランダが強い意志を見せる。

リュガはあの時と違って、強くなっているのを確信していた。

「ゾーラ姉さまが、まだ動けないから私がみっちり扱いたお蔭で何とか——」

メアリー達が一斉にヴィヴィアンの方に向かって行き、それにはロザリーも流石に突然過ぎて戸惑った。

「あの！お会いできて光栄です！」

「んっ？えっ？アタシ??？」

ヴィヴィアンは自分の事を言われて、何が何やら分からなかった。

「第一中隊のエース、ヴィヴィアンお姉様ですよね！」

「ずっと憧れていました！」

「大ファンです！」

「そっかそっか♪ よし喰え喰え〜！」

ヴィヴィアンは自分の食器の具をメアリー達にも分け、その様子にロザリーはやや悔しがる。

「ちよ、ちよつとあんた等!!アタシにはそんな事一言も!？」

「……………どんまい」

シュージはポンポンとロザリーの肩を叩く

「慰めんなよ!!?!私がみじめじゃないかー!!」

アンジュが何やら考えているタスクの方を見る。

「どうしたの?」



「いや、アレクトラ…じゃなかった。ジルの様子が気になってね」

「アレクトラ・マリア・フォン・レーベンヘルツ…だっけ」

「何故、知っているんだ？」

「皆知ってるよ、司令が全部ぶちまけたからね。自分の正体も…リベルタスの大義の事も」

ヒルダはジルが自ら正体を証し、リベルタスの全て。

自分達の最大の敵であるエンブリヲとカノープスを倒す事を宣言した事を話した

「アレクトラが…そんな事を」

「意気込みは分かるけど。ガチ過ぎてちよつと引くわ…」

「貴方にあの人の何が分かるの〜！」

別に人物の声が聞こえた事にリユガ達はその声が出た方を見る。

厨房から完全に酔っ払ったエマが出て来る、ワインをラツパ飲みしながら。

「か、監察官!？」

「ぶはっ! えまさんで良いわよ〜? エマさんで〜♪」

「ぐっ?! 酒の匂い!？」

「この艦に乗られてからずっとこうなのですよ」

「ずっと…?!？」

モモカの言った事にリュガは驚きを隠せない。

「しようがないでしょう！殺されかけたのよ！！人間に…同じ人間に！！」

あの時、アルゼナルで保護を求めようとしたのに殺されかけたのをマギーが助けてく  
れて、それ以来エマは酒浸りになってしまっていたのだ。

それを司令であるジルが保護し、エマが信じられる人はジルただ一人だけらしい。

「あの人だけよ〜！この世界で信じられるのは！　そうよね〜！ペロリーナ〜！！」

エマはペロリーナのぬいぐるみを抱きながら泣き崩れ、それにマギーが止める。

「はいはい、もうその辺にしときな……」

「酒を取り上げんと、肝臓がやられるな」

テンゲンがやれやれと言う。

「でも、監察官の言う通りだ。アタシ等にとつちや、信じられるのは司令だけだからな、  
この世界で……」

ロザリーはそう言う。

だが、アンジュとリュガはこのままジルを信用していいのか……決められなかった。



Ⅱアウローラ 司令室Ⅱ

一人となったジルはタバコを吸っていたが、あの忌々しい光景がよみがえる。

”右半分の道化師の仮面をつけた男が、引き千切った片腕を持っている”

”——逆らう気も起こさぬほど、もつと苦しませてやる”

吸っていた煙草を握りしめて潰し、恐ろしい表情をする。

「エンブリヲ……カノープス……!!」



翌日、リュガ、アンジュ、タスクと共にアウローラでジル達と作戦会議を開いていた。

「よく眠れたか？」

「まあな……」

「それは結構、ではお前たちに任務を与える。ドラゴンと接触、交渉して同戦線の構築を要請しろ」

それにアンジュとタスクは驚きの表示を隠せなかった。

だが、リュガは訝しんでいた

「どうした？お前の提案通り、一緒に戦うと言っているんだ」

「……………本気か？」

「リベルタスに終止符を打つには、ドラゴンとの共闘。それがもつとも合理的で効率的だと判断した」

それには流石のジャスミン達も驚きを隠せずだった。

ジルの話しを聞いたタスクは笑みを浮かべながらアンジュの方を向く。

「アンジュ……！」

「うんー！」

アケノミハシラにエンブリヲが居ることが判明し、そこにドラゴン達と共にミスルギ皇国に進行すると言う作戦。

ドラゴン達は前方から攻めて、薄くなった後ろから攻撃するという。

最もアンジュ達の目的はアウラを開放する目的が一緒な為、これが効率の良い作戦だと感じたアンジュとタスク。しかしレオンは……。

「これだと、ドラゴン達が大きな負担になるぞ。それに……サリアたちは？」

その事にジルは思わず鼻で笑う。

「持ち主を裏切る様な道具はいらん」

「道具って……！だってサリアよ!？」

アンジュは反論する。

アルゼナル時代、一応は世話になった仲間だ。

サリアだけではなく、エルシャとクリスも葬る。

「全てはリベルタスの為の道具に過ぎん。ドラゴンも、アンジュも、リュガも、私も」

「テメエ……ドラゴンを捨て駒にするのか!!こんな作戦、協力できるか!!」

「なら、協力させるようにしてやる」

映像に映し出されたのは、モモカ、シユージ、テンゲン、ゼノンが囚われていた。

「減圧室のハッチを開けば侍女と友達は一瞬で水圧に押しつぶされる」

「ジル!!アンタの仕業かい!!」

「聞いてないよ、こんなこと!!」

ジャスミンとマギーもジルの所業に異論を唱える

「どうやら、ジルの独断で行動したようだ。」

「アンジュ、リュガ。お前たち二人は命令違反の常習犯だ。予防策を取らせてもらった」

「アレクトラ……!」

タスクは以前とは全く違うジルの行動にただ戸惑いを隠せない。

「救いたければ作戦を全て受け入れ！行動しろ!」

「てめえ…自分が何をしているのか分かってるのか!?」

リュガはジルを睨みながら問い、それに笑いながらジルは言い続ける。

「リベルタスの前では全てが駒であり道具だ。

あの侍女はアンジュを動かす為の道具、アンジュはヴィルキスを動かす道具。

そして……ヴィルキスはエンブリヲを殺す究極の武器!!」

アンジュが銃を取り出してジルに向ける。

「ふざけるな!!モモカを解放しなさい!!今すぐ!!」

次の瞬間、ジルに銃を奪われて、アンジュはジルに腕を捕まれ引き寄せられる。

「てめえ!!」

リュガはジルを殴りにかかるが、蹴飛ばされて壁に激突した。

「リュガ!!」

「タスク、お前はヴィルキスの騎士。お前はヴィルキスを護れば良いのだ!」

「アレクトラ…!!」

もう完全に昔のジルではないと感じたタスクはジルを睨むしかなかった。

「さあ、お前の答えを聞こうかアンジュ」

「く…くたばれ!」

アンジュはジルに向かって唾をかけ、唾を掛けられたジルはアンジュを睨む。

「どうやら少しお仕置が必要だな……」

ジルがアンジュに拳を上げた途端――。

「があああああああつ!!」

リュガはジルの脚に噛みつく。

痛さにアンジュを離し、転ぶジル。

片方の足でリュガの腹を蹴飛ばし、銃を構える。

「貴様……!?!」

ジルたちの身体が急に動かなくなり、ジャスミン達は徐々に意識が失っていった。

何とか意識を保っているジルは換気口を見て、換気口から何かガスが出ているのに気が

が付く。

「ガスか……!」

「ああ……昨晩、シユレディングーたちと話して万が一の為に仕掛けておいたんだ」

タスクはアンジュとリュガにガスマスクを渡し、すぐにつける

「タスク! 貴様もか……!!」

「アレクトラ、もうあんたは俺の知っているアレクトラじゃない!」

「貴様、ヴィルキスの騎士が! リベルタスの邪魔をするのか!!」

その事にタスクは真っ直ぐな目線でジルを見ながら言う。

「俺はヴィルクスの騎士じゃない!! アンジユの騎士だ!!」

それにアンジユは思わずタスクを見て、リユガはフツと笑う

三人は急いで部屋から出る

「惚れ付いたか…ガキが!」



モモカたちを助け出した同時にリユガ達はヴィヴィアンと天才たちと合流した。

「つたく、いきなりヒデエメにあったぜ」

「だが、お前らが無事でよかったよ」

三人の友人が無事でホツとするリユガ。

「リユガ、一つ聞きたいことがあるがいいか? ……まだ、俺たちに隠し事をしているだろうか?」

テンゲンの言葉に驚き戸惑うリユガ。

だが…リユガは真実を話した。

自分と母がドラゴンであること、自分が乗っているパラメイルには母の魂が宿っていること。



「……これが全てだ。俺はもう……普通じゃないんだ」

軽蔑されたって構わなかった。

だが、シュージはリュガの肩を掴む――。

「バカだな!!」

お前がノーマだろうがドラゴンだろうが、リュガはリュガだろ!?

――俺たちの親友だろ」

「何年、お前と付き合っているんだ馬鹿者。昔から抱え込むのは治っていないようだな」  
「リュガ、僕たちはそれで君の事を嫌いにならないよ……いっぱい迷惑かけてもいいからさ」

「……ありがとう」

三人の友情の絆にリュガは感謝していた。

格納庫へとたどり着き、パラメイルに乗ろうとするが――。

「逃げ出す気か! アンジユ!」

皆が前を見ると、ジルの姿がいた。

しかも、ジルの足にナイフを刺した後があり流血していた。

強引に催眠から覚めるために刺したのだろう。

それほど、リベルタスを成功させたいという執念だからこそだ。

「うげ、足にナイフを刺すとか無茶苦茶だろ……」

「逃がさんぞ…アンジュ！ リベルタスを成功するまではな！」

「私の意思を無視して戦いを強要するって…人間達がノーマにさせている事と一緒にじゃない!!」

アンジュが相手にしようとするがリユガが止めに入る。

「……俺が相手をする」

リユガはファイティングポーズをとる。

「お前が勝つたら、俺を煮るなり焼くなり好きにしてもいい。皆は下がっててくれ」

ジルはナイフを構えてリユガを斬りにかかるが、避けて蹴りを放つ。

互いの攻防が続くが、ジルはリユガに強く言う。

「お前は人間を殺したんだ!!そんなお前だからこそ、リベルタスを成功させるために必要なんだ!!」

「テメエの言いたいことは解った……だがな!!」

リユガはジルの腕を掴んで投げ飛ばすが、ジルは両手をつけて一回転して着地する

リユガの両目が金色になり、吼える。

「それでも俺もアンジュも復讐の道具にならねえよ!!アレクトラ・マリア・フォン・レーベンヘルツ!!」

「つ!! 黙れええええええええええ!!」

鋼の義手で殴りにかかるが、リユガは掴み、頭突きをブチかます

強烈な一撃で意識が朦朧としかけているジルだが両膝について倒れた。

「……母さんの故郷の皆に危険な真似はさせたくないんでね」

だが、ジルは立ち上がろうとするが――

「もうやめな! ジル!」

突然の声にリユガ達は振り向くと、マギーに支えられやって来るジャスマミンが居た。

「解つただろ。あんたのやり方じゃあ……無理だったんだよ」

聞いたジルは歯を噛みしめながら悔しがり、そのまま意識が途切れてしまう。

海面に出たアウローラ、格納庫ハッチが開く。

「リユガ、俺たちはここに残って帰って帰つよ。待つ奴がいれば気が楽だろ?」

「……解つた。シユレディンガーさん、ラプラスさん、カルネアデスさん。俺の友人をお

願います」

三人の天才たちは頷く。

「これからどうするんだい?」

「もう決まっている。俺達がリベルタスをやる」

「あの人のやり方は間違つてはいたけど、やっぱりノーマの解放は必要だもの……。私達

がやるわ、リベルタス」

「ああ、俺達を信じてくれる人たちと……俺達が信じる人たちと一緒にね」

リユガ、アンジュ、タスクがそう言つてジャスミンは笑みを浮かばせる。

ヴィヴィアンも連れて空へと飛び立ちサラたちの世界へ飛ばうとするが――。

カノープスの剣であるトリアングルムとサラア達のクレオパトラ、レイジア、テオドローラが向かつて来た。

「そこに居たのね……アンジュ」

クレオパトラに乗っているサリアはアンジュを見てそう呟くのだった。

## 調停者と監察者 前編

ラグナメール達はアウローラへ襲撃し、攻撃を仕掛ける  
水柱が幾度も上がり、船内が大きく揺れだす。

「皆、しつかりしな、敵襲だよ!!」

ジャスマンはアウローラの舵を取りつつ敵の攻撃を回避する

「やめなさい!!」

アンジュはヴィルキスを操縦して、ラグナメールと交戦する。

「アンジュ機とリユガ機、敵。パラメールと交戦中!!」

「誰のせいでこんなことになったのか……わかってんのかねえ。まったく」

スピカは無数の氷結弾が放たれ、タスクは急いで回避するが――。

掠めて、バランスを崩しモモカが振り落とされる。

「きゃあああああああああ!!」

「しまった!!モモカさん!!」

「マナ!!マナの光!!マナの光よ!!」

慌ててマナの光をスカートに集中させて、パラシュート替わりにして落下を減速させ

る。

タスクは急いでモモカを無事、救出する。

デネボラは鎗を振りかざし、リユガは防戦一方だ

「くそっ!!反撃ができない!!」

「飛んでけー!ブンブン丸!!」

ブーメランプレードはそのまま、デネボラに直撃する。

その隙にパイルバンカーにチェンジしてデネボラを撃つ。

アンジュに攻撃を仕掛けていたエルシャがヴィヴィアンの方を見る。

「駄目でしょ……ヴィヴィちゃん」

エルシャはヴィヴィアンに向けてビームライフルを放ち、それをまともに貰ってし

まった。

「うわっ!!」

「ヴィヴィアン!!」

リユガはヴィヴィアンの救出に向かおうとするがアルクトウルスは4枚のモノリスを飛ばしてプルートを囲み光の網でプルートを捕獲する

「い、い、いっ!!」

「リユガ!?!」

クレオパトラ、レイジア、テオドーラの三機がアンカーを発射し、ヴィルキスの両腕と首に巻き付いて動きを封じる。

それにアンジュは強引に動かそうとするもビクともしなかった。

「くっ……剥がれない!!」

サリアがヴィルキスのコックピットカバーを強引に剥がし、アンジュは前を見るとサリアが出て来て銃を構えた。

「さようなら、アンジュ」

——パーン。

アンジュに胸に一発の銃弾が撃ち込まれ、アンジュは倒れてしまい海へと落ちて行く。

(な……なんて様なの……。 よりにもよってサリアにやられるなんて……)

そう思いつつアンジュは意識を失う。



「……様………リーゼ様! アンジュリーゼ様!」

「っ!!」

呼ばれた事に驚いたアンジュは思わず飛び起きる。

周りを見るとかつて自分が過ごしていた豪華な部屋であった。

アンジュは呼ばれた方を見るとモモカが居た。

「モモカ……？」

「良かった！アンジュリーゼ様！無事でなりよりです！」

「どうして……？それにここは……」

「はい……ここは『ミスルギ皇国』です！」

モモカが言った言葉にアンジュはベットから下りて窓を見る。

目の前にアケノミハシラがあり、モモカの言う通りアンジュとモモカが居るのはミスルギ皇国であった。

（でも、どうして……？）

考えつつアンジュは着替えようとしたら、モモカが着替えをやり始める。

あの時の筆頭侍女としての立場へと戻っていて、仕方なくモモカに頼むしかなかった。

着替えを終えたアンジュはすぐさま武器になる物を探す。

「アンジュリーゼ様？」

「本当ならライフルや手榴弾があればいいんだけどね」



「無駄よ」

声が出た方を振り返ると、扉に軍服の様な制服を身にまとったサリア達が居た。

「あなたは大事な捕虜なのよ。勝手な事しないで」

「元氣そうねサリア。一体何があったの？あんなに司令好きのあなたが……」

「別に、目が覚めたのよ。エンブリヲ様のお蔭でね」

話によると、サリアはアンジュに落とされた後、エンブリヲに助けられ自ら迎えてくれた事に感謝をしていた。

自分を全く必要としないジルからエンブリヲへと鞍替えした。

愛するジルからエンブリヲへと……。

サリアは頬を少し赤くしながら、エンブリヲから貰った指輪を見る。

「そして私はエンブリヲ様の直属の親衛隊『ダイヤモンドローズ騎士団』、騎士団長のサリアよ」

「要するにあなたはあのナルシスト男に惚れたって行く事ね。リュガは何処にいるの？」

「彼なら——」。



リュガが目覚めると、何処かの祭壇の様な部屋だ。

手足を動かそうとするが、鎖に繋がれていて身動きができない。

「お目覚めのようですね」

足音が響き、徐々にその姿が明らかとなる。

「始めまして、私の名前はカノープスと申します。

天才どもから聞いていますよね？リュガ・黒鋼・ホクト」

「その名前は捨てた、俺はリュガだ」

「ああ……失礼。君はノーマでありハーフトラゴンでもあったね」

「てめえ……人を怒らせるのが趣味か？」

人の過去をつつくような態度にリュガはイラつく口調になる

「おっと。そう言っても君は動けないじゃないか？アンジュという娘もね」

「アンジュはサリアに……!!」

「心配しなくても彼女は無事だよ。麻酔で眠らせてミスルギ皇国に運ばせたんだよ」

「なに？ここはミスルギ皇国なのか？」

「王宮の地下だよ。」

最も亡き国王もジュリオのガキも知らない地下祭壇だけだね。

「私がここで監視をしているんだ」

カノープスの背後に、幾つものウィンドウが開かれて、この世界の景色が映る。  
「この世界を監視している者としてね」

## 調停者と監察者 後編

その頃。タスクとヴィヴィアンは敵の攻撃からなんとか逃れてアウローラと合流した。

アンジュ、リュガ、モモカが敵につかまってしまおうという事態となった。

これで、最後の希望が潰されてしまったようなものだ。

しかし、三人の天才たちはみんなを集めてジルに問いただしていた。

「あの作戦でどこがおかしいと思ったのよ。あれではヴィルキスを敵に渡すようなものじゃないかって」

ラプラスがそう答えるとジャスミンとマギーもあの作戦の違和感に気付いた。

そして、カルネアデスが答える。

「……もしかするけど、エンブリヲに操られているんじゃないかと?」

「!!!」

『!!!なっ?!?』

カルネアデスの一言に皆は驚き、ジルは驚く表情をし戸惑いを隠せない。

目を泳がせながら大量の汗が湧き出て来る。

「ほ、本当かい!!アレクトラ!?!」

ジャスマミンがそれに問うも、ジルは顔を逸らして戸惑いながらも黙り込む。「何で黙ってるんだい……!答えるよアレクトラ!!」

マギーが怒鳴りながら、ジルの胸倉をつかみ、振り向かせ言い聞かせる。

「それは……………」

シュレディンガーはマギーを抑え、説明する

「最初のリベルタスの時にエンブリヲに何かされたのだろ。アレクトラでも違和感を感じさせない様に」

「……ああ、そうだ、私は操られた……エンブリヲの人形だった……」

ジルの言葉にジャスマミン達は驚き、その場にいたメイも驚く。

「何故、あの男の人形にされていたの?」

「……私はあの時、リベルタスを行い……エンブリヲを殺そうとした。

だが奴に身も心も憎しみ……全てを奪われた。誇りも使命も純潔も……。

ああ……怖かったよ。リベルタスの大義……ノーマ解放の使命……仲間との絆。

それが全部……奴への愛情、理想、快楽へと塗り替えられていった。

何もかもあいつに踊らされていると感じたんだ……………」

マギーは腕を組んだまま問う。

「何で黙ってたんだ……」

「どう話せばよかったのだ？」

エンブリヲを殺しに行ったが、逆に奴に惚れましたとでも言えるのか？

全て私のせいさ……リベルタスの失敗も仲間の死も全部……、

こんな汚れた女を救う為に皆死んでしまった……!!」

「そ、んな………そんな!!」

メイにとっては残酷な事実を知って、姉の死がジルに当たる事に困惑していた。

「私に出来る償いはただ一つ、エンブリヲとカノープスを殺す事だ。今頃、奴は新しい玩具で遊んでいるだろうな」

「新しい玩具……？」

「………アンジュとリュガの事ね」

「奴はアンジュを徹底的に落とすつもりだ……。道具として、自分の快樂の為にな。

リュガもまた、自分を護るための番犬として人格を破壊するだろう」

ジルの言葉を聞いて皆は絶句する、シユレディンガーは口を開き——。

「それでアンジュとリュガを道具として使おうとした所を逆に奪われた………と言う事か」

「ああ、利用するつもりだった。勿論此処の皆もそうだった」

それを聞いたジャスミンとマギーは驚く、自分達を使い捨ての道具にしようとしたジルの言葉を聞いて。

「だが、それをいとも簡単に潰された…、リユガによってな——」

——パンツ!!

ジルの頬にマギーの平手打ちが放たれ、それにジルはただ黙ったままマギーを見る。

「私はあんただから一緒に来たんだ、あんたがダチだからずっと付いて来たんだ。」

………それを利用していただなんてき!!何とか言えよ!アレクトラ!!」

「そのくらいにしときな、マギー……」

「………ぐツ!」

マギーはその場を離れ、ジャスミンはジルと面と向かい合う。

「知っちゃまった以上、あんたをボスにはして置けない。指揮権を剥奪する…いいね?」

「………ああ」

ジルはジャスミンによってアウローラの指揮権及びノーマ達リーダーの座を失った。

それも大きな傷跡を残して。

しかし、ラプラスは気掛かりな点があった——。

(けど……カシム兄さんの死は?彼は何か引つかかると言って、あの時、残って……)



一方、サリアたちはアンジュとモモカをエンブリヲの所へと案内していたが、既に消えており逃げられてしまった。

「ど、何処に行った!?!」

「アンジュは元々この屋敷の人間!どこに逃げるかも知っている!!」

サリアたちは慌てて探す、壁の一部にわずかな隙間が開いており、そこにアンジュとモモカが居た。

「よく知ってるじゃない。私の家をなめないでね」

そう言ってアンジュとモモカは庭に通じるダクトを通る。

庭へと出たアンジュとモモカはエンブリヲを探そうとした所に……………。

「ああ〜!アンジュお姉様だ!」

アンジュはアルゼナルに居た幼年部の子供たちに見つかってしまい、一緒に居たエルシャにも見つかった。

「あらあら、アンジュちゃんを追い詰めるなんて。みんなやるわね」

「エルシャ……………」

アンジュはエルシャを見ながら眩き、エルシャから事情を聞き出した。



今の彼女は『エンブリヲ幼稚園』と言う園長を務め、そこで子供たちの世話をして  
いた。

信じられない事に幼年部の子供たちは一度死んだと事を聞かされて、アンジュとモモ  
カは驚いた。

「し、死んだって……!」

「そんな事、マナの光でも不可能です!」

「エンブリヲさんがね、あの子たちを蘇らせてくれたのよ。」

エンブリヲさんがあの子たちの幸せな世界を作るんだって。

私はその為なら何だってやるわ、ドラゴンもアンジュちゃん、リュガ君達を殺す事も  
ね」

「エルシャ……」

エルシャの相当な覚悟を聞いたアンジュは思わず息を飲む、モモカに行こうとした所  
……クリスが立っていた。

「クリス、どうして裏切ったの? ヒルダ達が怒ってたわよ」

「怒る? 怒ってるのはこっちよ……! 見捨てて置いて!」

意味が分からない事にアンジュは頭を傾げる。

クリスからの話だと、彼女はアルゼナルに攻撃して来た特殊部隊達を撃退。

パラメイルで出撃した時に生き残っていた部隊の一人に攻撃を食らい、シャフトにぶつかってしまふ。

ロザリーから助けに行くと言った際にクリスが乗るパラメイルが爆発し床が崩れる。その時に助けたのがエンブリヲだと言う。

——アンジュは分かった、クリスは思い違いをしている事に……………。

クリスに案内されたのはある私室、アンジュは更に警戒を強める。

エンブリヲはアンジュの方を見ると、笑みを浮かばせて立ち上がる。

「やあ、よく来たねアンジュ。待っていたよ」

「エンブリヲ……………！」

「そう怖い顔をしないでくれ」

「揃ったみたいだね」

カノープス、後ろにはリュガがいたが、両手は拘束されていた。

「……………お互い、無事のようなだな」

「……………みたいね」

どうにか再会を喜ぶが、リュガは二人を睨み口を開く。

「お前らは一体何が目的なんだ？」

「その前に、我々が今していることを話そう」

「旧世界の人間は野蛮で好戦的だね。まるで獣だった…。」

そして、この世界を作ったが今度は墮落したのだ。

与えられることに慣れ、自ら考えることを放棄したんだ。

アンジュ、君も見ただろ？誰かに命じられれば簡単に差別する、彼らの本性を……」

ノーマだと知れば差別し殺すというあの人間たちの本性を。

かつてアンジュも……そうだった。

「だけど……どうしても、”バグ”つまりマナを持たない人間”ノーマ”が生まれる。

向うの世界からドラゴンが攻めてきたりと、マナを持つ者たちは戦う術はない。

そこで、マナを持たないノーマを使ってドラゴンを撃退させて世界を維持してきた。

……けど、それも限界。だから、リセットしようとしてね」

エンブリヲが二つの地球を用意して、一つに合わさる

「統一理論。アウラのエネルギーを使って、二つの世界を融合し一つの地球に作り直す」

「簡単に言えば、今の世界とドラゴンの世界をくつつけて原初の地球に戻すというわけ

だ。

シミュレーションで何回も実験したから、後は実戦するだけ」

二人がそこまで説明し、今度はアケノミハシラに連れられていた。

エレベーターで最下層に降りて、アンジュの目にある光景は映る。

「ア、アウラ……!」

アンジュとリュガの目の前にアウラがドラグニウム発生器らしき物を付けられて幽閉されていた。

「どうだいアンジュ。あれがドラグニウムだ。

この世界の源であるマナは此処から発せられている、これで色々な事を楽しめたよ」  
「貴様ら……アウラを発電機扱いたのか!」

その事には全く否定しないカノープスは笑みを浮かばせる。

「人間達を路頭に迷わせる訳には行かないだろう。

リィザの情報のお蔭でドラゴン達の待ち伏せは成功し、大量のドラグニウムが手に入った。

これで計画を進められる……そう最終計画がね」

そう話すカノープスにアンジュは睨みかましていると、エンブリヲの後ろに銃があった事に気が付いたアンジュ。

アンジュはエンブリヲの銃を奪い、頭に銃を突きつける。

——カチャ!

「アウラを解放しなさい、今すぐ!」

銃を構えているアンジュに対しても余裕をかましているエンブリヲ。

「おやおや、ドラゴンの味方だったのか」

「いいえ、貴方の敵よ！」

兄を消し去り、タスクを殺そうとして、沢山のドラゴン達を殺した。

それで敵と考えるのは十分だわ！」

「ふふふ……君のお兄さんは少女たちを皆殺しにしてその罪を受けたのだよ」

「その、リュガの人格を破壊し我々の味方になれば……誰にも逆らえる気もない。

ドラゴン側が造った兵器、ドラゴメールをね」

「そこまで、知っているのか……!!」

「勿論だとも、あれは私の計画の邪魔者でしかない。

だが、こちらにある以上これで私には怖い物なしだ」

「そうは……させないわ！」

バツーン!!!

アンジュが持つ銃がエンブリヲの頭部を撃ち抜き、エンブリヲは血を流しながらそのまま倒れる。

次にカノープスに狙いを定める。

「アウラを解放しなさい」

「……やれやれ、君たちの目は節穴かい？」

カノープスは後ろの方に指をさすと、何事もなかった様に立っていたエンブリヲが居た。

「バカな!?!頭を撃ち抜いたのに!?!」

二人は倒れた方を見るとエンブリヲの死体が無い。

アンジュはエンブリヲを睨みつけて再びエンブリヲの頭を狙い、エンブリヲの頭を撃つ。

それに抵抗せずにエンブリヲは頭部を撃たれて倒れる。

しかし、また別の場所からエンブリヲが現れる。

「無駄だと言っているのに……アンジュ」

「あ……貴方、一体……!?!」

「アレクトラやパブロフから聞いているだろう……?」

その言葉に二人は思い出す、この世界を作った者たちの事——。

「つまり、てめえらは神様か……?」

「その呼び方は好きではないな、調律者と監察者だよ」

「調律者と監察者……?」

アンジュはエンブリヲの言った言葉に眩く。

カノープスはお道化したような態度で、口を開く。

「そう、世界を正す者として生きているのさ。1000年間ずーっと生き続けてね」  
「1000年!?!」

「そうだよアンジュ、私は死なないのだ」

そう言つてエンブリヲはアンジュの元に近づき、アンジュは近寄るエンブリヲに銃を構える。

「来ないで!!」

「そんなに冷たい言い方はしないでくれたまえアンジュ、それに私は君に頼みたい事があるんだ」

そう言つてエンブリヲは片膝を付いて、手を差し延ばす様に振る舞う。

「アンジュ……私の妻となつておくれ」

「はあ!!?!」

エンブリヲの発言を聞いてアンジュは思わず声が出て、カノープスはやれやれと笑う。

「私は気の強い女性は好まないね。女性はおしとやかじゃないと」

「どうだいアンジュ? 私と共にこの世界を新しく作り直そうではないか」

「お断りよ!! 死んでもあんたの妻になんか絶対にならないわ!!!」

アンジュは完全にエンブリヲの誘いを断ち切り、それにはエンブリヲは呆れかえる。

「フツ……やれやれ、困った花嫁だ」

「誰が花嫁よ!!勝手に名づけるな!!」

アンジュは銃を構えるが、カノープスはチョップで銃を叩き落した。

「ぐ……!!」

「あまり、乱暴にしないでくれよ。カノープス」

「失礼。けど……あんまりバンバン撃つと五月蠅いからね」

「本当はやらせる気はなかったのだが……、言う事を聞かない子には少しばかりお仕置  
きが必要だ」

エンブリヲはアンジュと共に別の場所へと連れて行く様に転送される。

カノープスはリュガ見て、ニヤリツと嗤う。

「では……リュガ、君の人格を破壊する為に、その心を壊さなきゃね」

カノープスの影がまるで悪魔の様な姿でリュガの前に立ちふさがる。

二人の運命はどうなるのか———?



## ミスルギ皇国での戦い 前編

救出

「うあああああああああああああああああああああああああああああ!!!」

アンジュは生まれたままの姿で何やら床に転がりながら暴れまわっていて、それをエンブリヲは眺めていた。

エンブリヲがアンジュの感覚と痛覚を全て快感へと変化させていて、それにアンジュは苦しめられていた。

彼はそれを使ってアンジュの心を徹底的に落とそうとしていた。

ようやく快感である呪いが解けて、アンジュは息荒らした状態で床へと倒れ込む。

エンブリヲはアンジュのそばにより、アンジュを見ながら問う。

「どうだねアンジュ、これで私の妻になる気はあるかい？」

それにアンジュは息荒らした状態で、エンブリヲを睨む。

「ぜ……絶対……に……アンタの……妻に……は……ならな……い!!」

アンジュの心の強さはエンブリヲの感覚変化さえも折らせる事は出来ない。

しかし、エンブリヲはため息を少し出しながらアンジュを見る。

「はあ…、やれやれ、困った子だ」

エンブリヲは指でアンジュ頭を突き、アンジュに再び快感の感覚を味あわせる。

「ああああああああああ!!! 熱い!!! いいいいいいいい!!!」

アンジュは再び転がりまくりながら暴れ、エンブリヲはその部屋を出ようとした時だった。

「タ、スク……!!!」

「ん?」

エンブリヲはアンジュの言った言葉に思わず振り向き、アンジュは目に涙を流し絶えながらタスクの名を言う。

「助けて…!! タスク……!!!」

エンブリヲはつまらなそうに部屋から出ていくとカノープスが壁にもたれていた。

「やれやれ手こずっているようだね。あのお姫様は」

「おもったより、強情だが……やりがいがあるよ。そちらも同じだろう?」

「普通の人間なら、精神崩壊なのに耐えるんだよね。」

やはりドラゴンの血を引いているのか、壊れなくてね。

……だから、興味深いし面白いよ。まあ、駄目なら生きてまま解剖というのもありだ

ね」

カノープスもまた、嗤って次の事を考えていた。



アンジュとリュガの帰りが遅いと感じたモモカはミスルギ王家の地下を調べてアンジュを探していた。

「アンジュリーゼ様ー！リュガさーん！何処ですか?!」

——バシユバシユ!!

何やらムチの音がしたのをモモカは振り向き、その場に向かう。

その場には裸のまま吊るされたリイザの姿が居て、そシルヴィアがムチでリイザを痛みつけていた。

「全く！何て汚らわしい！そこで反省していなさい!!」

シルヴィアはその場から離れて行き、隠れて見ていたモモカはすぐさまリイザの元に行き、彼女を解放する。

下ろされたリイザはモモカに水を渡されて、それを飲み干すとモモカを見る。

「……………どうして」

「ジュリオ様と一緒に、アンジュリーゼ様を貶めた事、忘れはしません」

アンジュの誕生16年祭の時に彼女をノーマと暴露し、

彼女に酷い仕打ちをしたことを忘れはしないと言うモモカ。

「だから……アンジュリーゼ様に謝ってください。それまでは絶対に死んでは駄目です」

アンジュに謝罪を申し込むモモカ、それだけの思いにリイザの目に涙が浮かび上がって来る。

あの時、アンジュに酷い事をしたとは言え、ただ謝れと言うだけで死んでは駄目だと言う事を言われれば、

涙を流さない者はいない。

「……皇宮西側の地下、皇族専用シエルター……彼女はきつとそこに居る」

それを聞いたモモカは有力な情報を手に入れた。

モモカはすぐにリイザを隠れる場所へと案内した後、まずアンジュの元へとすぐに向かった。

その次に、リュガを救おうと決意する。



一方の地下祭壇で、リュガは酷い拷問をかけられていた。

カノープスが視覚、触覚、痛覚を狂わせて、骨が砕かれ、全身が血ダルマにされ、炎で焼かれ、氷に閉じ込められたりと。

だが……彼はそれでも耐えたのだ、サラとの約束を果たすためにも決して折れなかった。

カノープスは次なる手を考えるからといって、元の状態に戻した。

「……元の状態に戻ったとはいえ、恐怖が残っているな」

それは、心臓を鷲掴みにされかけた恐怖。

カノープスがあんなことをするのは簡単に殺せるという意味でもあるからだ。

「あんな事ができるのなら、勝てるのか……心配になってきた……」

いつのまにか弱気になりかけている。

ガチャリとドアが開かれ、顔を上げると——エルドが立っていた。

「今度は父さんを使った幻か……」

「幻じゃない、俺は本物だ」

ペシペシッとエルドはリュガの顔を軽く叩き、きつかけをする。

眼に光が戻り、潤ませる。

「と、父さん……。本当に!？」

「ああ、遅くなつたな」

直ぐに拘束を解いて、自由の身になるリュガ。

「まずはアンジユを助けろ、彼女はここシエルターにいる。

それから、ここにお前らのパラメールが置いてある」

エルドはここから脱出するための地図を渡す。

「父さん、俺……。母さんの故郷の世界で全部知つたよ。母さんの最期とその覚悟も」

「……。そうか」

エルドはリュガの頭をポンポンと撫でる。

「……。辛い思いをさせて悪かつたな」

「困るね。人のペットを盗もうとするのは?」

カノープスが立っており、人差し指でチツチツ、とする。

「リュガ、走れ!!俺は後から追いかける!!」

エルドは拳銃を抜き、リュガは全速力で走る。

カノープスはヒョイヒョイと避けるが、リュガの回し蹴りがカノープスの顔に当たる。

よろけて、リュガはその隙にここから脱出する。

「やってくれたね……!!」

「何処に行くつもりだ？お前の相手は俺だ!!」

「いいだろう、まずは君から殺してやる」



一方――。

アンジュは完全に疲れ切った状態で床に倒れ込んでいた所にサリアが入って来た。

「不様ねアンジュ」

「サリア……」

アンジュは何とか目を動かし、サリアの方を見る。

「エンブリヲ様に歯向かうからよ、馬鹿」

「馬鹿はあなたの方よ、あんなゲス男に心中しちゃって」

「私にはもうエンブリヲ様しか残ってないもの。」

でもあんたは違う…：ヴィルキス、仲間、自分の居場所…：何で持ってる」

サリアはアンジュがどれだけ恵まれている事に羨ましがっていた。

しかし、アンジュは頭を横に振る。

「ううん、私は居場所だけは持つていなかった……」

アンジュの言葉にサリアは少し驚く。

「何時も居場所を作つていたのは、リュガの方だった。」

あいつは粗暴だけど、困っている人は放つておけなくて、

……痛みを悲しむこともずつと知つていた」

最初に来た時は、「殺人鬼ノーマ」と呼ばれていた。

母親の魂は機体に、自分はドラゴンの混血児と真実を知つて心が壊れてしまふかと思つていた。

だが、それでもリュガは受け入れて前を歩き続けていた。

「そう……あいつがそうしているのね。」

でもさつきも言つた通り、あなたは私やあいつよりも凄い物持つてるじゃない。

変身なんてしなくても十分よ……これ以上私から奪わないで！」

そう言い残しサリアは出ようとして、再びアンジュの方を向く。

「出て行きなさい、エンブリヲ様が戻つてくる前に……」

抵抗を続けければその内心を壊されるわ、それでも良いの？」

「えっ!？」

アンジュはサリアの行動に見開いて驚きを隠せない。



エンブリヲに忠実であるサリアが自分を逃がすなんて考えられなかったからだ。

「別にあんたを助ける訳じゃないからよ……不様なあんたを見たくないから」

そう言い残して出て行くサリア。

アンジュはサリアの首に手刀をかける。

「ありがとうサリア、これは助けてくれたお礼よ

”逃がした”より”逃げられた”事にしておいた方が罪は軽くなるでしょ……!!」

「余計な……お世話よ……この……筋肉……バカ……」

言い残した後にサリアは意識を失い、アンジュはサリアを寝かせて呼吸を整えている。

「アンジュリーゼ様!」

「モモカ!」

モモカと再会して、アンジュは走る。

奥の方にリュガの姿を確認し、合流して、急いでパラメイルを確保しに行く。



その頃のエンブリヲ達はアケノミハシラでラグナメイルを使い、アウラのエネルギー

である事をしようとしていた。

「諸君、揃ったな。ん？サリアはどうしたのだい？」

「それが何処を探しても見かけていないのです」

エンブリヲは頭を抱えながらも、ホログラフィック端末を展開させる。

「カノープスも帰ってこないな……ふむ」

見ると、アンジュがいなくなっておりサリアが気絶させられていた。

「逃げられたのか……？」

「リュガも逃げられてしまったよ、思わず邪魔が入ってね」

扉からカノープスが入ってくる所々、返り血がついていた。

「そちらもか？」

「だが……痛め付けておいたから、追ってはこないよ。」

それに、ミスルギ皇国から脱出することは……不可能だよ」

だが、二人は知らない。

ヴィルキスとは別の所で置いていた、鎖で縛られていたブルートのアイカメラが輝き

だし、引き千切る。



アンジュはモモカに支えられながら宮邸の外に出る。

リュガは先頭に立って、警戒しながら走る。

『何処に行くの？アンジュちゃん』

「!?!」

三人は空からやって来た追跡部隊であるエルシャとクリスに発見されてしまう。

「エンブリヲさんが探しているわ、戻りましょう」

アンジュは再びエンブリヲに捕まる訳には行かない。

あんな苦しい思いをするのは二度とゴメンだった。

「走れますか？アンジュリーゼ様」

「ええー」

そう言つてアンジュはモモカに引つ張られながら走り出しリュガも走る。

それにはエルシャは困つた表情になる。

「あらあら、仕方ないわね」

エルシャはすぐさまレイジアをアンジュの方に向かわせ、

それにアンジュ達は逃げているとアンジュの指輪が光り始める。

同時にアケノミハシラにあるヴィルクスが起動して青色に変化、ヴィルクスはアン

ジユの元にジャンプしてアンジュ達の目の前へと現れる。  
それに追跡していたエルシャとクリスがヴィルキスの登場に驚く。

「二人は先に行け、俺は後から追う」

「でも、直ぐに捕まるわ!!」

「心配するな……もうすぐ、来る」

「クリスちゃん!!」

「解っている……逃がさない!!」

攻撃をしようとしたが、背後から突然の衝撃波で二人は吹き飛ばされる。

プルートの前には降り立つ。

アイカメラが輝き、コクピットが開く。

「ありがとう!!」

「乗り込んで、二人は脱出するが——目の前の三機が出現する。

カノープスが所持しているトリアングルだ。

「あれは……!!」

「トリアングル……!!」

絶体絶命のピンチかと思われたが、シンギュラーゲートが開き、龍神器——サラたち

が現れた。

「借りを返しに来ましたよ。リユガ、アンジユ」

## ミスルギ皇国での戦い 後編

サラたちと再び会えたがサラは鼻をおさえていた。

「しばらく見ない間にとても淫らになって、それに風下だと何だか臭いますわ」  
「ううっ……」

サラに痛い所を突かれるアンジュは思わず表情を歪め、リュガは首を傾げる

「コックピットに入っていたら臭いはしないだろう？なんで解るんだ？」

「龍神器のコックピットは気圧や空気を安定するためには外の空気を取り入れるんだ  
よ」

ゼランディアが説明し、そういう設計なのかと納得するリュガ。

トリアングルムたちが行動を開始し、襲い掛かってくる。

「来るか……!!」

デネボラの手に持っているランスが形状変化し、三又の槍トライデントとなる。

対してプルートの両手をチェンソーに変形させて、鏝迫り合いをする。

スピカは氷の剣を六つ生成し、放つがサラは剣を抜き、叩き斬る。

遅れて、エルシャとクリスも現れるがゼランディアが向かおうとするが――。

「ゼラ!! その二人は俺たちの元仲間だ!! だから……」

「殺すなって、言いたいのか? 解った!!」

剣を振りかざして、牽制する。

しかし、アルクトウルスはアンジュを追跡する。

「どけっ!!」

プルートはデネボラを蹴り飛ばして、急いで後を追いかける。



ミスルギ皇国へと向かっていたタスク達。

ココ達は別の場所で待機を命じられていて今は居ない。

しかし、ミスルギ皇国の状況の異変に気付いたロザリーが皆に問う。

「おい皆、何か変だ。もう戦闘が始まってる!」

「クンクン……! タスク! ヒルダ! アンジュあっち!!」

「えっ?」

「はあ?」

タスクとヒルダはヴィヴィアンの反応を見て振り向く。

「アンジュ、あつちくく!!」

そう言つてヴィヴィアンは違う方向へと向かつて行く。

「クソっ!どうなつてるんだよ!」

そう舌打ちをするロザリー。

すぐにヴィヴィアンの行動に気付いたタスク。

「そうか!ヴィヴィアンはシルフィスの一族だから分かるんだ!」

すると、ヴィヴィアンの言う通り、ヴィルキスの姿が確認。

「助けに来たぞ!アン……『アンジュー!!』うぐ!」

ヒルダが言おうとした時にタスクがアンジュに向かって叫んで、それに割り込まれた事に思わず言葉を詰まらせる。

アンジュはタスクの声を聴いた途端に目に涙を出て来る。

「タスク!!」

だが、背後にアルクトウルスが迫っており4つの黒い石板を合体させて拡散熱線を放つ。

「こんな時に!!」

「来るぞ!!散開!!」

ヒルダの声に、一同は散開し熱線を避ける。



地面が抉り飛び、木々が吹き飛び、湖から水柱が大量に上がる。

「オラアアアアアアアアアアアアッ!!」

リュガは気合を入れた声をあげるとともに右手のパイルバンカーをアルクトウルの背中に叩き付けた

背後の攻撃に対処できないのかアルクトウルスはバランスを崩し、地面に落とされた。

「……あんときの借りを返したぞ」

追手が来ないうちに、脱出しようとしたその時、モモカに異変が起きる。

「うっ!」

「モモカ? どうしたの?」

アンジュがモモカに問うも、モモカは何も答えずにアンジュの手を掴み、操縦桿から離す。

それにアンジュは驚きながら動かさそうとするも、モモカの力とは思えない程の腕力でビクともしなかった。

徐々に高度を落として行くヴィルキスの異変にリュガ達は気づく。

「どうしたんだ!?!」

通信からゼラディアの声が入る。

『おそらくエンブリヲが操作しているんだろ。マナを生み出したのアイツだからそれくらい造作もない』

言い方を変えればマナを持つ人間はエンブリヲの操り人形みたいなものだ。

急いで、ヴィルキスを追いかけるタスクとリュガ。

ヴィルキスは近くのビルの屋上へと不時着してアンジュとモモカは外に放り出される。

ぶつかった衝撃でモモカは正気に戻ったようだ。

「あれ？私は今……」

「モモカ!？」

「やれやれ、強情な花嫁だ」

聞き覚えのある声にアンジュはもの凄く驚いた表情をし振り向くと、近くのベンチに座っていたエンブリヲが居た。

エンブリヲは呼んでいる本を閉じて、立ち上がって人差し指をアンジュに向ける。

「またお仕置きが必要かな？」

「つ!!!」

エンブリヲの指を見た途端、アンジュの心に途轍もない恐怖心が襲い掛かろうとしていた。

エンブリヲの足元に斧が刺さり、投擲した方向を見ると、機体から降りたりユガとタスクはアンジュ達の元に行く。

「アンジュ!!」

「無事か!？」

「タスク!リユガ!」

「ふむ……カノープスめ逃がしてしまったのか」

「いやはや、申し訳ないね」

声が見る方を見るとカノープスだ。

「てめえ、父さんはどうした!!」

「……どうなったと思う?今頃はボロボロに倒れているよ」



一方別の場所で待機をしていたココ達。

「皆……」

「無事アンジュを助けられると良いけど……」

ココとミランダはタスク達がアンジュを救出できるか不安に思っていた時だった。

「もう駄目！私行く!!」

「ええ!？」

「駄目よ！タスクさんやリユガさん達が此処に居ろつて命令されたでしょ！」

ココとミランダがマリカに待つようと命令をするも、マリカは自分の我慢を抑えられなかった。

「でも……今行かなきゃロザリーお姉様が危ないもの!!」

そう言つてマリカはココとミランダの命令を無視して飛び立つてしまった。



「アンジュ、ここは俺たちに任せて逃げろ」

「……二人とも、気を付けて」

アンジュとモモカは逃げ出し、タスクとリユガはエンブリヲとカノープスの前に立つ。

「ヴィルキスの騎士イシュト・ヴァーンとメイルライダー、バネツサの子……タスク!!」

タスクは自分から名乗りをあげながら走り出す。

「最後の古の民にして…アンジユの騎士だ!!」

そう言った瞬間にタスクは閃光手榴弾を投げ、閃光手榴弾の閃光にエンブリヲとカノープスは思わず目がくらむ。

エンブリヲはタスクが言った言葉、アンジユが言ったタスクを見て睨む。

「くっ…! そうか貴様が!」

「余所見をすんな!」

リュガの回し蹴りがエンブリヲの首を捉える。

きりもみに吹き飛ばされるエンブリヲだが、何事もなかったかのように起き上がる。

「ちっ…! …! …! 本当に死なないのかよ」

「こっちですよ」

カノープスが眼前に迫り、右手を振り下ろすがリュガはかわす。

立っていた場所が五本線に挟れている。

「っ?! …! …! …! なんだ、あの威力?!」

「ふふふ、造作もない事だよ。少し能力を使えばね」

カノープスの能力に驚かされるが、なんとかアンジユが仲間たちと合流するまで時間を稼ぐ二人。



ラグナメール、デネボラとスピカと戦うサラたちだが、敵の機体の性能が上でアウラの所までいけない。

「はやり今の戦力ではアウラを……」

サラはナーガとカナメに通信を入れる。

「引きますよ、カナメ、ナーガ」

『『ええっ!?!』』

二人はサラの言った言葉に驚きを隠せず、サラはそのまま言う。

「現有戦力でのアウラ奪還は不可能です。一度引いて体制を立て直します」

そう言つてサラは皇宮のそばに隠れているリイザに言う。

『リイザ、聞こえますか？ 貴女も合流するのです。』

貴女に何があつたのか今は問いません。

ですが多くの仲間を死なせた事を悔やんでいるのなら、より多くの仲間を救う為共に

戦いなさい!』

「サラマンディーネ様……」

その事を言われたリイザは少しばかり考えた後、決心を決めて外に出て飛ばうした時

だった。

彼女の近くの壁に銃弾が当たり、それにリイザは撃つて来た方を見ると、

ライフルを不器用に構えたシルヴィアがいた。

「大人しく地下牢に戻りなさい！さもなければエンブリヲおじ様に切開してもらいますわよ！」

「……哀れな子、ジュリオは、あなたのお兄様を殺したのは…あの男だと言うのに」

「な、何を言ってる？」

リイザの真実の話に思わず困惑するシルヴィア。

そしてリイザは空へ飛んでいき、それに慌てるシルヴィア。

カナメの碧龍號がリイザを乗せて飛び立ち、サラはビーム砲を撃ちまくった後にナーガ達とそのばから撤退した。

「くそっ！逃がすか!!」

ターニヤが思わず追いかけようとした所をエルシャがそれを止める。

「深追いは駄目よ……ん？……っ!!」

エルシャは皇宮の側の庭を見ると

アルクトウルの熱線の巻き添えを食らってしまった子供たちが死んでいて、

それにエルシャは思わず目を見開いてしまう。

「あつ……あつ……」

一方、クリスと対峙してるヒルダたち。

「ぐううっ！クリス強ええ……」

ヴィヴィアンがクリスの強さに思わず声を出し、ヒルダは舌打ちをして睨み返す。

「くそっ……」

「待ってくれよクリス!!」

ロザリーは必死にクリスに問いかけ、見捨てた事を必死に否定していたが、クリスはそれを耳も傾けず、自分の八つ当たりを人にぶつけていた。

ヒルダはどうすればいいかと考えていた所に。

「お姉様……!!」

マリカがのるグレイブがやって来て、マシンガンを撃ちながらクリスに向かって行つた。

それにヒルダ達は足を止めて、マリカを止める。

「やめろ！マリカ!!」

「邪魔……」

クリスがラツイーエルを投げて、マリカに向かって行く。

それにマリカは思わず目を瞑った。



しかし、金色の閃光が奔り——ゼランディアが刀を抜きラツイーエルを切り払う。

「……無事か？」

「あ、ありがとうございます」

「……急いでここから、離れるぞ。死にたくない奴は急いで後をつけてこい!!」

ゼランディアの号令に、ヒルダたちは驚くが領き後をついていき、戦線から離脱する。



なんとか逃げようにもエンブリヲがマナを持つ人間たちによって行くてを阻まれていく。

まるで誘導されるかのように……、そして、たどり着いたのが、何処かの庭園だった。優雅に紅茶を飲むエンブリヲとカノーパスが待っていた。

「くッ……」

「もう、逃げ場は無いよ。アンジュ……」

エンブリヲはゆつくりと歩むが、タスクとリュガなんとか追いついてアンジュを庇う様に立つ。

「ふむ……しつこいね。やれ」

エンブリヲは操作して、モモカを操る。

手には剣を持っており二人に斬りにかかる。

「モモカ!?!」

「Manaを持つ人間達は私の支配下にある。忘れたのかね?」

エンブリヲに言われた事にアンジュはエンブリヲを睨みつける。

しかし、エンブリヲは徐々に表情を恐ろしくしていく。

「また、調教しないとイケないようだね」

アンジュは恐怖に染まった顔になり、一歩ずつ後ろへと下がる。

「モモカ!! 負けちゃダメ!! 戻って来なさいよ!!」

アンジュの声を聴きモモカの目が正気へと戻った。

そして――。

「タスクさん……アンジュリーゼ様をお願いします!!」

「モモカさん、なにを!?!」

タスクはモモカの言葉に振り向き、モモカはエンブリヲに向かって行く。

ふらつきながらも剣を振り下ろし、アンジュを引き離してエンブリヲに向かって行く。

「フツ、愚かな」

エンブリヲは銃を構えてモモカに目がけて撃ち、それにモモカは胸に銃弾を受けてしまふ。

だが、そのままエンブリヲに向かつて行く。

「マナの光よ!!」

モモカは車をマナで動かし、エンブリヲはまだ動けるモモカを見て驚いた。

「何……!?!」

「やあぁー……ッ!」

モモカはそのまま剣をエンブリヲに向かつて突き刺し、

車はモモカとエンブリヲに突っ込んで行き、二人を巻き込んで壁を突き破って崖へと

落ちて行く。

「モモカ!!」

アンジュはすぐさま崖へと落ちて行くモモカに向かうも、既に落ちて行ってしまい、

車は地面に直撃して爆発していった。

その光景を見てしまったアンジュは信じられないまま啞然としてしまう。

「モモカー……!!」

いつの間にか傷一つないエンブリヲが立っていて、銃を構えて笑っていた。

「エンブリヲ!!」

「この私があのからいで終わると思っていたのか？」

私から離れて行ったホームンクルスなど、もう私には必要ない」

「てめえええええ!!」

リユガはエンブリヲを殴りに掛かろうとするが、カノープスが阻みリユガの首を掴む。

「やはり君は危険な存在だね。このまま殺してあげるよ」

ミシミシツと力を入れて、リユガの首を押し折ろうとする。

「うああ……がああ……!!」

なんとか振り解こうとするが、だんだんと抵抗する力が無くなり意識が遠のこうとするが……。

——ドゴツ!!

「っ!?!」

「俺の息子に手を出すな……!!」

カノープスを殴り飛ばしたのはエルドだ。

「父さん……!!」

「ワリイな、遅れちまって」

だが、エルドはボロボロになっていた。

あの時の地下祭壇で傷を負っていたのだ。

「やれやれ、君もしつこいね。無駄だというのが何故、解らない?」

タスクは隙をついて、アンジュを空中バイクに乗せてとある場所へと登録する。

「君は生きるんだアンジュ。必ず戻るから…君の元に…」

タスクは笑顔でアンジュに言い、それにアンジュは頭を横に振る。

「駄目…駄目よ! タスクツ!」

次の瞬間、タスクがアンジュに突如キスをする。

それにアンジュは思わず啞然とし、少し頬を赤くする。

キスを終えたタスクは持っているネックレスをアンジュに渡し、バイクはアンジュを

乗せて自動で飛び立っていく。

「タスク……!!」

「貴様!!」

その時、手榴弾が投げ込まれる。

現れたのはシュレディンガーだ、背中にはモモカを背負っていた

「落ちていくところをなんとか回収してね。しかし……この状況はあまりにも不利だ」

そう、ヴィルキスが無ければエンブリヲ倒すこともできない。

エルドは一つの決断をした。

「リュガ、お前は生きろ……」

強く抱きしめて、シュレディンガーへ渡す。

「シュレディンガー……いや、ニコル。リュガを頼む」

シュレディンガーは目を瞑り、リュガ、タスク、モモカと共に退避する。

エルドは傷だらけの体でカノープスを見据える。

「愚かな、神に勝つつもりかい？」

「……最後の希望は若者たちだ」

エルドは口に咥えていた煙草をプツと吐き、一気に駆け出す。

ポケットから金属製のボールを取り出し、操作する。

「後は頼んだ……リュガ!!」

カノープスに叩き付けてた瞬間——凄まじき閃光と爆炎が巻き起こる。

「父さああああああああん!!!」

リュガの慟哭が夕焼け空に響き渡る。

## ファイナルカウントダウン 前編

ミスルギ王国ではエンブリヲが計画の最終段階へと移そうとしていた。

「ラグナメール・コネクターページ」

——パシユ！

「くっ!?!」

そこには何故か少しばかり頬を赤くし恥ずかしそうにしているサリアが居た。

「耐圧角展開、ドラグニウムリアクター・エンゲージ、リーブレン共振器接続、全出力供給開始」

アケノミハシラに保管されているラグナメールが連動して光始め、

エネルギーとしてアケノミハシラの頂上に向かいそして散布される。

その様子を映像で確認したエンブリヲ。

「準備は整った……しかし」

——パシユ!!

「ぐっ!?!」

エンブリヲは膝に居るサリアの尻を叩いていたのだ。

「アンジュが居ないとは……何故逃がした？」

「っ……！」

——パシユ!!

「うっ!どうしてアンジュが必要なんですか!？」

私はずっと……エンブリヲ様に忠誠を誓つてきました……エンブリヲ様の為に戦つてきました……!

なのに……またアンジュなんですか!?!私はどう……用済み何ですか!?!」

サリアの思いを聞いたエンブリヲはその心には何にも感じないまま話す。

「私の新世界を作るのは強く賢い女たちだ、だから君達を選んだ……。」

アンジュも同じ理由だ……愚かな女に用はない」

「!？」

エンブリヲの言葉を聞いたサリアは思わず絶句し、カノープスは黙つて聞いていた。

エンブリヲはサリアを下ろして、冷たく言う。

「アンジュは必ず此処に来るだろう、私を殺す為に。」

サリア、君が本当に賢く強いなら——やるべき事は分かるな?」

聞かされたサリアは急いで下着をつけ直して、急いで敬礼をして言う。

「アンジュを捕え、服従させます」



「期待しているよ、私のサリア」

サリアは唇を噛みしめて何やら思いつめるのだった。

そして、エンブリヲはカノープスの方を向いて言う。

「カノープス。リュガとアンジユの騎士を名乗る男を葬れ」

「解っていますよ。貴方は計画の準備をチェックしてみては？トラブルがあったら大変です」

「……言われずとも解っている」



「二つの地球を融合だど!?!」

シュージが驚いた事実にはリイザは頷く。

「制御装置であるラグナメイルとエネルギーであるアウラ。

エンブリヲは二つの地球を時空ごと融合させ……新しい地球を……

ゲホツ!!ゲホツ……!」

リイザは突如せき込んでしまい、体力的に無理と判断したマギーが止める。

「……彼女は休ませておこう」

テンゲンがそう言ってマギーと共にリイザを医務室へと――。

一方でエルドの死を知らせて、仲間たちは悲しみに暮れていた。

「エルド、勝手に死ぬなんて……」

「……一番辛いのは、リユガだよ。母を失い、今度は父を失うなんて」

ゼランディアは両目を瞑りながら、口を開く

「感情的になるのは解る。」

だが、悲しみに暮れている間にもエンブリヲは最終計画を発動する。

止められるのは、リユガとアンジュの二人だ」

「それで、アンジュリーゼさまは何処へ？」

「俺が前に住んでいた無人島にいるはず。あのバイクにはそういう風に設定してある」

「それなら、お姫さまを迎えるのはタスクとモモカに任せよう。同じタイプのバイクが

ある」

「ありがとうございます、ニコルさん」

タスクとモモカはアンジュリーゼと合流する為に、格納庫へと向かう。

「……それで、リユガは？」

「俺が行こうかと思ったが……サラを見ると、言いだしてな」



サラはリュガの部屋に入る。

スタンドの電気しかつけていなく膝を抱えて座っているリュガがベッドの上にいた。

サラはリュガの前に立ち、話しかけようとするが、どんな言葉をかければいいのか解らなかつた。

「……リュガ」

呼ばれてゆつくりと顔を上げるリュガ。

両目は泣いていたのか眼が赤く、涙の後がある。

「……サラ、か。ごめんな。こんな弱い姿を見せて……」

しばらくの沈黙が続き、リュガは父の別れた時を思い出す。

「俺があの時……」

カノープスにつかまっていなければ、父さんが、父さんが死ぬようなことは無かつたのに……!!

俺のせいだ……!!」

ギリリツと二の腕に爪を立てて、傷つけ、血が滲む。

サラはそんなリュガを見て、痛々しく、耐えられなかつたのか、包み込むように抱き

しめた。

「リユガ、貴方が……そんな弱気では、ご両親が哀しみます。

お二人がどんな想いで、貴方に託したのですか？

それをよく考えてください……」

厳しくも優しく、リユガを励ますサラ。

そうだ、ここで自分が折れてしまったら、両親に顔を合わせられない。

リユガはゆっくりと立ち上がり深呼吸をする

「……ああ、そうだな。ありがとうサラ」



「メイルライダーのヒルダ殿、我々アウラの民はノーマとの同盟締結を求めます」

「同盟……？」

ヒルダはその事を聞いてゼランディア達を見る。

「我々の龍神器だけではエンブリヨの防衛網を突破する事は困難、カノープスが所持しているトリアングラムも脅威だ」

サラの言葉にヒルダは思わず考え込む。

「確かにアタシ等だけじゃあラグナメールもあのトリアングルにも手も足も出ない……。」

「良いよ…同盟結んでも、ただし、アンジユが帰ってきたらだ」

『おや？アンジユは戻っていないのか？』

「皆は扉の方を向くとエマ監察官がやって来た。」

「しかしバルカンは何故か警戒して唸りはじめ、エマの様子がいつもと違う事に気が付く。」

『やれやら…何処に行ってしまったのやら、我が妻は…』

「監察官さん？」

「エマがマナの通信画面を開くと、そこにエンブリヲの画面が映る。」

「エンブリヲ！」

「バルカンが思わず向かってしまい、それをエマが叩き落としてしまう。」

「大丈夫か！」

「ゼノンはバルカンの方へ駆け寄り、介抱する。」

「どうとう狂ったか、てめえ!!」

「ヒルダが銃を構えた瞬間、ゼランディアは止める。」

「待ちな。彼女は操られてるだけだ」

「何……!？」

ゼランディアの言葉にヒルダが驚く。

「その通りです、逃げた女に追いつがるなど……。不様ですわね、調律者」

『フン、ドラゴンの姫と皇子か』

其処に皆と合流したサラとリュガ。

エンブリヲはサラとゼランディアを見て鼻で笑い、サラは剣をエンブリヲに向けて言う。

「焦らずとも、すぐにアンジユと共に伺いますわ。

その首を貰い受けにじつくりと怯える事ですわね」

『ほう……。果たしてできるかな?』

「……必ずやるんだよ」

『ふん、人間でもノーマでもドラゴンでもない君にできるか?』

その言葉にヒルダたちは驚愕し、リュガを見る。

「……神を殺すのはいつだって、ドラゴンと人間だ」

リュガはサラの方を見て、サラは頷く

「ラアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

サラの雄たけびによりエマのManaが不安定となって破壊され、エマは正気を取り戻し

て気を失う。

「監察官さん!？」

ヴィヴィアンが問いかけ、すぐさまラプラスが見る。

「……大丈夫。気を失っているだけよ」

「ヒルダ殿、エンブリヲはなりふり構わずにアンジュを探している様子です。

エンブリヲの眼をかわしアンジュを助け出す事が出来ますか？ 貴女に………」

「……ぐ」

サラの言葉にヒルダは言葉を詰まらせる。

エンブリヲの目をかわす事などヒルダには出来ない事だった。

それにサラは笑みを浮かばせる。

「アンジュは帰って来ます。タスク殿が必ず連れて」

「はっ！何であいつが!？」

「理由は簡単だ……あいつはアンジュの騎士だからだ。

僅かとはいえ、確かな繋がりがあるから」

その事にヒルダは言葉を止まってしまう。



再び自身の部屋に戻ったリユガ。

タスクとモモカがアンジュを連れて帰って来た時が、最後の戦いが始まるだろう。

これまで、幾つも死ぬような危険性があったが怖くはなかった。

だが、今度のは……恐怖はある、いや、いままで恐怖を感じなかったのが異常だったのかもしれない。

「ははは……、今更になって人間らしきが出たという事か」

ドアがノックし、サラが入ってくると同時に、鍵をかけた。

「サラ……?」

「次が最後の戦いとなるでしょうから、お互い、勇気を出そうと思ひまして来ましたわ」

「勇気……?」

明かりを消して、サラは身に纏っている服を脱ぎ、裸になる。

リユガは驚きつつも、彼女の白い肌をチラチラと見る。

一糸纏わないサラゆつくりと近づき、リユガの上着を脱がす。

互いに見つめ合い、頬を染める。

「サラ……」

「リユガ……」



互いに名前を呼び、キスをした後、二人はベッドに倒れる。  
二つの影が一つに重なり合う――。